

## 〔一〕歌物語

## ◎伊勢物語 (いせものがたり) 二卷

歌物語の先頭に立つもので、「昔男ありけり」または「昔男云々」の文句で始まる多くの小説話の集合から成つてゐる。「昔男」の何人であるかは明らかに示されず、また各説話の間には表面上何等の連絡もないが、大部分は在原業平の和歌を中心として成つた説話であり、また現存本は、「昔男」の初冠にはじまつて、その臨終にをはる一代の戀愛生活史とも見られる體裁を持つてゐる。但し實在の人物の名を現はして書かれた説話や戀愛に直接關係のない説話も若干まじつてゐる。

現今は一般に「伊勢物語」と呼ばれてゐるが、古くは一定の名稱がなかつたらしく、「源氏物語」に「在五の物語」、「狭衣物語」に「在五中將の日記」、「更級日記」に「在中將」など見えてゐるのは、皆本書を指したものである。在五・在五中將・在中將は皆在原業平を指すもので、本書の歌の多くが業平の作であるところから、このやうに呼ばれたものであらう。

「伊勢物語」といふ書名の由來については、古來多くの説がある。そのうち主要なものを挙げれば、(一)伊勢の御が著作または加筆したためであるとするもの(一條兼良の「愚見抄」三條西實隆の「直解」、細川幽齋の「闕疑抄」北村季吟の「拾穂抄」など)。(二)「伊勢」はひがごとの譬で、「ひがごと物語」の意であるとするもの(藤原清輔の「袋草子」の一説・契沖の「臆斷」など)。(三)「いせ物語」の約略とするもの。(四)「いせ物語」の轉化とするもの。(五)伊勢齋宮の記事が主眼であるためとするもの(「袋草子」、賀茂真淵の「古意」、上田秋成の「よしやあしや」、藤井高尚の「新釋」など)。(六)もと伊勢國狩使の段が巻頭にあつたためとするもの(録田正憲氏の「詳解」その他)などで、これらのうち今は最後のものがほぼ通説となつてゐるが、なほ研究の餘地があると思はれる。

作者

作者についても諸説區々であるが、これを大別すれば、(一)業平とするもの。「袋草子」に「伊勢物語……業平朝臣所爲也」と見え、契沖の「臆斷」にはその根據として、文中に謙退卑下の詞があること、他人の憚るべき男女の秘事が記されてゐること、顯昭の「袖中抄」などの説によれば、朱雀院の塗籠に業平の自筆本があつたといふことなどを擧げてゐる。(二)伊勢とするもの。——定家本(流布本)の奥書中に一説として記され、その理由としては「伊勢物語」といふ題號と、伊勢集の文體の類似とが擧げられてゐる。(三)業平・伊勢何れとも決定し難しとするもの。——定家本(流布本)の奥書に始まり、「愚見抄」「直解」「闕疑抄」などは皆これに従つてゐる。但し「愚見抄」以下のものが伊勢の加筆をそれとなく認めてゐることは、書名の根據を求めてゐることによつて知られる。(四)不明にして強ひて穿鑿すべからずとするもの。——真淵の「古意」に始まり、高尚の「新釋」もこれに従つてゐる。その根據としてあげるところは、(イ)芥川行幸の折の行平の詠があるのみならず、在原元方・紀友則・壬生忠岑、更に下つて天曆頃の橋直幹の歌をさへのであるから、業平としてはもちろん、伊勢としても時代が合はないこと。(ロ)業平と浮名の立つた

二條后は、陽成天皇の御母で、天皇は讓位の後天曆の初頃まで御在世であり、その間に母后の密事を物語に記すことはあり得ないことなどで、これらの理由により、「伊勢物語」の成立を「後撰集」以後であると見、作者は不明であるとしてゐる。(五)業平原撰・後人加筆とするもの。——これにも加筆者を伊勢とするもの(季吟「拾穂抄」など)・滋春・棟梁等とするもの(本居内道の「和歌の浦鶴」など)・加筆者不明とするものなどがあるが、藤岡作太郎博士の「國文學全史平安朝篇」以來、この最後の説がほぼ通説として採用されてゐる。

「伊勢物語」の成立の問題は、作者の問題と密接に關係して居り、その年代は、大別して(一)「古今集」以前とするものと、(二)「古今集」以後とするものとに分れるが、業平原撰・後人加筆説をとれば、原作は「古今集」以前で、それに「拾穂抄」以後まで補筆されたものとしなければならない。兒山信一氏の「新講和歌史」は、現行の「伊勢物語」に三段の過程を立て、第一段を業平自記の覺書、第二段をそれを材料とする物語原形の成立、第三段を後人の追加と見、第二段の物語原形の成立は、仁和・寛平頃即ち「古今集」の成立に延喜より前とし、第三段の後人の追加を延喜以後天曆頃までと推定し、第二段の作者は或一人の男性であり、第三段の追加は幾人かの手で幾回かに亘つて行はれたものと考へてゐるが、物語原形の作者を業平以外の人とすることの正否についてはなほ研究の餘地があると思はれる。

「伊勢物語」諸異本の比較研究によれば、物語原形の製作後相當長期間に亘つて、或は加筆され、或は削除されて、流動變化しつつあつたことは確かで、その點からいへば「伊勢物語」は後の「平家物語」や多くの

成立

特性

説話集などと同様に、一種の成長文藝と見るべき性質を持つものと思はれる。随つて物語原形の如何なるものであつたかを推定すると同時に、それが如何なる事情のもとに如何に流動變化したかの経路をしらべることも必要であると思はれるが、その方面の研究はなほ今後に遺されてゐるところが多いのである。

諸本

古寫本

「伊勢物語」には多くの異本がある。それは成長文藝的性質から来る當然の結果であるが、一方繪巻物として傳はつて、巻物が斷切れたために段の順序が亂れたといふやうな機械的な理由や、六條家以下の歌人の傍註が本文中に直入したといふやうな事情もそれを手傳つてゐる。かくて平安時代に於て既に多くの異本が生じたのであるが、古來諸書に伊勢七本として次の諸異本が擧げられてゐる。

(一)業平自筆本 (二)伊勢中書本 伊勢が業平本中十七段に萬葉の歌を入替へて改作し、宇多院に奉つたものと傳へられる。十七段を十二段としたもの、七段としたものもある。(三)具平親王本 裏書を表に書き加へてある。普通本より歌數が多いとも少いとも傳へられる。(四)安部師安本 筒井筒の段を最初におき、順序が改められてゐる。(五)加茂内侍本 齋宮下向の段がなく、師安本に大差ない。焼残り本で、末は芥川行幸の段で終る。(六)高二位尼本 業平本に自分の歌物語を少し入れたもの。普通本より歌も物語も少い。高内侍本ともいはれる。(七)長能狩使本 伊勢齋宮の段が始めにある。(以上各本の説明は、大津有一氏が宮内省圖書寮藏「伊勢物語抄」同「伊勢物語聞書」池田龜鑑氏藏「伊勢物語聞書」無窮會藏「伊勢物語新考」等十四書について調査された結果を岩波講座「日本文學」に發表されたものに據つた。)

第二篇 平安時代 (物語)

以上諸本の由来・系統・内容・傳承・相互の異同等についての詳細のことは分らないが、「伊勢物語」には早くから多くの異本が存在したことは、これによつて窺はれる。なほ「袋草子」・「袖中抄」・「古今集註」などには泉式部本・小式部内侍本などに關する記事が見えてゐる。

現行本の多くは藤原定家筆寫本の系統に屬するもので、それには次の三種が知られてゐる。

一、天福本 卷末に、業平・行平・兼有富・二條后・河原左大臣融等の年譜その他の勅物があり、奥書に「天福二年正月廿日己未申刻凌桑門之盲目連日風雪之中途此書寫爲授鐘愛之孫女也同廿二日校了」とあり、天福二年は定家七十三歳の時でこの本は定家三本中最後の書寫に係るものであらう。六半の小本で、いつの頃からか禁裡の御本となつたのを、長祿二年に後花園院より三條西實連が拜領し、その歿後一旦徳川親元の有となつたが、親元の歿後、長享三年に再び三條西家に贈られ、實隆の手に歸したもので、そのことは三條西家藏「伊勢物語」の貼紙及び「實隆公記」長享三年六月八日の記事によつて明らかになつたが、その後の行方については數説あり、細川兩齋の「關疑抄」には、實隆より伊勢へ遣はしたといひ、和田以悦の「伊勢物語集註」には、師乗阿の説に基づき、實隆より駿河の今川氏親へ遣はし、今川家より更に甲州の武田信玄に傳はり、兵亂で亡失した由を記してゐる。

天福本系統の古寫本で、所在の明らかな有力なものとしては、次の三種が知られてゐる。

○宮内省圖書寮所藏本 一冊 天文十六年冷泉爲和寫

○三條西家所藏本 一冊 筆者書寫年代共に不明、定家自筆と傳へられてゐるが、書寫年代が鎌倉期まで遡るものとは見られないといふ。

○池田龜鑑氏所藏本 一冊 長祿二年法橋玄津寫と見られるもので、別にこの本は定家自筆本を書寫したものである由の正徹の奥書が添へてあるといふ。

二、武田本 本文は天福本と同種のもので、大津氏の調査によれば、兩者の間に約三十箇所の小異があるばかりである。奥書に

「合多本所用捨也可備證本

近代以狩使事爲端之本出来末代之人今案也更不可用之

此物語古人之説不同或稱在中將之自書或稱伊勢之筆作就彼此有書落事等上古之人強不可尋其作者只可觀詞華言葉而已戸部尙書判」とあり、定家の民部卿時代すなはち建保六年(五十七歳)より嘉祿三年(六十六歳)までの間に成つたもので、定家三本中最初の書寫であらう。「關疑抄」によれば、この本は後土御門院の勅物となつてゐたのを、後奈良院の時能登の島山修理大夫福胤(義統)が拜領し、職亂で一時紛失したのを、越前朝倉入道宗順が探し出して、若狭の武田伊豆入道紹眞につたへ、その後三好修理大夫長慶に傳はり、長慶の歿後、天正十六年の秋に和泉の堺より求め出して細川兩齋が所持してゐたといふ。一時武田氏の手にあつたために武田本と呼ばれるのである。しかし「實隆公記」には明應七年六月二日の條に「武田所持本」のことが見え、土御門天皇の明應七年頃には既にこの本が武田氏の有であつたことが明らかにされたから、「關疑抄」所載の傳來に關する記事は、そのままに信ずることが出来なくなつた。兩齋以後の傳來については、近藤守重の「好書故事」卷五十二書齋四の記述により、兩齋より尾張の徳川忠吉の手に移り、忠吉の歿後秀忠に渡り、秀忠より家康の手に入つたことが分るが、その後の行方はまだ不明である。

武田本系統の寫本は他の二者の比して著しく少いが、次の四種は比較的有力なものといはれる。

○四高圖書館所藏本 一冊 慶長二年二月也足叟(中院通勝)の奥書及び寶永五年六月生一堂人平の奥書によつて、兩齋筆本を通勝の轉寫したものを更に轉寫した本であることが知られる。

○岩瀬文庫所藏本 一冊 奥書によれば、通勝筆本を轉寫した本が鳥丸家に秘藏されてゐたのを、鈴木重規が更に轉寫したものである。

○宮内省圖書寮所藏本 一冊 筆者並びに書寫年代未詳。

○高野辰之博士所藏本 一冊 奥書に「明應三年十月十七日書終」とあるが筆者は明らかでない。他の武田本には本文の行間に勘物が記されてゐるが、この本にはそれがなく、また第三十六段に、他の武田本にはない返歌「いはりと思物からいまさらにかまことをか我はたのまむ」があるのが特異の點である。

三、流布本 定家三本中最も早く世に出て、多くの轉寫を經たために、この系統の本には本文の錯亂が殊に多い。奥書に「伊勢物語」の作者書名等に関する考案を記し、終に「先年所書之本爲人披借失仍爲備謄本重所校合也 戸部尙書」在判」とあるが特徴で、三本中定家二度目の筆寫らしいが、現存するこの系統の寫本中最古のものといはれる千葉胤明氏所藏鎌倉末期書寫本には、「戸部尙書」の記載なく單に「在判」と記されてゐるから、定家の戸部尙書「すなはち民部卿」時代に筆寫されたものかどうかは明らかでない。

この系統の本には、「以祖父朝眞筆本不違一字書寫校合之可備證本矣藤爲相」の奥書を有するものが多く、それらの本には、流布本特有の奥書の次に「近代以侍使事爲端之本出來云々」といふ武田本の奥書を轉載してあるのが共通である

が、これによつて爲相系統の本と武田本との接觸が考へられ、その接觸がまた本文錯亂の一原因をなしたものと考へられる。

以上三種の定家本は、何れも章段百二十五段、歌數二百九首(前出高野博士本は例外)で、もと本文の辭句に小異同があつた外、大體同一の内容を持つたものである。

なほ定家本系統の本で近時複製または刊行された有力な本には次の數種がある。

○守屋孝藏氏所藏本 一冊 鎌倉時代寫 傳良經筆 (古典保存會第三期複製)

○最明寺所藏本(片假名本) 一冊 鎌倉時代寫 傳時頼筆 (古典保存會第四期複製)

○千葉胤明氏所藏本 一冊 鎌倉時代寫 (新校群書類從)

○靜嘉堂文庫所藏本 一冊 傳慈鎮筆本 (改造文庫)

○井上通泰氏所藏本 一冊 傳兼良筆本 (日本古典全集)

光悅本以下江戸時代の諸刊本及び諸註釋書は、特殊のものを除き皆定家本系統の本によつてゐる。定家本以外で内容の知られる本の主要なものに次の數種がある。

○朱雀院塗籠本 奥書に「此本者高二位本朱雀院のぬりごめにをさまれりとぞ」と見えるもので、もと高二位(高階成忠)の筆寫に成り、朱雀院の塗籠に納められたので塗籠本の名を得たもの。章段百十六段、歌數百九十八首。章段の順序、本文の辭句等にも定家本と異なるものがある。

この系統の本の刊本には「群書類從」所收のものがあり、定家女民部卿局の眞蹟本を轉寫した本を底本に用ひてゐる。

池田龜鑑氏はこれと同系統の古寫本を所蔵されてゐるといふ。  
なほ伊勢の神宮文庫に「勢語権龍」と稱する本があるが、これは章段百三十三段、歌數二百十九首で、諸本中章段歌數最も多く、本文も権龍本系統とは見られず、定家本に近いものである。

○眞名本 六條宮具平親王御撰と傳へられ、六條本とも呼ばれる。賀茂眞淵は古本としてこれを推賞したが、本居宣長は「玉かつま」の中でその用字法を根據としてこれに反對した。恐らく平安時代末か鎌倉時代に假名のを眞名に書き直したものであらう。章段の數及び順序は定家本と同一であるが、歌數は二百七首である。寛永二十年の刊本があり、「續群書類從」にも收められた。

○爲家本 屋代弘賢が所持し、爲家自筆と稱せられた一異本であるが、今所在が知られない。「参考伊勢物語」に引かれたのによれば、章段百二十四段で、定家本に比べて數段の出入があり、且順序を異にする所も少くない。

古版本

○光悦本 二卷 慶長十四年 (刊本中最古のもの)

○嵯峨本 二卷 (前者と共に定家天福本系統のもの)

○眞字伊勢物語 二卷 寛永二十年 (眞名本の刊本である)

○群書類從本 (第三百七) (権龍本を底本にしたもの)

○舊本伊勢物語附考異 二卷 建部綾太理校訂 (綾太理の偽作であらう)

その他寛文十一年版・承應三年版以下多數の刊本があり、何れも定家本系統のものである。

活版本

○群書類從 (第十一輯) ○新校群書類從 ○日本文學全書 (第一編) ○國文大觀 (第三卷)

○國文叢書 (第六卷) ○日本文學大系 (第二卷) ○有朋堂文庫「平安朝物語集」

○國民文庫 (第九) ○日本古典全集 (第三期) ○岩波文庫「参考伊勢物語」 ○改造文庫

註釋書

「伊勢物語」の註釋書は數十種の多きに上るが、そのうち主要なもののみを抜いて次に掲げる。

○伊勢物語隨腦 一卷 傳在原滋春 後人偽作

○伊勢物語知顯抄 三卷 傳源經信 後人偽作 (續群書類從)

○伊勢物語愚見抄 五卷 一條兼良 長祿四年成 (續群書類從)

○伊勢物語直解 一卷 三條西實隆

○伊勢物語闕疑抄 五卷 細川幽齋 文祿五年成

○伊勢物語拾穂抄 五卷 北村季吟 延寶八年 (國文學註釋叢書)

○勢語臆斷 五卷 契 沖 元祿五年成 (契沖全集 國文註釋全書)

○伊勢物語童子問 十三卷 荷田春滿 享保頃成 (荷田全集)

○伊勢物語古意 五卷 賀茂眞淵 寛政五年 (賀茂眞淵全集)

- よしやあしや 一卷 上田秋成 寛政五年
- 伊勢物語新釋 六卷 藤井高尙 文政元年 (國文學註釋叢書)
- 勢語圖說抄 五卷 齋藤彦齋 (國文學註釋叢書)
- 伊勢物語詳解 一冊 鎌田正憲 明治四十二年
- 評釋伊勢物語 一冊 窪田空穂 明治四十五年
- 伊勢物語私記 折口信夫 昭和五年 (國文學註釋叢書)
- 對伊勢物語新講 一冊 永田義直 昭和七年
- 口譯書
- 全譯伊勢物語 一冊 吉井 勇 大正六年
- 哀傷伊勢物語 一冊 水島重治 大正十一年
- 王朝文學叢書 (第一)
- 研究書
- 參考伊勢物語 二卷 屋代弘賢 文化十四年 (國文學註釋叢書・岩波文庫)
- 伊勢物語新考 品田太吉 (歴史と國文學昭和六年十一月)
- 小話集としての伊勢物語 窪田空穂 (文章世界五の十四)

- 伊勢物語研究 窪田空穂 (日本文學講座)
- 伊勢物語の創作心理 齋藤清衛 (國語教育十二の九)
- 伊勢物語の成立 高崎正秀 (國語と國文學昭和五年一月)
- 伊勢物語の原本について 大津有一 (國語と國文學昭和六年四月)
- 伊勢物語―定家本の展望 大津有一 (岩波講座・日本文學)
- 近代文學意識より見たる伊勢物語と竹取物語 金子岩吉 (國漢研究昭和七年二月)
- 異本伊勢物語に就いて 佐佐木信綱 (文學昭和七年二月)
- 伊勢物語に就きての研究校本編 池田龜鑑 (昭和八年)

◎平中物語 (へいちゆうものがたり) 一卷

近年世に知られた歌物語の一種で、和歌を中心とした説話三十七から成つてゐる。冒頭の一節は「今はむかし」なる語に始まり、時の帝の母后の甥の子に當る男が、戀故に失脚して、後に榮達する話であり、第二節以下も、「又この男」・「さてこの男」・「又この同じ男」などの語を用ひて、同一人物の話であることを示してゐるが、各説話は個々別々のもので、それらの間に有機的な聯絡は殆ど認められない。しかし全體として或一人の男性の戀愛生活を記述する意圖のもとに成つたものであり、その點で「伊勢物語」よりも一步普通の物語に近寄つたものといへよう。

主人公

全篇の主人公と見られる男は、書中二個所にその名を「へいちう」と記されて居り、第一節に「帝の母后の御見末」ちゝはたそのきさきのおひにて」などある點から見て、平貞文を指すものと思はれる。貞文は平中と呼ばれ、桓武天皇の曾孫に當る茂世王の孫で、茂世王は宇多天皇の母后班子女王の御兄であるから、「帝の母后の御見末」といふのに相當し、貞文の父好風は班子女王の甥であるから、「ちゝはたそのきさきのおひにて」といふのに相當するわけである。

成立

「平中物語」は大體「伊勢物語」につき、「大和物語」とほぼ同時代のものと思はれるが、作者も製作年代もたしかなことは分らない。但し本書と平貞文との關係は、「伊勢物語」における在原業平の關係を思はせるものがある。年代については、池田龜鑑氏は、書中の最後の説話に見える「右大臣」を藤原顯忠を指すものとし、顯忠が右大臣に任ぜられたのは、村上天皇の天徳四年八月廿二日であるから、この物語はこれ以後に成立したものと見て居られるが（岩波講座「日本文学」）、「右大臣」は果して顯忠を指すかに疑があり、随つてその年代についてはなほ研究の餘地があると思はれる。

書名

「本朝書籍目録」假名の部に「平中日記」、「河海抄」に「貞文日記」と記されてゐるのは、共に本書の別名であらう。靜嘉堂文庫所蔵本の題簽には「平中物語」と書かれてゐるが、「仲」は「中」とする方が正しいやうである。

諸本

本書は傳本甚だ少く、今日までのところでは、靜嘉堂文庫所蔵の藤原爲相筆と傳へられる寫本が知られてゐるだけである。

参考書

研究書

○大和物語の異本と平中物語の發見 川瀬 一馬（國文學誌昭和六年十一月・十二月）

### ◎大和物語（やまとものがたり）二卷

内容

「伊勢物語」につき、「平中物語」と相並ぶ歌物語で、和歌を中心として書かれた百七十三篇の説話を集めてある。「八雲御抄」に「伊勢物語・大和物語・源氏物語歌人の見るべきものなり」と見えるやうに、古來歌人必讀の書の一とされてゐた。各説話の主人公に實名を用ひたものが多く、また概ねその時を明らかに記してゐる點などは、「伊勢物語」と違つてゐる。取扱はれた事件の年次の明らかかなものは、弘仁より天曆頃に及び、延喜・延長頃のものが多い。人物は嵯峨天皇・陽成天皇・宇多天皇・醍醐天皇・保明親王・敦固親王・源清隆・平兼盛・小野好古・藤原朝忠・藤原兼輔・平貞文・桂皇女・依子内親王・京極御息所・伊勢・西三條良相の女・藤原千兼の妻その他で、すべて百三十餘人に及び、場所も京都をはじめ和泉・紀伊・陸奥・筑紫など十六箇國に亘つてゐる。

性質

巻頭から下巻のはじめ二三枚までの百三十餘篇は、戀愛譚その他諸種の逸話を記してあるが、概ね説話が簡單で、和歌を主として、その詞書をやや詳しくしたやうなものであり、後の四十餘篇は、口碑・傳説に取材したものが多く、諸種の事件の顛末を記し、説話が長く、中には短篇小説的な機構を持つたものを含んでゐる。全體として和歌を中心として書かれた物語たる點に於て、「伊勢物語」系統の歌物語たる性質を持つて

むるが、一方打聞的・雜纂的性質を具へて、後の説話集への進展を孕むと同時に、後半の説話の如く、事件の發展に興味の中心をおいたものは、小説物語への進展を約束する過渡的形態を示してゐるのである。取扱はれた材料には、「伊勢物語」「平中物語」「古今六帖」及び「伊勢集」「檜垣集」などの私家集から取つたと思われるものや、「萬葉集」に傳はる津の國菟原乙女の傳説・猿澤の池に投身した采女の傳説、「淺香山影さへ見ゆる」と詠んだ采女の傳説、當時の口碑と思はれる鞍拾山の傳説、難波の葦刈の傳説などを含んでゐる。

「大和物語」といふ書名の由來については、大體五種の説が行はれてゐる。(一)清輔の「袋草子」に「其名目物語の由敷」とあるのに基づいて、日本語で和歌に關したことを書いた物語の意に解するもの(北村季吟「大和物語抄」など)。(二)宇多天皇の皇子敦慶親王の侍女に大和といふものがあり、その女の手になつたためとするもの(木崎雅興「大和物語虚静抄」の序中に或書の説として掲載)。(三)「やまと」は都の異名で、「大和物語」は「都物語」の意味であるとすもの(賀茂眞淵「大和物語直解」)。(四)大和國に關係ある話が書かれてゐるためとするもの(「群書一覽」所引荷田春滿の説など)。(五)「袋草子」にはゆる「和語」を「から」に對する「やまと」の物語の意に解して、日本の物語といふ意味であるとすもの(井上文雄「冠註大和物語」)。これらのうち最後の説が最も妥當なものと思はれ、近頃の學者も藤岡作太郎博士以來この説を取つてゐる人が多し。

作者については、(一)前に挙げた大和説、(二)在原業平の子滋春(在次の君といふ)説、(三)花山院説、(四)滋春原作・花山院御加筆説などがある。(一)は根據のない説で取るに足らない。(二)は上覺の「和歌色葉集」

出典

名稱

作者

に「在次の大和物語」とあるのによるものであるが、書中に在次の君が甲斐の國で身まかる際に詠んだ「かりそめのゆきかひちとぞおもひこし」の歌をのせてあるから、不都合であるといふことを、早く季吟の「抄」にも述べてゐる。(三)は一條兼良の「歌林良材集」に「花山院の作らせ給へる大和物語」とあるのを根據としたものであるが、これもそれ以外に確證はなく、(四)は季吟の「抄」の説であるが、單なる便利主義の折衷説で、信憑するに足らない。本書はすでに清輔の「袋草子」にも「作者不審」と見えて居り、平安時代の末葉にもはや作者がわからなくなつてゐたのであり、これを明らかにする有力な材料も具はつてゐないのであるから、今日これを推定するのは非常に困難である。但し、「伊勢物語」の如きもすでに原作者以外に加筆が想定される以上は、本書の如き打聞的・雜纂的性質を有するものは、一層添加増補の可能性があるから、作者について考へるには、まづ現存本成立の過程を明らかにすることが必要であり、その方面の研究は、資料に乏しいために、今日まだ殆ど着手されてゐないのである。

製作年代も、作者並びに成立の由來と關聯して考へなければならぬのであるが、從來の説では、(一)朱雀天皇の天慶頃とするもの(季吟「抄」)。(二)村上天皇の天曆年中とするもの(清輔「袋草子」・尾上八郎博士「日本文學大系」の解題)。(三)醍醐・花山・または一條天皇の初頃とするもの(眞淵「直解」)。(四)天曆頃の原作に花山天皇の寛和・永延頃の加筆があるとすもの(井上文雄「冠註」)。(五)少くともその一部は天曆四年より同七年までに成つたとすもの(藤岡博士「國文學全史」など)がある。要するにまだ決定的なことはいへないのであるが、本書を一種の成長文學と見れば、大體第四説の如きを妥當とすべきであらう。なほ池田龜鑑氏に

年代



諸本

よれば、説話内容の延喜より天慶年間までに属するものが全説話の七割を占め、書中の高貴顯官等の、その歿年を天曆以後安和年間までにおくもの二十二名にのぼるといふが、本書の成立を考へる上に参考とすべき資料である（岩波講座「日本文学」書目解説参照）。

「袋草子」卷二に「大和物語、和歌二百七十首、此中連歌三首、但本々不同」と記してあるから、平安時代末には、既に内容不同の諸異本が存在したことが知られる。北村季吟の抄には「このものがたり本の差異おほし。六條家の本・二條家の本・其ほかあまたかはり侍り」とあつて、六條家本は「袋草子」に記された通り、二百七十首の和歌を持つたものと思はれるが、現在はこの系統の傳本が知られてゐない。現存本は大體二條家系統本と定家系統本とに分れるやうである。次にこの兩系統の古寫本・古版本を掲げる。

古寫本

一、二條家系統本

○前田公爵家所藏本 二冊 藤原爲家寫

奥書に「弘長元年十二月比以家本令書寫之、同二年校合、六十五老比丘融覺」とあり、季吟のいはゆる二條家本とはこれを指すものと思はれるが、この本の直接の轉寫本は存在しないらしい。以下に掲げる諸本は内容の近似により、假にこの系統と見做すのである。

○宮内省圖書寮所藏胡蝶裝本 一冊 〇同袋綴本 一冊

○内閣文庫所藏本 〇無窮會所藏本 零本一冊

○靜嘉堂文庫所藏本 一冊 〇四天王寺所藏本 二冊

○池田龜鑑氏所藏本 (六本ありといふ)

二、定家系統本

定家自筆本の存在は知られないが、この系統の本には奥に、「本奥書云、寛喜三年八月十四日辛未未時、於北邊蓬屋終書寫之功、閑居徒然之餘也、日盲手振不成字、推量筆計也、即校畢、尙初書寫物以無落字爲一得、老及之後已落數行書入之、可恥可悲」といふ「明月記」寛喜三年八月十八日の條の記事と類似した讖語があり、なほその前に宇多法皇の御略歴が書添へてあるのが一特徴と見られる。次のものはこの系統の古寫本である。

○京都帝大研究室所藏本 一冊 〇同一本 二冊

○宮内省圖書寮所藏本 一冊 〇池田龜鑑氏所藏本

古版本

○群書類従本 (第三百八卷) 〇寛永十六年本 (木活本) 〇慶安元年本

○無刊記本活本 (以上二條家系統本)

○享和三年本 (上田秋成校訂、定家系統本)

活版本

○群書類従 (第十一輯) 〇日本文學全書 (第六編) 〇國文大觀 (第四卷)

参考書

- 國文叢書（第十八卷） ○新釋日本文學叢書（第四卷） ○有朋堂文庫「平安期物語集」
- 日本文學大系（第二卷） ○日本古典全集（第二期）

註釋書

- 大和物語抄 六卷 北村季吟 承德二年（國文註釋全書）
- 「大和物語拾穂抄」ともいられる。「大和物語」の註釋書中最古のもので、本文は定家系統本である。下記の諸註釋書も本文は概ね本書に據つてゐる。ただ「虚静抄」のみは直接本書に據らず、他の定家系統本に據つたらしい。
- やまと物語首書 五卷 和田以悦 明暦三年
- 大和物語直解 三卷 賀茂真淵 寶曆十年成（賀茂真淵全集）
- 大和物語虚静抄 二卷 木崎雅興 安永五年起稿（國文註釋全書・國文學註釋叢書）
- 大和物語錦繡抄 二卷 前田夏蔭 寛政五年（國文註釋全書・國文學註釋叢書）
- 冠注大和物語 三卷 井上文雄 嘉永六年
- 大和物語詳解 一冊 井上覺藏・栗島山之助 明治三十四年
- 大和物語新釋 一冊 淺井峯治 昭和六年
- 王朝文學叢書（第一） 大正十一年

口譯書

研究書

- 大和物語考 紅 於 （史學界四ノ一）
- 大和物語に現れたる小説的説話 野呂精一 （わか竹四ノ八）
- 大和物語古寫本考 池田龜鑑 （國語と國文學昭和四年一月）
- 大和物語の異本と平仲物語の發見 川瀬一馬 （國文學誌昭和六年十一月・十二月）

〔二〕小説物語

◎竹取物語（たけとりものがたり） 一卷

「竹取物語」は我が國に現存する最古の物語で、「源氏物語」蓬生の巻に見える「かぐや姫の物語」と同じく繪合の巻に見える「竹取の翁」は本書を指すものである。かく古くはいろ／＼に呼ばれたが、今は専ら「竹取物語」といふ。「竹取」は「たかとり」とよまれた例もあるが（「大和物語」など）、「たけとり」が普通である。著作年代は明らかでないが、「源氏物語」繪合の巻には、「まづ物語のいできはじめのおやなる竹取の翁に、うつぼの俊蔭を合せて争ふ」と見え「宇津保物語」の初秋の巻には赫那姫の名を引き、降つて「狭衣物語」「榮華物語」などにもこの物語の名が見えてゐるから、平安朝の中頃には既に盛に讀まれてゐたことは明らかである。本居宣長は「玉の小櫛」の中に「竹取物語は誰がいつの代に作りとはさだかに知られねどもいた

書名

年代

く古き物とも見ええず、延喜よりは以来の物とぞ見えたる」といつてゐるが、宣長の門人田中大秀の指摘したやうに、「源氏物語」にこの物語の繪巻物のことを記して、「繪は巨勢相覽、書は紀貫之かけり」とあり、貫之は昌泰・延喜頃の人、相覽は傳記不明であるが、略同時代の畫家であるから、これらの人の手に成つた繪巻物があつた以上は、「竹取物語」の製作されたのは、少くとも延喜以前であると考へなければならぬ。藤岡作太郎博士は「その文章より見ても到底延喜以来のものにあらざるべく、さりとて弘仁の詩文全盛の世假名の弘通のいまだしき時にかゝるものを見るべくもあらず。貞觀より延喜まで三四十年の間に出来たりと見るを穩當とすべし」といつてゐる（『國文學全史平安朝篇』）。井上頼文氏は本書の成立を弘仁二年より同十四年までの間とし、「さるは弘仁十四年四月、御諱にふれて大伴氏を改め、たゞ伴とのみ稱へしめられたりしに、此書に大伴ともしいへれば、其以前のものなるべく、また弘仁元年始めておかれし藏人所の頭中將、同三年定められし六衛のつかさなど見えたるを通じ考ふるに、弘仁二年より同十四年までの間に成りしなるべければなり」といつてゐるが（『竹取物語新釋』）、大伴氏の稱呼の禁止は永続的のものではないから、本書の成立を弘仁十四年以前とする根拠は薄弱である。なほ池田龜鑑は、本書の原説話の成立を弘仁以前と見、現在見ることが如き形に書綴られたのは、假名文流行時代であらうとの假説を立てて居られる（『岩波講座』日本文學書目解説）。

作者

作者については源順説が傳へられてゐるが、確證がないばかりでなく、製作年代を延喜以前とすれば、時代も合はないから、信するに足らない。もし本書が口承された説話の定着されたものとすれば、純粹の個人創作とすることが出来ず、随つて作者に對する見方を變へなければならぬわけであるが、個人創作とする場合、その作者を男性と見ることは争はれないところであらう。

梗概

説話の梗概は、野山に竹を取ることと業とする識岐造（あきつくり）鷹（たか）といふ翁が、竹の中から三寸ばかりの女の子を見つけて養育すると、三月ばかりで年頃の娘となつた。その美しさは家の内も輝くばかりなので、赫奕（たつや）姫と名づけて寵愛した。これに懸想する男が多かつたが、中んづく五人の貴公子は熱心に求婚した。姫は五つの難題を設けて、石作皇子には佛の御石の鉢、車持の皇子には蓬萊の玉の枝、右大臣安部御主人には唐土の火鼠の裘、大納言大伴御行には龍の首の五色の珠、中納言石上磨には燕の子安貝を註文し、その望を叶へたものに従はうといふ。五人の者或は贖物を持來つて露顯し、或は寶を得ようとして失敗し、何れも志を遂げることが出来ない。最後に時の帝が人内せしめようとしたが、それにも従はず、八月十五夜に、翁夫婦の懇請や、帝の遣はした六衛府の兵士の防衛もそのかひなく、遂に月世界の使者に伴はれて昇天するといふのである。

典據

この物語の材料の典據についてはいろいろの説があるが（『竹取翁物語解』『國文學全史平安朝篇』等参照）、要するに佛典・漢籍などに局部的の類似を有するものがあるに止まり、そのまま全體の原據とすべきものは發見されない。

諸本

古寫本

○内閣文庫本    ○宮内省侍從職本    ○彰考館本    ○同一本    ○靜嘉堂文庫本

竹取物語

- 神宮文庫本
- 東北帝國大學本
- 前田侯爵家本
- 宮内省圖書寮本
- 三手文庫本
- 池田龜鑑氏本

右のうち、終の三本は流布本に比して本文の異るところが多いといふ。

- 寛永古活字本
- 寛文三年繪入本(流布本)
- 群書類從本(第三百九)

活版本

- 群書類從(第十二輯)
- 國文大觀(第三卷)
- 國民文庫(第九)
- 有朋堂文庫「平安朝物語集」
- 國文叢書(第六卷)
- 新釋日本文學叢書(第四卷)
- 日本文學大系(第二卷)
- 日本古典全集(第二期)
- 岩波文庫

參考書

註釋書

- 竹取物語抄 二卷 小山儀・入江昌意 天明四年 (國文註釋全書)
- 竹取物語伊佐左米言 一卷 狛毛 呂成
- 竹取翁物語解 六卷 田中大秀 天保二年 (國文學名著集・國文學註釋叢書)
- 竹取物語考 一卷 加納 諸平 (國文學註釋叢書)
- 竹取物語類標 岸本由豆流

- 竹取物語俚言解 一卷 佐佐木弘綱 安政四年
- 竹取物語折義 一冊 鳥井 忱 明治二十五年
- 竹取物語講義 一冊 今泉 定介 明治二十六年
- 竹取物語新釋 一冊 春山頼母・井上頼文 明治二十六年
- 竹取物語講義 一冊 井上 頼文 明治二十九年
- 新釋竹取物語精解 一冊 吉川 秀雄
- 新釋竹取物語 一冊 土屋 孤城
- 新釋竹取物語 一冊 藤井乙男・原田恭助
- 竹取物語新釋 一冊 福永 弘志
- 竹取物語全釋 一冊 吉田 九郎 昭和五年
- 竹取物語・土佐日記・方丈記 一冊 藤井乙男 昭和七年

研究書

- 河社(竹取物語の典故に関する研究を含む)
- 契 沖 (契神全集)
- 竹取物語の歌の解につきて 三矢 重松 (わか竹三ノ六)
- 竹取以前の小説 萩野由之 (文海一ノ十一)
- 謠ひものに引直したる竹取について 坪内逍遙 (心の花十ノ一)

- 竹取物語について 長尾素枝 (國學院雜誌二十九ノ九)
- お伽噺としての竹取物語 和辻哲部 (思想十四・日本精神史研究)
- 竹取物語の研究 手塚昇 (日本文學講座)
- 竹取物語解説 島津久基 (岩波文庫「竹取物語」)
- 竹取物語の素材と思想 橋純一 (國語と國文學七ノ十)
- 竹取物語解説 武田祐吉 (新竹取物語)

◎宇津保物語 (うづぼものがたり) 二十卷

性 質  
宇津保物語は、平安朝の物語が傳奇的のものから、寫實的のものへ進んで行く過程の間に現はれたもので、その名は「源氏物語」繪合巻中にも「竹取の翁に宇津保の俊蔭を合せ」と見え「枕草子」にも「物語は佳吉・宇津保の類」と見えてゐる。「源氏物語」以前に於ける現存する物語中最大の作である。

梗 概  
極めて簡単に説話の梗概を記せば、昔式部大輔兼左大辨清原某の子に俊蔭といふ人があつた。天性聰明で十六歳の時選ばれて遣唐史となつて出かけたが、途中暴風に遇つて波斯國に漂着し、深山に入つて天人の琴を得て歸國し、その娘に琴の秘曲を教へた。俊蔭の歿後その娘が時の太政大臣の第二子兼雅に通じて一子仲忠を設けた。仲忠は母と共に北山の杉のうづぼに隠れ住んで琴を習ひ、母を養つてゐたが、後に兼雅に引

きとられて三條堀河の別邸に住むことになり、やがて昇殿を許されて侍従となつた(以上「俊蔭」の巻)。

ここにまた一世源氏で藤原の君といはれた正頼の第九女に貴宮といふ才色無雙の女があり、公卿摺紳之に思を寄せるもの十數人に及び、皆これをわがものにしうとして百方手をつくしたが、應ぜず、結局貴宮は春宮の妃となり、戀着した連中は失戀の極病氣になつたものもあり、死んだものもあり、罪を得たものもある。一方仲忠は帝の一の宮を迎へ、帝の寵を得て右大將となり、大納言に任じ、一族富み榮えた。

「宇津保物語」は普通の分け方に従へば全部二十巻で、それに十四の巻名(見出し)がついてゐる。一つの巻名が上下に分れてゐるものが二つ、上中下に分れてゐるものが二つあり、他は一卷に一つづつ名が與へられてゐる。それらの巻名には作中の人名からとつたもの、記事から取つたもの、歌句から取つたものなどがあるが、後の「源氏物語」や「榮華物語」などにも各巻に見出しの名をつけたのは、このやり方を踏襲したものである。全體を總括する「宇津保物語」といふ書名の由來は、この物語の男主人公たる仲忠が、その母と共に、杉の木の空洞(うづぼ)の中に住んでゐたといふことに基づくものであらう。「うづぼ」の漢字は宇津保・宇都保・空穂・虚穂などいろいろに書かれてゐる。

「宇津保物語」は早くから卷々の順序が錯亂してゐたらしく、江戸時代の中期以後、桑原やよ子・田中道麿・細井貞雄等の學者が、その整理につとめ、明治以後も藤岡作太郎博士等の訂正を経たが、本文研究がまだ十分行きとどいてゐないから、その方面の研究の進展に伴つて卷次についても考へ直される餘地があらう。藤岡博士の立てた卷の順序は次の通りである。

卷 名  
書 名  
卷 次

- 一、俊 藤
- 二、藤原君
- 三、嵯峨院
- 四、忠こそ
- 五、梅の花笠
- 六、七、吹 上
- 八、祭の使
- 九、菊の宴
- 十、貴 宮
- 十一、初 秋
- 十二、田鶴の群鳥
- 十三、十
- 四、十五、國 讓
- 十六、十七、樓の上
- 十八、十九、二十、藏 開

作者

「宇津保物語」の作者については従来次のやうな説がある。

- 一、源順説 素説（鎌倉末永仁頃の人源孝行）の「源氏紫明抄」猿蓑巻註中に「うつばのとしかげといふ物語あり源順作云々」と見え、室町時代中葉の四辻善成の「源氏物語河海抄」繪合註中には「うつば物語源順作云々有疑」と見えてゐる。近頃では宮田和一郎氏が「日本文學講座」中に源順説に同情を寄せてゐる。
- 二、藤原爲時説 細井貞雄が「宇津保物語玉琴」に述べてゐる説で、源順説を根據のないものとして退け、別に「宇津保」が「源氏」の先蹤となつた點をあげて、「宇津保」は「源氏」の作者紫式部の父爲時の手になつたものであらうとの想像説である。假に「宇津保」と「源氏」との間に親子のやうな關係があるとしても、その作者も親子でなければならぬ道理がない。一種の思ひつきたるに過ぎない説で、今日これを支持する人はないやうである。
- 三、作者不明説 これにも二通りある。（イ）俊藤の巻とその他とは製作年代を異にし、俊藤の巻だけは「源氏」以前の古いものだが、その他は後人の追加であらうとする説で、伊勢貞丈の「安齋隨筆」卷十（故實叢書本三三六頁）にこの説が見える。しかし俊藤の巻以外は皆「源氏」や「枕草子」以後に書き足されたものだといふ説はいろ／＼反證を擧げて否定することが出来るから、この説はこのまゝでは支持し得ない。（ロ）誰と指すことは出来ないが、作者は男性で、相當學問もあり、故實にも通じ、可なり文才のあつた廷臣の一人であらうとするもので、これが今のところ

年代

通説となつてゐる。

著作年代についても精確なことは分らないが、ほぼ冷泉天皇から圓融天皇の御代の初め、年號でいへば安和・天祿頃に出來たものと考へられてゐる。（坂井衡平氏「國文學通史」、金ヶ原亮一氏「宇津保物語の作者及び年代に就いて」、宮田和一郎氏「宇津保物語・落葉物語研究」など）。但し近頃松下大三郎氏は現存の「宇津保」を鎌倉以後の偽作かと疑つて居られる。現存本が原本から變化した部分のあることは考へられるが、これを全部鎌倉以後の偽作とする考には遽かに従ひ難い。

諸本

古寫本

「宇津保物語」の現存書寫本には江戸時代以前に遡るものがまだ發見されず、且いづれも錯簡があつて、原本の形態をそのまま傳へてゐると思はれるものが存在しない。これまで知られてゐる寫本には次のやうなものがある。

- 宮内省圖書寮本（胡蝶裝本・青表紙本・赤表紙本の三種あり、胡蝶裝本・青表紙本は元祿頃の書寫らしく、赤表紙本は文久の書寫である）
- 帝國圖書館本（胡蝶裝本・袋綴本の二種あり、前者は圖書寮の胡蝶裝本と同時代の書寫らしく、後者は年代が新しく、「梅の花笠」が一卷缺けてゐる）
- 東京帝大國語研究室本
- 南莢文庫本（現東京帝大圖書館蔵）
- 京都帝大圖書館本
- 同研究室本
- 神宮文庫本
- 阿波文庫本
- 前田侯爵家本
- 古版本

- 寛永活字本 (『日本小説年表』に記載されてゐるが、巻数未詳。大倉大學の圖書目録に見える本活二巻の本はこれであらうか。)
  - 萬治三年繪入本 (三冊本で、俊蔭の巻のみを収む。寛文頃の再摺一冊本もある。)
  - 延寶五年本 (三十冊本で、世上に流布してゐるのはこの本である。)
  - 文化三年本 (延寶五年本の補刻)
  - 國文大觀(物語部五)
  - 有朋堂文庫(第二輯)
  - 國文叢書(第十三・十四篇)
  - 日本文學大系(第四卷)
  - 日本古典全集(第三期)
- 日本古典全集本には、藤田徳太郎氏が諸本の校異を掲げてゐる。
- 註釋書・研究書
- 宇津保物語玉松 五卷 細井貞雄 文化六年成 (國文註釋全書・國文學註釋叢書)
  - 宇津保物語玉琴 二卷 細井貞雄 文化十二年
- 前掲「玉松」に作者論を加へて刊行したものである。
- 宇津保物語二阿抄 五卷 山岡俊明・細井貞雄 文化十三年成 (國文註釋全書)
  - 明阿(俊明)・昌阿(貞雄)共著の抄といふので二阿抄と名づけた。阿曰、貞雄云として語釋を施してある。
  - 宇津保物語考 一卷 桑原やよ子 (日本古典全集本附録)

- 宇津保物語考證 一巻 清水濱臣 (國文註釋全書・國文學註釋叢書)
  - 宇津保物語年立 一卷 殿村常久 文政三年 (日本古典全集本附録)
  - 宇津保物語頭字部類 寫一卷又は二卷 足代弘訓
  - 宇津保物語類語(群書搜索目錄の内) 小山田與清
  - 宇津保物語不拂塵 寫七卷 本多忠憲 文化九年成
- 語彙をいろは順に配列して註解したもの。帝國圖書館に藏本がある。
- 宇津保物語の思想 藤岡作太郎 (帝國文學十ノ十二)
  - 宇津保物語の研究 松下大三郎 (國學院雜誌十六ノ四)
  - 宇津保物語は鎌倉以後の偽作か 松下大三郎 (國學院雜誌三十一の六)
  - 宇津保物語の作者及び年代に就いて 金ヶ原亮一 (國語國文の研究五・七)
  - 宇津保物語・落窪物語研究 宮田和一郎 (日本文學講座)

◎落窪物語 (おちくぼものがたり) 四卷又は三卷

中納言源忠頼の先妻腹の姫君は、才色すぐれ、心ばえもめでたかつたが、今の北の方は己の腹に出來た姫君達ばかり愛して、この姫君を虐待し、寢殿の片隅の一段低く落窪んだ室に入れて、召使にまで「落窪の君」

といはせて悲しい月日を過ごさせてゐた。そのうち姫に同情する阿漕といふ女と、その愛人の惟成といふものの執りなして、左近衛少將道頼といふ貴公子が姫に逢ひ、次第に愛情が増して、窃かに姫を盗み出し、これをかばひ立てて結局奥方にした。そして少將は姫を虐待した中納言一家に對し、機會あることに復讐をする。始めは理由がわからず心外のことと怪しみ憤つてゐた中納言は、事情が明らかになるにつれて、自分の非を悟つて我を折る。意地わるの北の方もたうとう屈服してしまふ。少將はしまひには彼等にも庇護を加へる。

書名は寢殿の落窪に住む姫君の物語といふ意味である。

この物語のことは「枕草子」の中に「げに交野の少將もどきたる落窪の少將などはをかし」と見えてゐる。その製作年代について、加茂眞淵は冷泉院の頃に作られたものだらうといひ、「伊勢物語古意總論頭書」、「落窪物語大成」の著者中村秋香も、圓融・花山以前のものであることは疑がないとし、藤岡作太郎博士は「國文學全史平安朝篇」で冷泉以後圓融・花山頃に成つたものだらうと論じ、尾上八郎博士は日本文學大系本の解説中に長保元年より二三年までの間とされたが、近時宮田和一郎氏は、本書中の和歌と「拾遺集」中の和歌との關係及び「枕草子」中に本書の記事がある點などから考證して、一條天皇の正暦・長徳の頃に成つたものと推定された（日本文學講座）。しかしまだ何れも定説とは見られない。

作者には古來源順が擬せられて居り、最近橋本佳氏はこの説の必ずしも否定すべからざることを論じて居られるが、まだ確證は得られない。ただ文章並びに作の態度の上から見て男子の手に成つたものであることは争はれないであらう。

書名  
年代

作者

諸本

古寫本

○南英文庫本（現東京帝大蔵）

○宮内省圖書寮本（三部） ○無窮會神習文庫本（三部）

○靜嘉堂文庫本（二部）

○京都帝大圖書館本 ○東北帝大本 ○神宮文庫本

○三手文庫本 ○彰考館文庫本

○刈谷圖書館本 ○池田龜鑑氏本（八部）

「落窪物語」の寫本には江戸時代以前に遡るものが甚だ少い。池田氏所蔵の一本は九條家の舊藏本で、室町中期の書寫にかゝり、現在知られてゐる寫本中最も古い部類に屬するものであらうといふ。なほ宮内省圖書寮及び帝國圖書館には繪巻物を藏してゐる。

古版本

○木活字本 ○寛政六年本四冊

○上田秋成校訂本六冊（寛政十一年刊。よみがた・略註・考異を附す）

活版本

○日本文學全書（第三編） ○國文大（物語部三） ○有朋堂文庫（第一輯） ○國民文庫（第九）

○新釋日本文學叢書（第四卷） ○國文叢書（第六卷） ○日本文學大系（第五卷）

註釋書

○落窪物語頭書 四卷 賀茂眞淵 寛政六年成

眞淵の講義を信夫某の問書して頭書にしたもの。本文に漢字をあて、傍訓をも附してある。

第二篇 平安時代（物語）

参考書



○落窪物語註釋 二冊 大石千引

眞淵・春海・千藤らの説にもとづいて卷一のみを註釋したもの。

○落窪物語註釋 二卷 源道別 文政二年成

○落窪物語略解 四卷 田中大秀 文政六年成

本書の補遺として、落窪物語續解一卷・同續解副卷一卷がある。

○落窪物語證解 六卷 笠岡直麿 (國文註釋全書・國文學註釋叢書)

○落窪物語大成 四冊 中村秋香 明治三十四年

巻頭に作者・年代・諸本等について考證し、作中人物の系圖を附し、本文には傍註を施し、別に詳細な頭註を加へてある。従前の諸註書中最もすぐれたものであるが、私意によつて本文を改竄し、所憑の原本の名を示さなかつたのは缺點である。和装四冊本の外洋装一冊の再刻本も出てゐる。

○落窪物語新釋 一冊 吉村重徳 大正十五年

口譯書

○口譯落窪物語 一冊 鴻巣盛廣

○王朝文學叢書 (第十)

研究書

○落窪物語攷 一卷 岡本保孝 (況叢書)

○落窪物語目録 (群書索引目録の内) 三卷 小山田與清

○源氏物語に於ける落窪物語の重なる影響 長谷川福平 (國學院雜誌七ノ六)

○落窪物語の價值 青木苦汀 (わか竹五ノ四以下)

○落窪物語に就いて 橋本佳 (國語と國文學七ノ十)

○落窪物語とその系統的作品的史的展開 市村平 (歴史と國文學昭和七年六・七月)

○宇津保物語・落窪物語研究 宮田和一郎 (日本文學講座)

○落窪物語 橋本佳 (岩波講座「日本文學」)

◎源氏物語 (げんじものがたり) 五十四卷 紫式部

小説物語中の最大作で、我が國古典散文藝術の最高水準を示すものである。全篇五十四卷より成り、説話の場所は殆ど京畿地方を出ないが、時間は七十年に亘り、人物の数は三百人を越え、主要な人物だけでも三十人に上つてゐる。全篇を前後の二部に分けて見ると、前半は桐壺の帝の皇子光源氏を主人公として、その一代の榮華と戀愛の種々相を描き、主要なる女性には、藤壺・空蟬・夕顔・六條御息所・紫上・末摘花・源典侍・臘月夜内侍・葵上・花散星・明石上・齋宮女御・朝顔・弘徽殿太后・玉鬘等があり、後半は柏木・匂宮及び源氏の假の子薫の君等を中心とし、これに女三宮・落葉宮・宇治大君・中君・浮舟等の女性を配して成り、そのうち終の

年立 卷名

十卷は宇治が舞臺になつてゐるので、「宇治十帖」と稱せられ、主として薫の君の失戀苦惱が描かれてゐる。各卷にはそれぞれの名稱が附せられてゐる。その卷名と、それに該當する主人公の年立を記せば次の通りである。

- 1 桐壺 (別名、壺前裁・前裁・輝く日の宮。源氏誕生より十二歳まで)
- 2 帚木 (十七歳夏)
- 3 空蟬 (同)
- 4 夕顔 (十七歳夏より十月まで)
- 5 若紫 (十八歳三月より冬まで)
- 6 末摘花 (十八歳春より十九歳正月まで)
- 8 紅葉賀 (十八歳十月より十九歳七月まで)
- 8 花の宴 (二十歳二月・三月)
- 9 葵 (二十二歳四月より二十三歳正月まで)
- 10 桐 (別名、松が浦島。二十三歳九月より二十五歳夏まで)
- 11 花散里 (二十五歳五月)
- 12 須磨 (二十六歳三月より二十七歳三月まで)
- 13 明石 (別名、浦傳。二十七歳三月より二十八歳八月まで)
- 14 澤標 (二十八歳十月より二十九歳冬まで)
- 15 蓬生 (二十八歳秋より二十九歳四月まで)
- 16 關屋 (二十九歳九月)
- 17 繪台 (三十一歳春)
- 18 松風 (三十一歳秋)
- 19 薄雲 (三十一歳冬より三十二歳秋まで)
- 20 槿 (三十二歳九月より冬まで)
- 21 乙女 (三十三歳四月より三十五歳十月まで)
- 22 玉鬘 (三十四歳より三十五歳十月まで)
- 23 初音 (三十六歳正月)
- 24 胡蝶 (三十六歳三月・四月)
- 25 螢 (三十六歳五月)
- 26 常夏 (三十六歳六月)
- 27 篝火 (三十六歳七月)
- 28 野分 (三十六歳八月)
- 29 行幸 (三十六歳十二月より三十七歳二月まで)
- 30 藤袴 (三十七歳八月・九月)
- 31 眞木柱 (三十七歳十月より三十八歳十一月まで)
- 32 梅枝 (三十九歳正月より三月まで)
- 33 藤裏葉 (三十九歳三月より十月まで)
- 34 若菜上 (別名、果鳥・諸雲。三十九歳十二月より四十一歳三月まで)
- 35 若菜下 (別名、諸雲。四十一歳三月より四十七歳十二月まで)
- 36 柏木 (四十八歳正月より秋まで。薫誕生)
- 37 横笛 (四十九歳二月より秋まで。薫二歳)
- 38 鈴蟲 (五十歳夏より八月まで)
- 39 夕霧 (五十歳八月より冬まで。薫三歳)
- 40 御法 (五十一歳三月より秋まで。薫四歳)
- 41 幻 (五十二歳正月より十二月まで。薫五歳)

○雲隠 (現存諸本は卷名のみで本文がない。源氏の墓玉がこの卷名に暗示されてゐる。これを五十四巻中に入れる時は、「若菜」の上下を合せて一卷とするのである。)

- 42 匂宮 (別名、匂兵部卿・薫中將・薫大將。薫十四歳二月より二十歳正月まで)
- 43 紅梅 (二十四歳春より冬まで)
- 44 竹河 (十四歳夏より二十三歳秋まで)
- 45 橋姫 (別名、優婆塞。以下宇治十帖。二十歳より二十二歳十月まで)
- 46 椎本 (二十三歳二月より二十四歳夏まで)
- 47 總角 (二十四歳八月より十二月まで)
- 48 早蕨 (二十五歳正月・二月)
- 49 宿木 (別名、鏡鳥。二十四歳夏より二十六歳四月まで)
- 50 東屋 (二十六歳秋)
- 51 浮舟 (二十七歳正月より三月まで)
- 52 蜻蛉 (二十七歳三月より九月まで)
- 53 手習 (二十七歳三月より二十八歳四月まで)
- 54 夢の浮橋 (別名、法師。二十八歳四月)

内書

全篇の發端たる「桐壺」の卷は、帝とその寵妃桐壺更衣との關係より、その間に生れた源氏の生立を叙し、「帚木」以下「桐」に至る九卷は、主に宮廷を中心として、戀を追ふ源氏の生活が描かれ、その對手としては、正妻の葵上をはじめ、伊豫介の後妻空蟬・空蟬の繼娘軒端の萩・以前頭中將のおもひものであつた夕顔・母更衣に酷似する藤壺・理想的な女性紫の上・赤鼻の醜婦末摘花・多情の老女源典侍・弘徽殿の妹で春宮の女御に上ることになつてゐた臘月夜・嫉妬深い六條御息所などがあり、源氏とそれらとの關係が層々として語られ、その間に賀茂の祭の車争ひのこと、夕顔の變死、葵の上が夕霧を生んで病死することなどが書かれて

ゐる。次に麗景殿女御の妹三の君（花散里）との一挿話を記した「花散里」を経て、「須磨」「明石」の二巻には失意流謫の源氏が描かれる。これは桐壺帝の崩御・臘月夜との関係の露顯等を契機とするものであつたが、源氏は謫居二年餘の後、新帝の思召で都へ歸還することになつた。源氏はこの流謫中に明石入道の娘明石上と契る。「落標」以下「乙女」に至る八巻は、二條院に於ける源氏の榮華を中心とする物語で、帝は位を藤壺腹の春宮（實は源氏の子）に譲つて朱雀院と申上げることになり、源氏は内大臣となり、舅父は攝政兼太政大臣となつて、源氏の一門が權勢を得たのであるが、戀物語としては明石の上・末摘花・空蟬等との後日譚があり、「乙女」の巻の終では、新たに六條院が造營されて、源氏と紫上とは春の景色・花散里は夏の景色・秋好中宮は秋の景色を、それぞれ配した殿舎に住むことになり、明石の上もすこしおくれ冬景色の殿舎に移り住むことになる。その間に宮中の繪合のこと、藤壺の他界、葵の上の忘れ形見夕霧の元服、夕霧と雲井雁（頭中將の娘）との可愛な戀、源氏太政大臣に昇進のことなどが書かれてゐる。次に「玉鬘」以下「眞木柱」に至る十巻は、以前頭中將と夕顔との間に生れた玉鬘に對する數人の戀が中心になつてゐる。玉鬘は乳母に伴はれて筑紫に行つてゐたが、成人して都に歸り、源氏に引取られて、六條院に住むことになつた。その美しさに惹かれて、思を寄せたものに、兵部卿宮・髭黒の右大將・夕霧等があり、頭中將（その時内大臣）の息柏木も、妹と知らずに懸想し、養父の源氏も、屢々親子の埒を越えかけるが、結局玉鬘は髭黒の大將の手に入るのである。次に「梅枝」と「藤裏葉」には明石姫君（源氏と明石上との子）の裳着と入内、内大臣（先の頭中將）家の藤見の宴などのことがあり、これと關聯して夕霧と雲井雁との戀の曲折が描かれ、

また源氏が太上天皇に准ぜられて六條院と呼ばれることになり、その六條の邸に帝の行幸があつたことなどが書かれてゐる。「若菜」上下、「柏木」は、女三宮と柏木との關係を中心とする物語である、朱雀院は御出家せられることになり、女三宮を源氏にお託しになつたが、内大臣の息柏木は深く女三宮に懸想して居り、密に宮に手紙を送つたりしたが、數年後遂に罪の契を結ぶことになり、宮は懷妊して男子を生む。これが宇治十帖に於て主人公の地位におかれる薫の君である。二人は罪の恐ろしさに憫んだが、結局女三宮は落飾して尼になり、柏木は病死する。死に臨んで彼は親友夕霧に北の方落葉宮のことを頼んだ。「横笛」と「夕霧」には、その後夕霧が落葉宮を深く思慕するやうになり、そのために妻の雲井雁は父の邸に歸ることになる経緯が書かれてゐる。「御法」には紫の上の病氣とその死、「幻」には源氏の悲愁と出家の決心をすることが書かれてゐる。「雲隱」は前記の如く、卷名のみで本文がない。源氏を主人公とした物語はこれで終るのである。「匂宮」「紅梅」「竹河」の三巻は宇治十帖への橋渡しで、源氏薨去の後の人々の消息を描き、薫の君の生立や人となり記され、また彼に對立する人物として、今上の第三皇子で源氏の孫に當る匂兵部卿宮の好色のことなどが書かれてゐる。「橋姫」以下「夢浮橋」に至る十巻即ち宇治十帖は、薫の君の失敗に終る戀物語が中心になつてゐる。薫の君は表面は源氏の子であるが、實は柏木と女三宮との道ならぬ關係から生れた人物で、生來陰氣な假想的な性質の上に、幼時から自分の出自について疑を懐き、隱遁生活に心を惹かれてゐたが、たまたま宇治に隱棲して寂しい晩年を送つてゐる八宮（桐壺帝の第八皇子で、源氏の異母弟に當る）から、二人の姫君の將來を頼まれた。やがて八宮は薨去し、薫の君は大姫君を戀するやうになり、意中を打明けた

が、大姫君は、これを拒絶して、中姫君を勧めようとした。しかし中姫君は匂兵部卿宮に奪はれ、間もなく大姫君はこの世を去つたので、薫の君は失意懊惱の日を送る。その後彼は大姫君の異腹の妹で、彼女に酷似した浮舟を得て、これを宇治の山莊に住ませて、寵愛するうち、浮舟は誤つて、好色の匂兵部卿宮に身を任せ、懊惱した擧句、宇治川に身を投げる。しかし横川の或僧都の介抱によつて蘇生し、北山の小野に隠れて尼になつた。薫は横川の僧都からそのことを聞き、浮舟に手紙を送つたが、遂に浮舟の返事は得られなかつた。物語はこれで終になる。

以上は戀愛を中心とする説話の材料だけを摘出したのであるが、その他公私の諸行事・遊樂・宴飲・弔慶等に亘つて、當時の宮廷貴族の生活が全面的に描かれ、またそれら一切の人事に合せて四季の風物・自然の情景が點綴せられてゐるのである。

今は一般に「源氏物語」と呼ばれてゐるが、「紫式部日記」「更級日記」などに「源氏の物語」と見えてゐるから、當初は「の」を入れて呼ぶのが普通であつたらしい。なほ他に、「紫の物語」「更級日記」「光源氏物語」「源氏一品經」などの稱呼もあり、後には「源語」「紫文」「紫史」などの略稱・異稱も用ひられるやうになつた。

作者は古來紫式部であるとされてゐるが、二三の異説もある。すなはち(一)紫式部の原作に藤原道長が加筆したといふ説(河海抄所載)、(二)紫式部の父藤原爲時が大綱を記し、式部に細部を書かせたといふ説(宇治大納言物語)、(三)宇治十帖は式部の娘大貳三位が書いたといふ説(花鳥餘情所載)、(四)「若菜」の巻以下は

名 稱

作 者

紫式部

式部以外の人の書續であるといふ説(奥野品子氏)、(五)既存の物語に紫式部及び多くの人々を書きつけ、補訂したといふ説(和辻哲郎氏)などである。現存諸本には原作者以外の多くの人によつて有意無意の改変が加へられてゐることは疑がないが、原作者に式部以外の人を擬へようとする根拠は、今日までのところ何れも薄弱である。

紫式部は越前守藤原爲時の娘である。實名不明で、生歿の年時も詳かでない。父爲時は藤原冬嗣の六男良門の裔で、堤中納言兼輔の孫、雅正の子であり、文章生に擧げられ、詩文と和歌に長じてゐた。(「本朝麗澤」に詩があり、「後拾遺集」「新古今集」に歌がある)。紫式部の外に、惟規・惟通・定運・阿闍梨等の子があり、惟規(式部の兄)も詩文及び和歌をよくした。紫式部はこのやうに文學者の血統を承けて生れたのである。紫式部といふ名稱の由來については、女房名を藤式部といはれたのを、藤の花のゆかりで紫と呼ばれたといふ説や、「源氏物語」中の紫の上に因んで名づけられたといふ説などがある。式部の稱呼は兄惟規が式部承であつたのに因るものであらう。なほ「紫式部日記」には、一條天皇が「源氏物語」を御賞識になり、「この人は日本紀をこそ讀みたまふべけれ。誠に才あるべし」と仰せられたので、「日本紀の局」と渾名されたことが見えてゐる。式部は同族の藤原宣孝(左衛門権佐)に嫁し、大貳三位を生んだが、長保三年、三十歳足らずで、夫宣孝に先立たれ、三四年寡居の後寛弘三四年の頃に上東門院彰子(一條天皇中宮)に出仕した。式部の宮仕を罷めたのは、長和二年五月以後萬壽三年正月までの間であつたらしいが、「本朝世記」長和二年五月廿五日の條に、式部の宮中に居たことを示す記事があり、「紫華物語」衣の珠の巻、萬壽三年正月十九日上東門院御落飾の條に見え、門院の御供をして

成立

出家した女房の中に式部の名がないのは、この時式部は既に宮中にゐなかつたためであらう、晩年の消息は不明である。式部には「源氏物語」の外「紫式部日記」の著があり、和歌は、後拾遺・千載・新古今・新勅撰・續後撰・續古今・續拾遺・玉葉・續千載・續後拾遺・風雅・新千載・新拾遺の諸集に採られ、別に家集「紫式部集」がある。「源氏物語」の製作動機についてもいろいろの説が傳へられてゐる。大齋院選子内親王から上東門院へ、つれづれ慰むべき物語はないかと、御所望になつたので、紫式部が上東門院の命を受けて新たに作つて上つたといふ説（無名草子）・西宮左大臣高明が安和二年太宰権帥に左遷され、紫式部が悲嘆にくれてゐた時、大齋院からの所望があつたので、石山寺に通夜して、八月十五夜の月を眺め、興趣湧くがまゝに、佛前の大般若の料紙を申受けて、まづ須磨明石の兩卷から筆を起したといふ説（河海抄）などであるが、何れも確かな根拠を缺き、殊に西宮高明との關係・石山寺參籠・須磨明石より起稿等のことは、全くの附會説で取るに足らぬ。「無名草子」にはなほ、式部がまだ宮仕をせず里にゐた時にこの物語を作つたので、召出されて、紫式部と呼ばれたといふ一説を擧げてゐる。源氏の著作が、宮仕の原因になつたかどうかは暫く措き、源氏の著作に着手したのは、宮仕以前であらうとするのが、今日では通説になつてゐる。而してその著作の動機を、夫宜孝と死別した後の寂寥・憂愁に求めるものが多いのであるが、これは單なる想像説で、宣孝の死を待たなくても、物語の著作はあり得ないことではないから、着手の時期については、なほ考慮の餘地があると思はれる。次に卷々の順序と製作の順序との關係であるが、前掲の「須磨」「明石」を最初に書いたといふ説は根據のない臆測であるとしても、卷の順序と製作の順序とが必ずしも一致しないらしいことは、種々の點から考へ

られることで、卷頭の「桐壺」の卷の如きは、主人公の出自・生立を示すために後から書かれたものであらうとの説が有力である。しかし各卷一々の製作順序を決定することは容易の業でない。それには各卷の構想・題材・表現手法等を精細に比較研究する必要がある。

「源氏物語」は起稿年時が明らかでないと共に、その完成年時も明らかでない。「明星抄」に「寛弘初造出之、康和流布」と記し、後の諸抄は概ねこれに従つてゐるが、あのやうな大部の作が、僅少の年月に出来上つたとは思はれないから、寛弘の初年すなはち式部の宮仕以前に全部完成するには至らなかつたのであらう。「紫式部日記」に、「一條天皇が式部を評して、「この人は日本紀をこそ讀みたまふべけれ云々」と仰せられたことを記してゐるが、これは「源氏物語」の雄大な結構や、宮廷生活の生きた歴史たる性質を持つてゐることなどを賞讃しての御言葉と思はれるから、少くとも物語の大部分はその頃既に出来てゐたのであらう。そしてその記事は寛弘七八年頃のことらしいのである。しかし手塚昇氏は「源氏物語の新研究」に於て、「落標」の卷にある明石中宮誕生の際御佩を用意すること、朱雀院が眼病御平癒後に讓位し給うたことなどを、それぞれ國史上の事實に據所を求め、前者は長和二年、後者は同五年の事實に基づいてゐるから、「落標」の卷はその後に書かれたものであると考證された。しかし一方與謝野晶子氏は「紫式部新考」に於て、式部の家集に長和五年以後の作と思はれる和歌の一首もないこと、父爲時が長和五年四月二十九日に出家したことなどから、長和五年の春に式部が歿したものと推定してゐる。手塚氏の説と共に注意すべきであるが、兩者の矛盾を解くためには、なほ研究の餘地があると思はれる。但し「更級日記」によれば、著者孝標の女は寛仁元

諸本

年（長和六年改元）に父の任地上總に下つたのであるが、その地で姉や繼母から光源氏に關する話を聞いて居り、寛仁四年に歸京して、その翌年治安元年には、源氏物語五十餘卷を伯母から貰ひ受けて居るから、その頃には源氏の全卷が出来てゐたのは勿論、既にその複本も出来てゐたわけである。

著者の自筆本は傳はらず、藤原行成の清書したといはれる本も傳はらない。現存の諸本には本文の異同が多く、それは著者の草稿本・中書本・清書本の差異に起因するといはれてゐるが、原作者以外の人々によつて加へられた改變も、異本發生の原因をなしてゐるであらう。而して「河海抄」によれば、源光行は、二條帥伊房本・冷泉中納言朝隆本・堀河左大臣俊房本（實業部）・從一位麗子本（河内守）・法性寺關白本（實業部）・五位帥三位俊成本・京極中納言定家本（實業部）等の八本を以てこの物語を校合取捨したといふが、これら諸本中藤原定家所持の本すなはち青表紙本以外のものは明らかでない。現存の諸本は（一）河内本・（二）青表紙本・（三）兩者に屬しない本の三種に大別される。

河内本は河内守源光行・その子親行等が當時存在した諸異本を以て校合した本で、鎌倉時代には最も權威ある校本であつたが、室町時代に至つて三條西實隆等定家の學統を奉ずる者が青表紙本を採用したために、河内本は影をひそめ、江戸時代の學者もその實物を知るものがない有様であつたが、大正十年「藝文」誌上に平潮家所藏の河内本が紹介せられて以來、諸家に藏せられる河内本が續々世上に現はれるに至つた。

青表紙本は藤原定家の校合所持した本である。「明月記」によれば、定家は元仁元年十一月から翌嘉祿元年二月十五日までに、家中の少女等をして「源氏物語」五十四帖を書寫せしめ、表紙をつけて、二月十六日に

外題を書いたのであるが、現在前田侯爵家に所藏される「花散里」「柏木」の二帖中「花散里」は定家の自筆、「柏木」は初の數葉を定家が書寫し、餘は別人に書かせたもので、表紙は古雅な青色鳥の子であり、この「明月記」の記事に該當する本の一部で、青表紙本の原本であらうといはれる。室町時代中期以後の諸註書の本文は概ねこの系統のものである。

河内本・青表紙本のいづれにも屬しないものは、互に語句文章が相違して、一系統に入れて見ることは出來ない。その發生の理由・経路は甚だ複雑で、まだ殆ど説明が與へられてゐない状態である。

## 古寫本

「源氏物語」の古寫本の傳存するものは夥しい數に上らやうであるが、こゝには世間に知られてゐる主要なもののみを河内本系統・青表紙本系統・兩者以外のものの三種に分けて掲げることにする。

## 一、河内本系統本

## ○尾張徳川侯爵家本 五十四帖 鎌倉時代寫

正嘉二年五月六日北條實時の奥書があり、實時が親行の本を書寫せしめて金澤文庫に藏めたものといはれる。

## ○平瀬氏藏本（内三十帖。鎌倉時代寫）

## ○東山御文庫本（南北朝時代寫）

## ○同七毫源氏（同上）

## ○曼殊院藏本（三帖。室町時代寫）

## ○金子元臣氏藏本（四十二帖）

## ○吉澤義則氏藏本（一帖）

## 二、青表紙系統本

## ○前田侯爵家本 二帖 鎌倉時代寫

## 第二篇 平安時代（物語）

「花散里」「柏木」の二帖で、前者は定家自筆、後者は初敷葉は定家自筆、餘は別筆。「明月記」嘉祿元年二月十六日の條に見える本の一部と推定されることは前述の通りである。

○池田龜鑑氏藏本 五十二帖 鎌倉時代寫

傳爲家・爲氏・行能・爲明等各筆本で、「花散里」「柏木」の二帖を缺くが、現存青表紙系統本の大部まとまつたものとして最古のものであらうといふ。

○宮内省圖書寮本 ✓ ○靜嘉堂文庫本 ○前田侯爵家一本 ○徳川侯爵家本（以上皆鎌倉時代寫）

三、河内本・青表紙本兩系統以外の本

○源氏物語繪詞 現存四卷 院政時代書並に書

尾張徳川侯爵家に三卷、益田男爵家に一卷所藏。繪は藤原隆能筆、書は世尊寺伊房筆などといはれるが、書體一様でなく少くとも五人の手に成つたらしい。詞書の文章は、河内本とも青表紙本とも可なりの差異がある。

右の外傳阿佛尼筆本以下鎌倉時代及びそれ以後の筆寫本中に前記二系統以外のものが多數存在する。花山院長親（號耕雲）が將軍義持に上つたといはれる謂はゆる耕雲本は、この異系統の本の代表と考へられて來たが、その大部分は河内本系統のものであり、池田龜鑑氏によれば、「松風」「橋姫」「宿木」「東屋」「浮舟」「蜻蛉」「手習」「夢浮橋」の八帖のみは、別種の本であるといふ。耕雲本の傳本中最も來歴の正しいものとしては、長享二年秋一條冬良の奥書を有する有栖川王府御藏本がある。

古版本

- 嵯峨本 ○元和本活字本 ○承應三年繪入本 ○萬治二年枕本 ○寛文十二年首書本

以上の版本は大體青表紙本系統のものである。明治以後の活版本は首書本を底本としたものが多い。

- 活版本
- 日本文學全書（第八—十二編） ○日本文學大系（第六・七卷） ○國文大觀（物語部一・二）
- 有朋堂文庫 ○國民文庫（第七・八） ○國文叢書（第一・二卷） ○新釋日本文學叢書（第一—三卷） ○日本古典全集（第一期）

參考書

「源氏物語」の註釋研究書類は夥しい數に上り、枚舉に遑がないから、こゝには主要なもののみを摘記するに止める。詳しくは藤田徳太郎氏「源氏物語研究書目要覽」、山岸徳平氏「源氏物語研究」（日本文學講座）等を参照せられたい。

註釋書

○源氏物語釋 一卷 藤原伊行

「源氏物語」の最古の註で、「伊行釋」ともいはれる。前田侯爵家に二條爲定筆と傳へられる寫本が一冊ある。群書類從本の「奥入」に伊行釋の大部分が含まれてゐる。

○源氏物語奥入 一卷 藤原定家（群書類從）

「伊行釋」に定家が補註したもので、「追註加」「定家卿釋」「難儀抄」などともいはれる。「源氏物語」の各帖の奥に書入

源氏物語

したのを、後に一卷としたものであるから、「奥入」と名づけた。前田侯爵家本・高野辰之氏本・神宮文庫本・阿波文庫本等の古寫本があり、各異同があるといふ。

○水原抄 五十四卷 源光行・同親行 (傳本不明)

光行の草案をその子親行が増訂して完成したもの。「原中最秘抄」「河海抄」などに引用されてゐる。

○原中最秘抄 二卷 源 親行 (群書類從)

親行の原著を孫の行阿等に至るまで増訂したもの。書名は「水原抄」中の最秘を記した抄の意味である。「河海抄」には「行阿釋」と記してゐる。前田侯爵家・阿波文庫等に古寫本がある。類從本は藤原長親(耕雲)の抄録した本である。

○紫明抄 三十六卷 素 寂 正應頃成

原名「光源氏物語抄」。別に「水原紫明抄」「素寂釋」ともいふ。五册本・十册本・十二册本等がある。著者素寂は源光行の子で親行の弟。内閣文庫・圖書寮・帝國圖書館・京都帝大等に寫本がある。

○河海抄 二十卷 四辻善成 (國文註釋全書)

一名「一葉抄」。南北朝時代康暦元年以前に成つたといはれる。始に總論を附し、物語撰述の由來・作者の傳等を記し註釋も從來のものに比べて著しく詳密である。小山田與清の「河海抄類字」は本書の索引で、帝國圖書館に寫本が傳はつてゐる。

○源氏物語千鳥抄 一卷 平井相助 (續群書類從)

別名「至徳記」「源氏御談義」「源氏講釋問書」「相助問書」。連歌師相助が至徳三年より嘉慶二年に至る四辻善成の講説を聞書したもの。

○源氏和秘抄 一卷 一條兼良 寶徳元年成 (續群書類從)

○花鳥餘情 三十卷 一條兼良 文明四年成 (國文註釋全書)

「河海抄」を増補訂正する目的で著されたもの。兼良にはなほ文明九年の「源詒秘訣」一卷(群書類從)がある。

○弄花抄 七卷 牡丹花宵柏・三條西實隆 文明八年成

宗祇の講説を宵柏が聞書し、實隆が増補を加へたもの。「源氏物語問書」「源氏問書逍遙院御抄」などの名もある。

○細流抄 二十卷 三條西公條 大永八年成

永正十年の三條西實隆の講説を子の公條が聞書したもの。「河海抄」「花鳥餘情」の説を承けて、私案を加へてゐる。

○明星抄 五十五卷 三條西實澄 (國文註釋全書)

細流抄に發端一卷を加へ、多少の修補を加へたもの。明暦三年の刊本がある。國文註釋全書に「細流抄」として入れたのは本書である。

○萬水一露 二十八卷 能登永閑 天正三年成

「河海抄」「花鳥餘情」「弄花抄」「細流抄」などの諸説を集め、兄宗碩の説をも入れてある。寛文三年の刊本がある。

○岷江入楚 五十五卷 中院通勝 慶長三年成 (國文註釋全書・國文學註釋叢書)

一名「濫觴無底抄」。「河海抄」以下の古註を集大成したもので、質量共に舊來の諸註書中最もすぐれてゐる。



○源氏物語湖月抄 六十卷 北村季吟 延寶三年

「源氏物語」全註の代表的なものとして、古來最も廣く行はれてゐる。原文を全部掲げ、古註を集めた上に師の箕形如庵の説並びに自説をも加へて頭註傍註を附し、總論・年立系圖・聖覺の「源氏物語表白」を添へてある。明治以後の複製本も數種あり、小田清雄校訂の國文全書本・猪熊夏樹校訂の大坂積善館本は「玉の小櫛」「玉の小櫛補遺」「源氏物語評釋」などによつて補註し（後者には有川武彦氏の再訂本がある）、古澤義則博士校訂本には索引一冊を添へてある。

○源氏外傳 五卷 熊澤蕃山 (國文註釋全書・國文學註釋叢書)

一名「源氏物語抄」「源語評」。蕃山の著を中院通茂が潤色撮要したものといふ。儒學の見地より解釋・批評を施したところに特色がある。大田南畝編「三十幅」中にも入つてゐる。

○源註拾遺 八卷 契沖 元祿九年成 (契沖全集・國文註釋全書)

主として「湖月抄」に記載された古註の誤謬を訂し、自説を述べたもの。古註の傳承を破つて新註の魁をなした劃期的の著である。

○源氏物語新釋 五十四卷 賀茂眞淵 寶曆八年成 (賀茂眞淵全集)

古註を取捨して、契沖・春滿・爲章らの説を擧げ、自説をも加へたもの。始に總考があり、文化十三年にそれだけを一卷として刊行した。全集本には眞淵の講説を門人の聞書したものをも加へてある。

○源氏物語玉の小櫛 九卷 本居宣長 寛政八年成 (本居宣長全集)

始に總論及び年立があり、次に「湖月抄」の本文と異本との校異を掲げ、第五卷以下は「湖月抄」に基づいて古註の誤

を正してゐる。總論中の物語論は、ものあはれを中心として物語の本質を論じたもので、劃期的の文學論である。寛政十一年の刊本がある。

○玉の小櫛補遺 三卷 鈴木朗 文政三年

○源註餘瀝 二十卷 石川雅望 (國書刊行會本)

別に拾遺五卷がある。湖月抄を補足したもので、契沖・眞淵らの説を多く引き、解説が行届いてゐる。

○源氏物語評釋 十四卷 萩原廣道 嘉永七年成 (國文註釋全書)

「花の宴」までの註釋であるが、古來の諸説を斟酌して、新案を下し、俗語の傍註を施し、評を加へ、問々文脈を圖示し、別に「餘釋」二卷、「語釋」二卷を添へてある。從來の諸註書中最もすぐれたものといはれる。

○源氏物語俚諺解 四卷 佐佐木弘綱 安政四年成

「夕顔」の卷まで原文の傍に俗語の譯を施したもの。未刊。佐佐木信綱博士の許に稿本がある。

○源氏物語考 二十七卷 岡本保孝 (況齋叢書)

「篝火」の卷までの註。未刊。帝國圖書館藏況齋叢書第七十二冊より第七十九冊までの八冊が本書の稿本である。

○源氏物語講義 十一冊 鈴木弘恭 明治十七年

「櫛」の卷まで、原文に段落を設け、頭註傍註を施したもの。著者の講義の筆記である。

○新釋源氏物語 二冊 藤井紫影等 明治四十四年・大正三年

藤井紫影・沼波瓊音・佐々醒雪・笹川臨風四氏の共著で、梗概・語釋・口譯・批評を併せたもの。「習譯」までで終つた。

源氏物語

○源氏物語詳解

五冊 池邊義象・鎌田正憲 大正五年

従来の諸註の據るべきものを網羅し、間々私接を加へ、各巻の初に梗概を、終に總評を附し、明治以後 註釋書中最も詳密なものであるが、「花の宴」まで終つてゐる。

○定本源氏物語新解

三冊 金子元 臣 大正十四年—昭和五年

本文は青表紙本を河内本によつて校合訂正し、頭註を加へたもの。別に「山路の露」年譜・系圖を附載してある。

○源氏物語諸抄大成

二冊 永井一孝 昭和二年

「湖抄」を本にして、諸註を増補したものである。

○源氏物語新釋

一冊 瀧澤良芳 昭和二年 (「明石」まで)

○新編源氏物語詳解

一冊 二之宮英雄 昭和三年 (「空蟬」まで)

○集註源氏物語新考

一冊 永井一孝 昭和四年 (「末摘花」まで)

○源氏物語講義

一冊 高橋刀川 昭和四年 (「花散里」まで)

○對源氏物語講話

一冊 島津久基 昭和五年

「桐壺」「帚木」の二巻を對譯し、綿密な語釋と評論を加へたものである

○新講源氏物語

十二冊 石田元季等 昭和六年以降

石田元季・小室由三・岡田稔・石井直三郎・山崎敏夫の六氏が「桐壺」より「浮舟」までのうち十二巻を選んで分擔し、原文を掲げて、語釋・口譯・評を施したものである。各巻一冊づつになつてゐる。

○新釋源氏物語

一冊 末政寂仙 昭和七年 (部分的の選釋)

○源氏物語講義

卷一 徳本正俊 昭和八年

○源氏物語講義

小杉檀邨 (國文學研究會講義錄)

○源氏物語講義

飯田武卿 (國語講義錄)

○源氏物語選釋

長連恒 (早稻田大學講義錄)

○源氏物語選釋

永井一孝 (早稻田大學講義錄)

○源氏物語講義

岩城準太郎 (國文學講座)

○源氏物語詞章研究

宮田和一郎・島田退藏 (國語國文の研究)

現代語譯

○對譯源氏物語

六冊 宮田和一郎 大正十二年—昭和三年

「桐壺」より「明石」まで及び「橋姫」より「夢浮橋」まで。語釋・原文・口譯を三段に組み、各巻の初に概要がある。

○全譯王朝文學叢書 (第四—第九)

六冊 吉澤義則監修 大正十三年—昭和二年

外國語譯

○漢譯「紫史」

(空蟬の卷) 一冊 川合次郎 明治二十六年

○英譯「源氏物語」

(十七帖) 一冊 末松謙澄 明治十五年

○獨譯「源氏物語」 (十七帖) 一冊 Müller ja Busch 明治四十四年

末松氏の英譯(縮譯)より重譯したもの。

○英譯「源氏物語」 六冊 Arthur Waley 大正十四年—昭和八年

源氏物語全文の英譯で、逐語譯に近いものである。外人の手に成った翻譯として、これ以上のものは容易に得られな  
いであらう。

梗概・提要

○源氏小鑑 二卷・三卷 藤原長親

長親が將軍足利義持に奉った梗概書。慶長十五年活字本・寛永頃の活字本及び明曆三年・寛文六年・延寶三年・明和三  
年・寛延四年・文政六年などの刊本がある。

○源氏物語提要 六卷 源範政 永享四年成

○十帖源氏 十卷 野々口立圃 萬治四年

○おさな源氏 十卷 野々口立圃 (近世文藝叢書)

「十帖源氏」を一層簡略にしたもの。繪入の五冊本で、寛文初年頃の松會版・寛文十年版等がある。

○源氏物語忍草 五卷 北村湖春 元祿初年成

梗概書の代表的なもの。天保五年の刊本があり、名著文庫・國文叢書本「源氏物語」、日本文學大系本「源氏物語」等  
に収めてある。

○源氏物語梗概 一冊 長連恒 明治三十九年

○源氏物語大意 一冊 尾上登良子 明治四十四年

○新譯源氏物語 四冊 與謝野晶子 明治四十五年—大正二年

源氏全篇の縮譯である。

○縮譯源氏物語 一冊 島田退藏 大正十二年

圖案・改作

○源氏明石物語 一冊 作者未詳 貞享三年

源氏と明石上との物語を古淨瑠璃風に體案したもの。

○風流源氏物語 六冊 都の錦 元祿十六年 (近世文藝叢書)

「桐壺」「帚木」の二卷を浮世草子風に改作したもの。

○若草源氏 六冊 梅翁 寶永四年

「風流源氏物語」の後を承けて「帚木」の末より「夕顔」まで浮世草子風に改作したもの。

○雛鶴源氏 六冊 梅翁 寶永五年

前者に繼ぐもので、「若紫」「末摘花」の改作。

○紅白源氏 六冊 梅翁 寶永六年 (近世文藝叢書・帝國文庫、珍本全集)

前者に繼ぐもので、「紅葉賀」「花宴」の改作。

源氏物語

○俗解源氏

六冊 梅 翁 寶永七年

一名「源氏物語俗解抄」。「桐壺」と「帚木」兩夜の品定までの改作。

なほ元文三年刊行の「若草源氏」(七冊)は「俗解源氏」「若草源氏」「雛鶴源氏」の三部を合せたものである。

○新橋姫物語

き し 女 正徳四年

一名「都の辰巳」。宇治十帖の改作。

○俳諧源氏

十冊 建部 綾 足 寛延二年成

讀本風の改作で、和歌の代りに俳諧を挿入してある。

○仙源抄

一卷 長 慶 院 弘和初年成 (群書類従)

○類字源語抄

一卷 竺 源 惠 梵 永享三年成 (續群書類従)

○續類字源語抄

一卷 法 眼 紹 永 文明十一年成 (續群書類従)

○源偶篇

一卷 契 沖 貞享二年成 (契沖全集)

○源語梯

三卷 天明四年

五井純積の「源語話」を後人の纂訂刊行したもの。

○掌中源氏物語

一卷 尾崎 雅 嘉 寛政九年

以上はいろは別又は事項別などに配列した源氏物語辭書で、この類のものが他にもたくさんあり、多くは寫本で傳はつてゐる。

○源氏物語年立 一卷・二卷・三卷 一條 兼 良 享徳二年成

○源氏物語系圖 一卷 三條 西實隆 長享二年成

○源氏年紀考附年立圖説 一卷 本居 宣 長 (本居宣長全集)

舊説の誤謬を訂し、明快な年立を添へたもの。「玉の小櫛」にも收めてある。

○源氏物語董草 三卷 北村 久 備 文化九年

上中二卷は系圖、下卷は年表で、この種の書中代表的のもの。國文叢書本・日本文學大系本の「源氏物語」に附載されてゐる。

○源氏物語精粹 一冊 沼澤 龍 雄 昭和三年

「源氏物語」要所の抜萃(頭註梗概附)と系圖・年表・諸家の源氏評などを合せたもの。

○源氏要覽 一冊 鈴木 文 子 昭和四年

「源氏物語」各卷別の系圖を主とした圖表表解の書である。

研究・評論

前掲註釋書類の多くは、はじめに多少とも研究・評論に亘るものを持つて居り、なほ「無名草子」中の源氏批評の如きも注意すべきものである。

- 伊勢源氏十二番女合 一卷 (群書類從)
  - 源氏人々の心くらべ 一卷 (群書類從)
  - 源氏男女裝束抄 三卷 月村齋宗碩 元祿九年
  - 源氏官職故實秘抄 八卷 壺井義知 (國文註釋全書・國文學註釋叢書)
  - 紫家七論 一卷 安藤爲章 元祿十六年成 (國文註釋全書)
- 儒家の源氏評論として代表的のもの。國文叢書本・新釋日本文學叢書本の「源氏物語」及び名著文庫本「源氏物語忍草」等にも附載してゐる。
- 源氏紐鏡 一卷 源 匡平 安政六年
- 著者の父堀内昌輝の「葵の二葉」(十八卷)・「底の玉藻」(十卷)を提要縮約して書改めたもので、源氏物語中の人物批評と準據説とを併せてゐる。
- 源語奥旨 一卷 近藤芳樹 明治九年 (國文叢書)
  - 清少納言と紫式部 一冊 梅澤和軒 明治三十五年
  - 光源氏の一生 一冊 高須梅溪 大正六年
  - 源氏物語の新研究 一冊 手塚 昇 大正十五年 (國文學研究叢書)
  - 源氏物語綱要 一冊 藤田徳太郎 昭和二年

- 「國語と國文學」源氏物語號 (大正十四年十月)
- 「月刊日本文學」源氏物語號 (昭和六年九月)
- 源氏物語研究 島津久基 (日本文學講座)
- 源氏物語鑑賞 吉井 勇 (日本文學講座)
- 源氏物語評論 島津久基 (岩波講座「日本文學」)
- 紫式部 石村貞吉 (岩波講座「日本文學」)
- 源氏物語に於ける落窪物語の主なる影響 長谷川福平 (國學院雜誌七ノ六)
- 源氏物語の道義觀 岩城準太郎 (帝國文學八ノ十・十二・九ノ一)
- 紫式部新考 與謝野晶子 (太陽二十四ノ二)
- 源氏物語の構想 藤田徳太郎 (國文教育五ノ一・二)
- 源氏物語先蹤に關する一考察 岩城準太郎 (國語國文の研究二十九)
- 源氏物語の構想について 門前眞一 (國語國文の研究三十二・三十四)
- 紫式部宮仕年代考 今小路覺瑞 (國語國文の研究三十三・三十二)
- 源氏物語のモデル 手塚 昇 (國語と國文學一ノ一・二)
- 源氏物語と謠曲 佐成謙太郎 (國語と國文學二ノ十)

- 薫の性格描寫の解剖とその批評
- 源氏物語中の引歌
- 紫式部の觀照と思索
- 紫式部の人としての生涯
- 源氏物語に於ける女性精神の展開
- 夕霧・葵の二卷に就いて
- 源氏物語に於ける二重人格の描寫
- 源氏物語に就いて
- 源氏物語成立史序説
- 源氏物語に於ける庶民階級

研究史・書志

- 源氏物語研究書目要覺 一冊 藤田徳太郎 昭和七年
- 源氏物語の研究 山岸徳平 (日本文學講座)
- 源氏物語系統論序説 池田龜鑑 (岩波講座「日本文學」)
- 源氏物語論の考察 久松潜一 (國語と國文學二ノ十)
- 齋藤清衛 (國語と國文學二ノ十)
- 鳥野幸次 (國語と國文學二ノ十)
- 西片俚二 (國語と國文學六ノ十)
- 河岡新兵衛 (國語と國文學六ノ十)
- 三浦なを (國語と國文學八ノ十二)
- 河岡新兵衛 (國語と國文學九ノ三)
- 西下經一 (國語と國文學九ノ八)
- 和辻哲郎 (思想十五)
- 西田正一 (言語と文學昭和五ノ六)
- 京口元吉 (月刊日本文學昭和六ノ十)

- 源氏物語初期の研究
- 源氏物語の古寫本その他
- 源氏物語研究史の新資料
- 源氏物語に於ける古代の註釋及び研究
- 源氏物語の書誌
- 古註の集成——岷江入楚
- 源氏物語千鳥抄について
- 源氏物語の英譯
- 俳諧源氏と田舎源氏
- 證本源氏物語の原本について
- 源氏供養と其表白とに關する一考察
- 珊瑚秘抄とその學術的價值
- 水原抄紫明抄の撰者

- 山岸徳平 (國語と國文學二ノ十)
- 佐佐木信綱 (國語と國文學二ノ十)
- 橋本進吉 (國語と國文學二ノ十)
- 松井簡治 (國語と國文學二ノ十)
- 植松安 (國語と國文學二ノ十)
- 野村八良 (國語と國文學二ノ十)
- 橋本進吉 (國語と國文學二ノ十)
- 高木市之助 (國語と國文學二ノ十)
- 藤田徳太郎 (國語と國文學七ノ三)
- 三條西公正 (國語と國文學七ノ五)
- 小堀久滿 (國語と國文學八ノ五)
- 池田龜鑑 (國語と國文學九ノ五)
- 山脇毅 (藝文十二ノ一)

山脇氏はなほ「藝文」誌上において、「河内本源氏物語とその校訂者」(十二ノ二)、「平瀬本源氏物語」(十二ノ十二)、「河海抄の系統について」(十三ノ七)、「曼珠院本源氏物語」(十三ノ十二)、「三條西實隆と源氏物語」(十四ノ十一)、「源氏物語

聞書と弄花抄(十五ノ一・二)、「源氏物語弄花抄と細流抄」(十五ノ四)、「實際の源氏物語系圖」(十六ノ七)などの研究を發表して居られる。

- 源氏物語古寫本概説 徳本 正俊 (國語教育十三ノ四)
- 源氏物語古寫本の一 野村 八良 (心の花二十九ノ八)
- 鎌倉時代の源氏物語 吉澤 義 則 (歴史と地理七ノ五)
- 河内本源氏物語「かげろふ」卷の發見 西岡 虎之助 (歴史と地理五十ノ一)
- 源氏大鏡と三帖源氏と十二帖源氏 藤田 徳太郎 (書誌二ノ三)
- 源氏物語梗概書目解題補遺 藤田 徳太郎 (國文教育昭和三ノ一)
- 源氏物語は零本たる證 西村 兼 文 (史海二十九)
- 源氏物語の古鈔についての一考察 宮田 和 一郎 (國語國文の研究二十六・二十八・三十)
- 源氏一品經と源氏表白 後藤 丹 次 (國語國文の研究四十八)
- 源氏物語研究史斷片 小川 壽 一 (歴史と國文學昭和五ノ九)
- 無名草子に於ける源氏物語論の考察 田 邊 爵 (國漢研究昭和七ノ四)
- 源氏の卷々に關する疑問 宮田 和 一郎 (月刊日本文學昭和六ノ十二)
- 源氏物語の鏡類 宮田 和 一郎 (月刊日本文學昭和七ノ七)

○河海抄の功罪

宮田 和 一郎 (國語・國文昭和六ノ十二)

○實際の見た源氏物語註釋書

山 脇 毅 (國語・國文昭和七ノ八)

○源氏物語の河内本と流布本の文章

藤田 徳太郎 (鹿兒島日本文學昭和七ノ八)

◎狭衣物語 (さごろもものがたり) 四卷

名稱

「源氏物語」の後に於て、これに摸して作られた物語の一つで、「和歌色葉集」「八雲御抄」などには「狭衣大將」と見えてゐるが、「狭衣物語」といふのが普通である。この名稱は、卷一中の和歌「いろいろに重ねては着じ人知れず思ひ初めてし夜半の狭衣」から出てゐる。

梗概

嵯峨院の御弟堀河の大臣の子に狭衣大將といふ容儀才藝變絶の貴公子があつた。先帝の皇女で同じ家に養はれてゐた源氏宮といふ従妹に當る美人に思ひを寄せるやうになつたが、戀が叶はないうちに源氏宮は東宮の召しで宮中に入らうとする。帝は女二宮を狭衣に賜はらうとするが、源氏宮を忘れかねて氣がすまない。憂悶の日を送るうち、計らずも中納言の女飛鳥井の姫君が、誘拐されてゆくのを見て、これを救ひ、それより源氏宮に對して満されぬ心を、この姫君によつて辛うじて慰めてゐたが、姫君は心ならずも式部大輔道成に伴はれて筑紫に下ることになり、その途中悲しみの餘り入水し、一旦救はれたが病氣で死んでしまふ。一方女二の宮はふとしたことから狭衣大將と契り、懐妊したが、大將はそしらぬ態にもてなすので、女二宮

の母君もそれを思ひなやんで、生れた子は自分の産んだことにし、大將に對する憤滿のために病死した。女二宮も之をはかなんで尼になる。一方源氏宮は東宮に入内することが事情のために延びてゐる間に神託によつて齋院になる。狭衣大將は皮肉な運命で帝の妹一品の宮といふさた過ぎた女を妻とするやうになつたが、心の満たされるすべもない。終ひに源氏宮の姪に當る宮によく似た女を得て漸くむすほれた心がとけた。大將はやがて帝の位を譲り受けることになつてめでたく局を結ぶ。可なり事件が複雑で變化の多い作であるが全體の統一がついてゐて構造は割によく纏まつてゐる。

作者については紫式部の女大貳三位とする説、その妹辨の局とする説、後朱雀天皇の皇女和子内親王（六條齋院）に仕へた宣旨とする説などがあり、大貳三位説は「河海抄」に見えるが、「源氏物語」との聯想から生じたと思はれる説で、確かな根拠がなく、他の二説も確證はないが、定家作と傳へる「僻案抄」の中に「この物語和子内親王宣旨作りたりときこゆ」とあり、藤岡作太郎博士が「國文學全史平安朝篇」に於て、これを比較的信用出来るものとされて以來、宣旨説が有力なものとなつてゐる。

製作年代も判明しないが、宣旨作とすれば永承・天喜頃に成つたものであらう。但し津田左右吉博士は「文學に現はれたる我が國民思想の研究」に於て、白河院の頃に成つたものとされてゐる。

古寫本

○深川淳一氏所藏本 卷四缺

西本願寺の舊藏で、鎌倉初期の書寫と見られ、流布本と對校して甚だしい異同があるといふ。

作者

年代

諸本

○松浦伯爵家本（卷三までは鎌倉中期の書寫、卷四はそれより少し後の書寫らしい）

○京都帝大圖書館本 ○同文學部研究室本 ○宮内省圖書寮本 ○内閣文庫本

○神宮文庫本 ○東京帝大國文研究室本 ○第四高等學校本 ○帝國圖書館本（松浦家本の轉寫本）

古版本

○元和九年木活字本 八冊 ○寛永木活字本 八冊 ○承應三年本 十六冊

承應三年本は本文は木活字本を踏襲したものであるが、卷一・二を各上下に、卷三・四を各上中下に分けて十冊とし、外に目錄・年序一冊、系圖一冊、下紐四冊を合せて、全部で十六冊。寛政十一年の再版本がある。明治以後の諸叢書に收められたものは、いづれもこれを底本としてゐる。

註釋書・研究書

○狭衣系圖 一卷 三條西實隆（國文叢書本附録）

○狭衣下紐 四卷 里村紹巴 天正十八年成

單に「下紐」とも「狭衣抄」とも呼ばれる。承應三年本「狭衣物語」に附載され、また續群書類從・國文註釋全書・國文學註釋叢書中にも收めてある。

○狭衣文段 八卷 著者未詳 文祿三年序

第二篇 平安時代（物語）



「下紐」の説を増補したもの。静嘉堂文庫に寫本がある。

- 狭衣物語抄 二冊 猪苗代兼壽 天和二年成 (寫本帝國圖書館)
- 狭衣物語入紐 一卷 河村秀根 (自筆稿本名古屋市立圖書館)
- 清水濱臣書入本 (無窮會・大阪府立圖書館・帝國圖書館)
- 全譯王朝文學叢書 (第二・第三) 二冊
- 狭衣の作者 野々口精一 (國學院雜誌十五ノ九)
- 狭衣作者考 櫻井秀 (國學院雜誌十五ノ十)
- 雅望書入本狭衣物語より見たる物語の構想の一考察 久松潜一 (黒潮三ノ一)
- 狭衣物語 入江相政 (岩波講座日本文學)
- 狭衣物語の一傳本 武田祐吉 (文學昭和七年五月)
- 狭衣物語新釋 平井孝一 (國漢研究昭和七年二月一十月)

◎濱松中納言物語 (はままつちゆうなごんものがたり) 現存五卷

安居院澄憲の「源氏一品經」、定家本「更級日記」奥書、「拾遺百番歌合」「明月記」「無名草子」などには、「御津濱松」「みつのはままつ」「水濱松」などと記されてゐるが、現存の諸寫本は、「濱松中納言物語」「濱松中

名稱

作者

年代

卷數

納言」「濱松の中納言」「濱松物語」「濱松中納言殿物語」などと題してゐる。「みつのはままつ」は後に記す如く、作中にある中納言の和歌に據るもので、恐らくそれが原名であつたらうと思はれる。

作者は菅原孝標の女と傳へられてゐる。孝標の女は「更級日記」の著者であるが、藤原定家の書寫した「更級日記」(御物本)の奥書に、「よはのねざめ、みつのはままつ、みつからくゆる、あさくらなどは、この日記の人のつくられたるとぞ」と書かれて居り、その「みつの濱松」はこの物語を指すもので、この書名は現存本の首卷にある「日の本のみつの濱松こよひこそわれを戀ふらし夢に見えつれ」の和歌から出てゐることは明らかである。藤岡作太郎博士は、作中に夢の記事の多いことが「更級日記」と共通であり、「源氏物語」に摸した點の多いことも「源氏」の耽讀者であつた「更級日記」の著者にふさはしいとして、この物語を孝標の女作とする所傳を是認し、それ以後この説に對して有力な反對説を唱へたものを見ない。

製作年代は明らかでないが、松尾總氏の「濱松中納言物語末巻略考」における研究によれば、現存本第五卷中の文句に、周防内侍作の和歌「契りしにあらぬつらさもあふことのなきにはえこそうらみざりけれ」(後拾遺集「戀三」)の第四・五句をもとにして書いたらしいところがあり、その和歌の推定製作年代より推して、皇紀一七一〇年(後冷泉天皇永承五年)頃以後に成つたものと考へられ、作者を菅原孝標の女とすれば、四十三歳頃以後の作といふ事になる。

本書は近頃まで四卷しか存在が知られず、それが完本でないことはいろいろの點から考へられてゐた。すなはち黒川春村は「拾遺百番歌合」に採られた本書の和歌十五首中、二首が傳本に缺けてゐること、同じく

「風葉集」にのせた二十八首中九首が缺けてゐることなどに注意し、それらの缺けた歌と本書との關係を考へて、卷首に缺卷があることを論じ（これらの歌はこの物語の刊本の終に「在他書缺物語歌」として附載してある）、更に藤岡博士は「無名草子」の記事に基づいて、終の卷も失はれたものであらうと論じた。しかるに昭和五年の秋尾上八郎博士の藏書中より本書の末卷が発見されて、五卷現存することとなり、缺けてゐるのは首卷だけと考へられるに至つた。

梗概

缺けたと思はれる部分を補つて全體の梗概を簡単に記せば次のやうである。

或宮の北の方は宮のなくなつた後、左大將に再嫁した。左大將には數人の姫君があつた。北の方は宮の遺れがたみの男子を連れ子して行き、その子は左大將の姫君と一所に成長して中納言になつた。中納言は大君と戀仲になつたが、左大將が式部卿宮の望に副はうとしてこれを許さないで、世をはかなんでゐるうちに、亡き父宮が、今は唐の第三皇子に轉生してゐられるといふ話を聞き、またその夢をも見たので、思慕のあまり、渡唐を思ひ立ち、三年の暇を乞うて日本を去つた。大君は失望して尼になつた（以上散佚首卷）。

中納言は無事に唐についたが、亡き父宮の生れ變りだといふ第三皇子は母后と共に高陽縣に居ると聞いて尋ねて行つた。この母后は筑紫に流された或親王（上野宮）の姫君と日本に來た唐の使臣との間に生れた子であつたが、中納言はこの人を見て、大君のことも忘れる位になり、つひに契を結んで、若君が一人出來た。唐の一の大臣の五の君も中納言を慕つたがその戀は叶へられなかつた。そのうち三年の期限が切れて中納言は若君を伴つて日本に歸つた（現存本第一卷）。

唐の后は日本にゐる母を戀しく思ひ、中納言に手紙を托した。中納言は歸朝して見ると、左大將の怒も解けてゐたので、大君と共に棲むことになつたが、后の依頼を果すために后の母を吉野へ尋ねて行く（現存本第二卷）。

前に入唐して后から母への音信を托されて歸朝した一人の聖があつて吉野の奥に居り、后の母もそこにゐた。その母は唐の使に別れてから、帥の宮に思はれて姫君を一人生み、のち、尼になつて吉野に籠つてゐたのである。中納言はこの人たちに遇つて、唐の后のたよりを傳へ、尼からその姫君を托される（現存本第三卷）。

とかくするうちに尼がなくなり、中納言は吉野の姫君を迎へとつて、唐の后との間に出來た子供をこれに托し、また唐の后のことも話した。その後或日空中に琴が聞えて、高陽縣の后が、この世の縁終つて天に生れたと知らせる。同じ聲が三度まで聞えたので、中納言はそれを事實だと思つた。

さきに大君を所望した式部卿宮は、大君の出家後、その妹の姫君を得たのであつたが、中納言が吉野から若い美人を捜し出して來たことを聞いて、好奇心を動かしてゐるうち、その姫君がひそかに清水に參籠したことを知り、訪ねて行つて、見ることが出來た。そしてその美しさに魅せられて、ぬすみ出して連れて行かうといふ氣になつた（現存本第四卷）。

從來の傳本はこゝで終つてゐたのであるが、「無名草子」の記事や「風葉集」中の和歌によつて、そのあとに、姫君が式部卿宮にぬすみ隠されたこと、中納言がそのために悲歎にくれたこと、<sup>(1)</sup> 姫君は思ひあまつて式

部卿宮に「中納言に告げさせ給へ」といひ、また煩悶して死を思つたりすること、唐の后が再び人界に生を得て、姫君の腹に宿つたといふ夢の告があつたこと、式部卿宮が東宮となつたことなどが書かれてあつたものと、推測されてゐた。しかるに、前記尾上博士所蔵本の末巻には、それらの事實がすべて書かれて居り、最後は、唐の宰相から中納言へ消息が来て、去年三月十六日に高陽縣の后が亡くなられて、帝が位を捨てて剃髪されたこと、唐の一大臣の五の君が中納言を戀ひしたふあまり、尼になつて山に入つたことなどの知らせがあり、中納言はさきに見た夢を思ひ合せて、ただ涙に沈んだことが書かれてゐるといふ。

註(1)(3)「無名草子」に「吉野山の姫君もいとをしき人なり。式部卿宮にぬすまれて思ひあまるにや、中納言に告げさせ給へといへるこそ浅ましくいとをしけれ。さて、死出の山懸ひわびつゝぞかへり來し尋ねむ人を待つとせしまになどよめるもまたいとをし。」

(2)「風葉集」に、「人を行方しらずなして歎き侍りけるころ、尾花の風になびくを見て濱松の中納言尋ねべき方しなければ故郷の尾花が袖にまかせてぞ見る」

「何となく見なれ侍りける女を行方しらずなして侍りけるところにて月を見て 濱松の中納言思ひ出づる人しもあらじ故郷に心をやりて澄める月かげ」

(4)「無名草子」に、「又かの后吉野の君の腹に寄りぬと夢に見たる程などみだりがはしく云々」

(5)「風葉集」に、式部卿宮の歌を「濱松の東宮」の歌としてあげてゐる。

和 本

古 版 本

○尾上八郎博士本

○帝國圖書館本

○宮内省圖書寮本(三部)

○京都帝大國文研究室本(四部)

○前田侯爵家本

○松井簡治博士本(四部)

○佐々木信綱博士本

○藤井乙男博士本

○大阪府立圖書館本

○内閣文庫本(二部)

○東京文理科大學本(二部)

○東北帝大狩野文庫本(二部)

○彰考館本(二部)

○無窮會神習文庫本

○靜嘉堂文庫本

○刈谷町立圖書館本

○神戸第一高女本

右のうち尾上博士本のみは五冊本で、末巻を備へてゐるが、他は初末を缺く四冊本またはその端本である。書寫年代は何れも新しく、江戸時代以前に遡るものがなく、内容も皆極めて近似して、異本と目すべきものは存しないが、帝國圖書館本・前田侯爵家本は最も良い本であるといふ。

古 版 本

○丹鶴叢書本 八冊 嘉永元年

五本を以て校合した善本である。

活 版 本

○日本文學全書(第六編)

○國文大觀(物語三)

○國文叢書(第十二卷)

○日本文學大系(第二卷)

○博文館叢書

○國書刊行會本丹鶴叢書(第七)

刊本は初末を缺く四巻のみで、末巻はまだ刊行の運びに至らない。

第二篇 平安時代(物語)

参考書

研究書

- 濱松中納言物語目録 一卷 高田 與 清 (帝國圖書館藏書目録)
- 濱松中納言物語系譜 一卷 岡本 保 孝 (國文學註釋叢書)
- 古本住吉物語と濱松中納言末卷の發見 池田 龜 鑑 (國語と國文學昭和五ノ十一)
- 濱松中納言物語末卷略考 松尾 聰 (國語と國文學昭和六ノ四)

◎夜半の寢覺 (よはのねざめ) 現存五卷

定家本「更級日記」(御物本)の奥書には「よはのねざめ」、「拾遺百番歌合」「明月記」には「夜寢覺」、安居院澄憲の「源氏一品經」「無名草子」には「寢覺」、「風葉集」には「ねざめ」と記されて居り、現存諸寫本にも「夜の寢覺」と題したものと、單に「寢覺」と題したものとがある。後述黒川氏本系統の諸本の末尾が、「後の世をだにかでと思ふを、さすがにすがしく思ひたつべくもあらぬほだしがちになりまさるこそ心うけれど、よるの寢覺絶ゆるまなくとぞ」となつて居り、それより推せば、「よるの寢覺」といふのがもとの名稱であつたかも知れない。但し卷一に「はかなくて君に別れし後よりはねざめぬよなくものぞ悲しき」といふ歌があり、なほ文中諸所に「寢覺」の語が散見するから、それに本づいて、單に「ねざめ」または「寢覺物語」の名が古くから行はれてゐたかとも思はれる。今日は「更級日記」の奥書に従つて「よはのねざめ」といふのが通り名になつてゐる。

傳本には原作の殘缺本と、改作縮小本(後述中村本)の二種があり、共に五卷であるが、殘缺本は卷二と卷三との中間及び卷五以下に數卷乃至十數卷の缺脱がある。原作の全卷數について、黒川春村は十五卷ばかりと想像し(古物語類字鈔)、横山由清は「十卷か或は十五卷ばかりにもやと思はる」といひ(窓のともしび)、最近松尾聰氏は「完本夜半の寢覺は正篇約十二・三卷、續篇約六・七卷、合計二十卷位のものであらう」といつて居られる(岩波講座「日本文學」中「菅原孝標女」その作品夜半の寢覺の形體について)。

定家本「更級日記」の奥書の記事により、作者は藤原孝標の女と傳へられた(濱松中納言物語作者の條参照)。藤岡作太郎博士は、作中に「白河院」の名があることより、白河天皇の御代以後の作となし、隨つて孝標の女を作者とする説を否定されたが(國文學全史平安朝篇)、橋本佳氏はこれに對し、「白河院」は別墅名であつて、白河天皇とは關係がなく、隨つて藤岡博士の説は誤であることを明らかにされた(思想「昭和六年四月號」現存夜半の寢覺は果して改竄本なるか)。今は「更級日記」「濱松中納言物語」との比較研究により、本書も孝標の女の作とすることに、諸家の意見が一致してゐる。

製作年代は明らかでない。作者を孝標の女とすれば、「濱松中納言物語」との先後が問題になるが、これについては兩説があり、池田龜鑑氏は、思想・文章の圓熟してゐる點から本書を後であらうといひ(岩波講座「日本文學」中「書目解説」)、橋本佳氏は、「濱松」は老年期の精彩を缺いた作、「寢覺」は觀察・描寫の確かな壯年期の作といふ印象を受けるとし、なほ兩作を「更級日記」と比較して見ると、「寢覺」と「更級」との類似

名稱

卷數

作者

年代

より、「落松」と「更級」との類似の方がより密接のやうに思はれるといひ、「寢覺」は「更級」「落松」よりも早く作られたものと想像してゐる（本校本夜半の寢覺附録）。しかし兩説とも、その根據はまだ主觀的印象の範圍を出ないやうであるから、なほ精密な考察が加へられる餘地があると思はれる。

前述の如く本書現存本には中間及後部に少からぬ缺巻があり、改作縮小本たる中村本も後部を省略してゐるらしいから、全體の内容を記すことは困難であるが、松尾聰氏の研究によれば、原作はその構成上正篇・續篇の二部から成り、親子二代に亘る戀愛中心の物語であつたらしい。正篇は源氏の大匠の中君を女主人公とし、關白の息中納言を男主人公として、中君は容貌美しく音楽に長じた才媛であつたが、幼時の夢に天女から、「あはれあたら人のいたく物を思ひ、心を亂し給ふべき宿世のおはするかな」といはれた豫言が、一生を通じて實現して行くことを描いたもので、はじめ中君と中納言とは互に異人と誤信して契を結んだために相思の仲となりながら相添ふことが出来ず、中納言は中君の姉大君と結婚したが、中君に對する思慕が増すばかりで、妻の大君も苦しみ、中君も苦しむ。そのうち中君は中納言の叔父なる左大將の愛にひかれて、その後妻となり、男子を生んだが、これは實は中納言の子であつた。その後、中納言の妻大君が産後の肥立が悪くて死に、中君の夫左大將も死んだので、二人の關係は好轉しかけたが、帝が中君に深く懸想されたために、三人の間に葛藤を生じ、皆懊惱する。中納言はこれより先朱雀院の女一宮を妻としたのであつたが、中君にひかれて宮を愛さないで、宮の母君大皇宮は、中納言と中君との仲を裂き、帝と中君とを結びつけて我が女の幸を計らうとする。中君は帝に従はず、遂に自分の立場に苦しんで、父の隠棲してゐる廣澤に遁れ

出家しようとするが、それも叶はず、自分の過去を追憶して、罪劫の深きに泣く。——現存本はこれで終つてゐるが、その後、中納言と中君との間に生れた第一女の裳着のこと、帝（冷泉院）の讓位のこと、第一女が新帝の皇后に立つこと、中君の父大臣の七十の賀のことなどがあつて、續篇につづき、續篇は中納言と中君との間に生れた男子まさこを主人公とし、冷泉院の女三宮を女主人公として、その間の戀愛の経緯を描きなほその間に中君・中納言・冷泉院などの後日譚があつて、終に中君の死が書かれてゐたと思はれる。

以上はこの物語の主要な題材を極めて簡単に記したに過ぎない。中村本による梗概は藤岡博士の「國文學全史平安朝篇」に書かれてあり、池田龜鑑氏の「日本文學書目解説平安朝時代上」（岩波講座「日本文學」）にも現存本第五巻までの相當詳しい梗概があり、また松尾聰氏の「菅原孝標女——その作品夜半の寢覺の形態について」（岩波講座「日本文學」）には、缺巻の部分の記事を「拾遺百番歌合」「無名草子」「風葉集」「寢覺繪卷詞」などの資料によつて精細に考證されて居り、なほ最近刊行された藤田徳太郎増淵恒吉兩氏共編の「よはのねざめ」に附載された増淵氏の研究にも梗概が掲げられてゐるから、詳しくはそれらについて見られたい。

古寫本

○黒川氏本 五卷

黒川眞道氏の所蔵本で、藤岡博士はこれを改寫本と考へたが、近時この本は以下に掲げる諸本と同一系統のもので、共に原作の殘缺本であると考へられるに至つた。「文學」昭和八年八月號にこの本の大野木氏の研究の紹介がある。

○前田侯爵家本三冊

○帝國圖書館本（横山由清寫）五冊

○竹柏園本五冊

○静嘉堂文庫本 五冊 ○東北帝大本 五冊

右五本のうち前田家本は「寢覺」と題し、他は「よほのねざめ」(東北帝大本は「夜のね覺」と題してゐる。前田家本は三冊中に他本の五冊分を含んでゐる。前田家本の外は皆巻の順序が亂れて居り、帝國圖書館本・竹柏園本・静嘉堂文庫本は五・四・一・二・三(但し帝國圖書館本は横山由清が各冊毎に朱を以て訂正)、東北帝大本は一・三・二・四・五の順序にそれ〴〵並べなほすべきである。書寫年代はいづれも江戸時代であるが、前田家本が最も古く、且つ誤寫も一ばん少ない。これらの諸本は皆前述の如く卷二と卷三との中間及び卷五以下に多くの缺脱があり、且つ卷四には數箇所錯簡、卷五には若干の脱文を持つてゐる。前田家本は最近尊經閣叢刊の複製が出た。

○中村氏本 五卷

中村秋香氏の所蔵した本で、鎌倉時代以後の改作と考へられ、説話の筋は大體原作のままらしいが、文章は全然異なり、全體に著しく縮小されてゐるので、一種の梗概書と目されるもの。内容上前記諸本の卷一・卷二はこの本の卷一に當り、卷三・卷四・卷五はこの本の卷五の過半に當る。従つてこの本の卷二・卷三・卷四は、前記諸本の中間の缺けた部分に當り、また卷五の終の部分、前記諸本の卷五以後の缺卷の一部に當るものである。但しこの本も原作全部の梗概書ではなく、原作中の續篇と見るべき部分は省略に附し、且これを省略する必要上、正篇と見るべき部分の末尾に改變を加へて、原作とは違つた終結を與へてあるらしい。

○寢覺物語繪卷 一卷 原富太郎氏藏 (大正八年玻璃版複製)

唯くも鎌倉時代最初期の製作にかかり、その繪詞は原作現存本卷五以後の缺卷の部分に當るものと思はれる。

版 本

○校本夜半の寢覺 一冊 橋本佳編 昭和八年

○よほのねざめ 一冊 藤田徳太郎・増淵恒吉編 昭和八年

従來「夜半の寢覺」は全く刊本を持たなかつたが、最近時を同じうして右二種の刊本が出た。前者は帝國圖書館本を底本とし、他の四本と校合して一々校異を掲げ、附録として「寢覺物語繪卷」の詞章及び横山由清著「窓の燈火」を添へ、終に編者のこの物語に關する解説を附してある。後者は限定版・普及版の二種があり、兩種共に本文の校異は主要なものに止め、頭註を附し、缺卷部の梗概を添へ、「寢覺物語繪卷」の詞章及び「窓の燈火」を附載してあるが、限定版には以上の外に編者兩氏のこの物語に關するそれぞれの研究と頭註補遺・無名草子の抜抄・和歌索引・年表・系圖などを加へてある。

研 究 書

○夜寢覺窓のともしび 一卷 横山由清 嘉永六年成

著者の手寫した「夜の寢覺」(帝國圖書館所藏)に添へてあるもので、内容はこの物語の年立・系圖及び在他書缺物語歌から成つてゐる。最近までこの物語に關する研究書はこれ以外に一つもなかつた。

○現存夜半の寢覺は果して改竄本なるか 橋本佳 (思想昭和六ノ四)

○菅原孝標女―その作品夜半の寢覺の形態について 松尾聰 (岩波講座「日本文學」)

○寢覺物語繪卷に就て 増淵恒吉 (岩波講座附録「文學」昭和七ノ八)

○夜半の寢覺について 橋本 佳 (校本夜半の寢覺附録)

○夜の寢覺物語の研究 増淵 恒吉 (よはのねさめ) 限定版附録)

○夜の寢覺物語について 藤田 徳太郎 (よはのねさめ) 限定版附録)

右の外参考すべきものに藤岡作太郎博士の「國文學全史平安朝篇」、松尾聰氏の「濱松中納言物語末巻略考」(國語と國文學昭和六ノ四)、池田龜鑑氏の「日本文學書目解説平安時代上」(岩波講座) などがある。

◎とりかへばや物語 四卷

或る權大納言に兄妹二人の子があつた。容貌や氣立が兄は女のやうであり、妹は男のやうであつたから、父の權大納言は「返す返すとりかへばや」と思ひ(それが題名の出所)、妹は男装させ、兄は女装させて育てた。成長して妹は大将になり、従妹に當る右大臣の四の君と結婚し、兄は宣耀殿の尙侍となつた。しかるに大将の友人で好色の聞え高い中納言は、四の君と通じ、且つ或夏の日輕装せる大将が實は女であることを發見してこれとも通じ、大将は遂に妊娠して姿を隠した。その後兄妹はほんたうの男女に立返つてこれまでの尙侍は大将になり、大将は尙侍となつた。そして兄の大将は四の君と名實共に夫婦になり、右大臣に榮進し、妹の尙侍は帝の寵を得て皇子を生み、中宮となつて、共にめでたく榮えた。

「とりかへばや」の名は「拾遺百番歌合」第八十四番・「色葉集」卷三・「明月記」貞永二年三月二十日の條など

梗概

成立

年代  
作者  
諸本

に見えて、平安時代の作であることは明らかであるが、「風葉集」には「とりかへばや」の歌十三首の外に「今とりかへばや」の歌として七首を擧げて居り、「無名草子」にも「とりかへばや」と「今とりかへばや」とを對照して論評してゐるので、鎌倉時代初期には二種の「とりかへばや」が並び行はれてゐたことが分る。この兩種の「とりかへばや」と現存のものとの關係については一二の異説がある。山岡俊明は現存本は「今とりかへばや」であるといひ、黒川春村は現存本の卷一のはじめの方はもとの「とりかへばや」で、そのあとは「今とりかへばや」であるが、「今とりかへばや」には、散佚して今は傳らない部分がある。一二卷あつたに相違ないといひ(古物語類字鈔)、岡本保孝は現存本はもとの「とりかへばや」でもなく「今とりかへばや」でもなく、「風葉集」以後に改作されたものではなからうかと疑つてゐる。今日の通説では大體に於て現存本は「今とりかへばや」であるとされてゐるが、「風葉集」に「今とりかへばや」の歌として載せてあるものの中三首は現存本に見えないので、それをどう考へていいかはまだ疑問として残つてゐる。

もとの「とりかへばや」と「今とりかへばや」との製作年代についてもまだたしかなことは分つてゐないが、「今とりかへばや」の方は平安時代の末期か鎌倉時代の最初期にもとの「とりかへばや」を改作して成つたものであらうと思はれる。

寫本

作者は原作も改作もまだ不明である。ただ男性の作であることは間違ないであらう。

現存諸本は四卷本が普通であるが、三卷本・五卷本・七卷本・十卷本などもある。但しいづれも本文には大差がない。

- 東京帝大國文研究室本 ○帝國圖書館本 ○内閣文庫本 ○宮内省圖書寮本
  - 靜嘉堂文庫本 ○無窮會神習文庫本 ○前田侯爵家本 ○京都帝大國文研究室本(三部)
  - 刈谷圖書館本(二部) ○京都帝大圖書館本(二部) ○東北帝大圖書館本
  - 廣島文理科大学圖書館本(以上四卷本)
  - 宮内省圖書寮本 ○靜嘉堂文庫本 ○八坂神社文庫本 ○池田龜鑑氏藏本(以上三卷本)
  - 刈谷圖書館本(五卷本) ○靜嘉堂文庫本(七卷本) ○彰考館本(十卷本)
- 右のうち宮内省圖書寮及び前田侯爵家の四卷本・靜嘉堂文庫の三卷本・彰考館の十卷本などが比較的善本であるといふ
- 版 本
- 日本文學全書(第四編) ○國文叢書(第十二卷) ○國文大觀(物語三) ○日本文學大系(第二卷)
- 研究書
- 取替ばや詞寄 一卷 高田 與 清 (群書索引目錄)
  - 新とりかへばや物語考證 五卷 岸本由豆流
  - 取替婆也物語攷 一卷 岡本 保 孝 (國文註釋全書・國文學註釋叢書)

參考書

- 取替婆也物語年立系譜 一卷 岡本 保 孝 (國文學註釋叢書)
  - 取りかへばや物語の怪奇性その他 田邊つかさ (鹿兒島日本文學昭和七ノ五)
- 口 譯 書

○全譯 王朝文學叢書(十二) 大正十五年

◎堤中納言物語 (つつみちゅうなごんものがたり) 十卷

短篇物語集で、十個の物語と、數行の斷章とから成つてゐる。鎌倉時代の作に、堤中納言を中心人物とする長篇の物語があり、普通「異本堤中納言物語」といはれてゐるが、それは本書とは全く別箇のものである(第三篇「きよころも」の條参照)。

書中の個々の作品名と、その各々の説話内容の要は、次のやうである(十個の物語の順序は本によつて一定しない。ここには流布本の順序に従ふ)。

一、「花櫻折る少將」

或少將が、思をかけた女の許に忍んでゆき、車に乗せて連れ歸つて見ると、思はぬ人違ひで、それは女の番をしてゐた伯母の尼法師であつたといふ話。豫想外の事件に本づく興味を狙つた作である。

二、「川のつや」

靜かな春の午後、中宮の御前で、宰相中將と女房達とが、世間話を始める。それは、本妻に隠れて、秘密

概 説

内 容



の戀をする男と女の話、寺に籠つてすゝり泣きしてゐた女の話、若い美しい女の剃髪するのを覗き見た話などである。中宮は香をたかせ、物によりかきながらそれを聞いてゐた。やがて主上がお渡りになつたので話がきれる。さういつた場面を書いたものである。

## 三、「蟲めづる姫君」

世間の人が花や蝶をめでのを嘲つて、いろ／＼の毛蟲を集めて飼ひ、召使の童達にも、けら雄・ひき鷹・いなご鷹・あま彦などと蟲の名をつけて呼び、好奇心から垣間見をする男があつても、氣にもかけないといふ風變りな姫君のことを書いたもの。

## 四、「ほどほどの懸想」

加茂の祭の頃を背景として、一方は、頭中將に召使はれる小舎人に、或若い男に、頭中將、一方は式部卿宮の遺れがたみの姫君に仕へる女の童に、女房に、當の姫君。この三組の、身のほどほどの戀を素描したものである。

## 五、「逢坂越えぬ權中納言」

風流才子の權中納言が、或姫に烈しい思慕を寄せて近よりながら、その思を遂げ得ないことを書いたもので、「逢坂越えぬ」とは、「後撰集」の「人しれぬ身は急げども年をへてなど越えがたき逢坂の關」(伊尹)などの用例があるやうに、男女の戀の成立せぬことをたとへた言葉である。なほこの物語の前半に、中宮のもとに於ける根合の遊びのことが書かれてゐる。

## 六、「かひあはせ」

藏人少將が、或家で可憐な少女たちの貝合をするさまを覗き見て、洲濱にのせた小箱にいろいろの美しい貝を入れたのを、こつそり持つて行つておく。少女たちはそれを見つけて、觀世音のおくりものだといつて喜ぶといふ話。

## 七、「思はぬかたにとまりする少將」

大納言の遺れがたみに二人の姫君があり、右大將の子の少將は、姉の方に思をかけて通ひ、右大臣の子の權少將は妹の方に渡りをつけてゐたが、或夜ふとした間違から、互に誤つて姉妹が反對の戀人に逢ふことを書いたもの。

## 八、「はなだの女御」

或男が、里に下つてゐる戀人の所へ忍んで行き、前裁に隠れて、家の中の様子を覗いて見ると、大勢の若い女どもが集つて、打解けたさまで話し合つてゐる。前裁の花弁をそれぞれ見馴れてゐる高貴の人々にたとへて、蓮の花は女院、龍膽は一品の宮、紫苑は皇后宮、桔梗は中宮、露草は四條の宮の女御といふ風に、一人一人品定して、やがてそれらの草花を一首づゝ歌に詠む。さうした様子を、男が物かけから見聞きするこゝとして書いたもの。

## 九、「はいすみ」

或男に愛されてゐた女が、男に新しい愛人の出來たことを知つて、あきらめて身を引かうと思ひ、一旦知

人の家へ立退いたが、男はその女の氣立のやさしさと、別れ際の美しかつたことに心を惹かれて、すぐ連れ戻して、前よりも深く愛するやうになる。その後男が、新しい愛人を不意に訪ねると、その女はあわてて、化粧をするのに、白粉と掃墨を間違へて、まつ黒な顔で男を迎へる。男は驚いて逃歸つてしまふ。女は鏡を見て、びつくりして泣出したが、涙の流れたあとから、もとの膚がさりげく出て来たといふ話。

十、「よしなしごと」

或僧が或女に忍んで語らひをしてゐたが、年の暮に山寺に籠るとて、女に身のまはりの必要品を無心したので、女は注文通りに調へて送つた。それを女の師の僧が聞いて、自分も入用のものを貰はうと思つて手紙を書いた。その文句が大へんおもしろいので、寫しておいたといふ書出して、その手紙が書いてある。それは、最初にいろいろ手に入りさうもない大袈裟なものを並べて、驚かせておいて、しまひに、實は、足のついた鍋一つに長い筵一枚、盥一つを調達願ひたいといふ甚だ些細な要求を持ち出した手紙である。

以上十篇のあとに、「冬ごもる空のけしきに云々」で始まる約二百字ばかりの断章が載つてゐるのであるがそれははじめからそれだけしかなかつたものか、または他の部分が散佚してそれだけ残つたものか不明であるが、何れにしても、以上十篇以外の物語の断片と見られるものである。

この物語の書名・作者・成立などについては、今日まだ不明な點が少くない。

「堤中納言物語」といふ書名の由来については、堤中納言藤原兼輔の作であるからとする説や、兼輔のことを書いたものだからとする説などもあるが、前者は時代錯誤であり、後者も根拠薄弱で従ふことが出来ない。

書名

(註)藤原兼輔延長四年權中納言になり、承平三年に歿した人で、邸が加茂川の堤の傍にあつたので、堤中納言といはれた。この物語には前記の如く根合のことが書いてあるが、根合は永承六年五月五日に始まるといはれ、兼輔歿後百二十年を経てゐるのである。

尾上八郎博士は、日本文學大系本の解題中に、「後選集」にある伊尹と小野好古女との贈答の歌に本づいて「逢坂越えぬ權中納言」は伊尹の異名であらうといひ、それが後に堤中納言と混同されて、堤中納言に關したことが書中にあるとの考から、この書名がつけられたのであらうと推測して居られるが、まだ一般には認められてゐない。

この物語の和歌も「風葉集」にとられてゐるが、それには「堤中納言物語」なる名稱を用ひず、個々の物語名を用ひてゐる。また多くの物語の名を擧げて評論してゐる「無名草子」にも、「堤中納言物語」なる名は見えない。この書名の文献に見えるのは江戸時代になつてからで、「堤中納言」の標題を持つ寫本も、書寫年代の判明してゐる限りでは、前田侯爵家所藏の天和三年書寫の本が最も古いと見られてゐる。これらの事實から推して、近頃では一般に、この書名は始めからあつたものではなく、後世につけられたものと考へられるに至つた。但しはじめ別の書名があつたのが失はれて、後に今の名につけかへられたのか、元來全體としての題名はなかつたのかも疑問である。

作者を堤中納言兼輔とする説の取るに足らないことは前に述べた通りであるが、他に作者を推定するに足る資料がまだ発見されない。本書がもしもとは全體としての書名を持たなかつたものとするれば、十篇の物語

作者  
年代

は元來別々に作られて、個々獨立してゐたものが、後になつて一纏めにされたものかも知れないといふ推測も可能になり、随つて作者や製作年代についても新しい問題が起つて来る。從來の説では作者を一人と見、全部同一の時代に成つたものと考へて來たのであり、近頃でも藤田徳太郎氏の「堤中納言物語研究」(日本文學講座)・清水泰氏の「堤中納言物語評釋」等はこの考をとつてゐるが、全部同一の手に成つたものでないかも知れないと考へる立場からすれば、製作年代も十篇の各々について別々に考へて見なければならぬわけである。久松潜一氏編「堤中納言物語」に附載された錦小路頼孝氏の研究などは、大體このやうな立場から本書の成立を考證したものであるが、まだ決定的な結果には到達してゐない。

本書はかく作者・成立などに關してなほ研究の餘地が残されてゐるのであるが、製作年代については大體平安時代の末頃とするのが、藤岡博士以來諸説の概ね一致するところであつた。しかし清水泰氏は「堤中納言物語評釋」において、「よしなしごと」の中にある「わが世や近くながめくらすも云々」の典據として、「續古今集」卷十九の正三位知家の歌「そむくべきわが世や近くなりぬらむ心にかゝる峯の白雲」をあげ、この歌の製作年代を推定して、嘉禎二年以後とし、なほ「蟲めづる姫君」の内容が「今鏡」中の藤原宗輔が蜂を飼養した記事にヒントを得たものであり、且つ「蟲めづる姫君」及び「よしなしごと」などの中の用語に鎌倉時代風のものがある點を傍證として、この物語全部を鎌倉時代の嘉禎二年以後「風葉集」の成つた文永八年までの三十五年間に作られたものとしてゐる。

諸本

寫本

明治以前には刊本がなく、寫本は可なり多く傳はつてゐる。十卷を一冊にしたもの、二冊にしたもの、十冊にしたもの等があるが、書寫年代の江戸時代以前に遡るものはまだ發見されない。今一般に流布してゐるのは、一冊本を底本として刊行されたものである。

## ○前田侯爵家本 一冊 天和三年書寫

飛鳥井家本を以て校合した旨の前田松雲公の奥書がある。書寫年代の明らかな現存諸本中最古のもの。

## ○同 一本 一冊

元祿頃の書寫で、中の物語の順序が流布本と違つて「はなだの女御」「花櫻折る少將」「貝合」「灰墨」「逢坂越えぬ權中納言」「蟲めづる姫君」「このついで」「ほどほどの懸想」「思はぬ方にとまりする少將」「よしなしごと」の順序になつてゐる。

## ○三手文庫本 一冊

流布本とも前田家本とも順序がちがつて「このついで」「花櫻折る少將」「よしなしごと」「蟲めづる姫君」「ほどほどの懸想」「灰墨」「はなだの女御」「貝合」「逢坂越えぬ權中納言」「思はぬ方にとまりする少將」の順序になつてゐる。

## ○宮内省圖書寮藏清水濱臣本 〇無窮會神習文庫藏清水濱臣本(圖書寮本の轉寫本)

## ○同文庫藏井上頼園舊藏本 〇帝國圖書館藏清水濱臣本(圖書寮本の轉寫本)

## ○神宮文庫藏林崎文庫舊藏本 〇同文庫藏天王寺明靜院本 〇京都帝大圖書館藏伴信友校本

## ○久原文庫藏阿波國文庫舊藏本 〇同大野廣城標註本 〇内閣文庫藏本

- 第三高等學校藏本
  - 東京帝大圖書館藏南英文庫舊藏本
  - 刈谷圖書館藏村上忠順舊藏本
  - 藤井乙男博士藏本
  - 松井簡治博士藏函崎文庫本
  - 同尙古文庫本
  - 同富士谷御杖本
  - 同大野廣城自筆本
  - 同横山由清校本
  - 同嘉永書寫本
  - 池田龜鑑氏藏本
  - 彰考館藏本(以上一冊本)
  - 石川縣立圖書館藏李花亭文庫本
  - 久原文庫藏萩原宗固自筆本
  - 刈谷圖書館藏村上文庫本
  - 靜嘉堂文庫藏本
  - 東京文理科大學圖書館藏本
  - 藤井乙男博士藏本
  - 東北帝大藏狩野文庫本(以上二冊本)
  - 京都帝大國文研究室藏本
  - 宮内省圖書寮藏飛鳥井本(二部)
  - 帝國圖書館藏本
  - 岩瀬文庫藏本(以上十冊本)
- 右の外、群馬縣師範學校・多和文庫・京都富岡氏・佐佐木信綱博士・熊本河島氏等にも藏本があるといふ。
- 活版本
- 日本文學全書(第四編)
  - 國文大觀(物語三)
  - 國文叢書(第十四卷)
  - 日本文學大系(第二卷)
  - 續群書類從(第十八輯上)
- 註釋書
- 校註堤中納言物語 一冊 久松潜一編 昭和三年

編者の頭註の外、刈谷圖書館の藏本に施してある村上忠順の註釋を全部收めてある。附録として久松氏の「堤中納言物語序説」、錦小路頼孝氏の「題號考及び成立考」、藤田徳太郎氏の「堤中納言物語諸本追加」を添へてある。

○堤中納言物語評釋 一冊 清水 泰 昭和四年

本文の校異を掲げ、通釋語釋を施し、一篇毎に評を加へてある。

この他なほ吉田九郎著「新註堤中納言物語」、立命館大學出版部「頭註完本堤中納言物語」などがある。

口譯書

○全譯王朝文學叢書(第一) 大正十四年

研究・評論

- 堤中納言物語鑑賞 木村庄三郎 (三田文學三ノ十)
- 堤中納言物語私考 清水 泰 (國語國文の研究昭和四ノ十一)
- 堤中納言物語難觀 玉井 幸助 (國語教育昭和四ノ十二)
- 堤中納言物語に就いて 小泉瓊玖夫 (國語國文昭和七ノ二・三)
- 堤中納言物語研究 藤田徳太郎 (日本文學講座)
- 堤中納言物語 藤田徳太郎 (岩波講座「日本文學」)

〔三〕 歴史物語

◎榮華物語 (えいぐわものがたり) 四十卷

宇多天皇より堀河天皇の寛治六年二月まで約二百年間の事蹟を、御堂關白藤原道長の榮華を中心として編年體に記した歴史物語である。但し宇多・醍醐・朱雀三代の記事は極めて簡略で、豫備的のものに過ぎず、また中間に長元二年・治暦三年・四年・延久元年の記事を缺いてゐる。全篇四十卷中卷三より卷三十まで二十八卷は道長の一生中の記事であり、卷三十一以下には道長の薨後約六十年間のことが記されてゐる。

各卷には「宇津保物語」「源氏物語」などに倣つたと思はれる卷名がついてゐる。その名稱と各卷中の記事の年代とは次の通りである。

- 1月の宴(宇多天皇寛平九年—圓融天皇天祿二年)
- 2花山(天祿三年—花山天皇寛和二年)
- 3さまさまの喜(同年—一條天皇正暦二年)
- 4見はてぬ夢(同年—長徳二年)
- 5浦々の別(同年—長徳四年)
- 6輝く藤壺(同年—長保二年)
- 7鳥邊野(同年—長保四年)
- 8初花(長保五年—寛弘七年)
- 9岩蔭(三條天皇寛弘八年)
- 10日蔭のかづら(同年—長和二年)
- 11つぼみ花(同年—長和三年)
- 12玉の村菊(同年—後一條天皇寛仁元年)
- 13木綿四手(同年—寛仁二年)
- 14淺緑(同年—寛仁三年)
- 15疑(同年)
- 16本の雫(同年—治安二年)
- 17音楽(同年)
- 18玉の臺(同年—治安三年)
- 19御裳着(同年)
- 20御賀(同年)
- 21後悔大將(同年—萬壽六年)
- 22鳥の舞(同年)
- 23駒くらべ(一名駒くらべの行幸。同年)
- 24若枝(萬壽二年)
- 25峯の月(一名望月。同年)
- 26楚王の夢(同年)
- 27次の

概説  
卷名

- 28若水(同年—萬壽四年)
- 29玉の飾(同年)
- 30鶴の林(同年—長元元年)
- 31殿上花見(後一條天皇長元三年—長元六年)
- 32歌合(同年—長元九年)
- 33着るは佗しと歎く女房(後朱雀天皇長元九年)
- 34晩待星(長暦元年—長久四年)
- 35蜘蛛の振舞(寛徳元年)
- 36根合(後冷泉天皇寛徳二年—天喜四年)
- 37烟の後(天喜五年—治暦二年)
- 38松の下枝(後三條天皇延久二年—白河天皇延久五年)
- 39布引の瀧(承保元年—永保三年)
- 40紫野(應徳元年—堀河天皇寛治六年)

従来右の卷名は最初からあつたものと考へられてゐたが、最近三條西公正氏は家蔵の古寫本に本づき、卷名は後人の附加したもので、原作にはなかつたのではないかとの新提案を出された(岩波講座「日本文學」中「榮華物語」)。

契沖は「百人一首改觀抄」追考に於て本書を卷三十までと卷三十一以下との前後二篇に分けて見るべきことを唱へ、伴信友らがこれに賛して以來、一般の通説となつてゐるが、三條西公正氏は前記の研究に於て、道長の榮華を中心とせる卷二十までと、道長の子孫に關することを記した卷二十一以下とを區別し、前者を正篇、後者を續篇と見るべきであるとの新説を唱へてゐる。

「榮華物語」の題名は、道長の榮華を描くことを主とし、「殿の御前の御初むまごにて榮花の初花と聞えたるに」「つぼみ花の巻」にこれを榮花といふにこそあれ(同)、「ただこの殿の御前の榮花のみこそ開け初めさせ給にしより」(梟の巻)など、書中に「榮花」の語の散見するに本づくと思はれるが、他に「世繼」「讃岐典侍日記」「袖中抄」「明月記」等、又は「世繼物語」(「袋草子」北畠親房「古今和歌集序註」)の別名があり、世繼とは御代御代

編次  
書名

の歴史物語の意味だと考へられて来た。但しこれについても、三條西公正氏は、家藏の古寫本に卷二十までを「榮華物語」、卷二十一以下を「世繼」と題してゐるのを本とし、世繼とは道長の世繼の人々即ち子孫のことを記す意味であると解して、元來「榮華物語」は卷一から卷二十まで、すなはち氏のいはゆる正篇の名であり、「世繼」は卷二十一以下の續篇の名であるといふ説を立てて居られる。但し該寫本は卷二十までと卷二十一以下とは筆寫年代が違ひ、同一寫本の二部分とは見られないから、まだ立論の根據が不十分のやうに思はれる。

作者については古來(一)藤原爲業とするもの(「本朝書目録」假名部・尊卑分限)と、(二)赤染衛門とするもの(「日本紀私抄」、三條西實隆「延徳御八講記」等)とがあつたが、製作年代の關係上、(一)(二)共に全篇の作者と見ることは不可能であると考へられ、今は一般に前三十卷と後十卷とを別人の手に成るものとされるに至つた。而して前三十卷の作者としてはやはり(一)藤原爲業説(伴信友「比古婆衣」卷十三)と(二)赤染衛門説とがある。(一)は年代が合はないものとして藤岡作太郎博士に否定されたが、(二)は契沖・大石千引(「榮華物語考釋註」)等の説を受けて、今もこれを支持する人が多い(和田英松博士「榮華物語研究」、奥野寛氏「日本古典全集」本解題、「日本文學大辭典」中の沼澤龍雄氏の解説等)。但しこの説にも確かな積極的根據は認められないので、これを拒否する人もあり(藤田徳太郎氏「平安朝物語選要」等)、なほ研究の餘地が残されてゐる。次に卷三十一以下の十卷については(一)出羽辨説・(二)爲業説・(三)作者一人に非ずとする説などがある。(一)は契沖・土肥經平(「榮華物語目錄年立」)等の説、(二)は大石千引の説、(三)は木下幸文・屋代弘賢・岡本保孝等の説

作者

年代

くところであるが、幸文は二人、弘賢・保孝は三人の手に成つたものとしてゐる。これらのうち出羽辨説は書中にその歌が多く出てゐるのに本づくもので、やゝ根據のある説であるが、和田博士はその年齢を推定して、寛治の頃は百歳以上になるから、全體の作者とすることは不可能であることを明らかにされた。もし第三説の如く後篇十卷が更に二人または三人の手に成つたものとすれば、その一部の作者として出羽辨を擬することは可能であるが、これを積極的に支持するには、なほ多くの考察を要する。

製作年代もまだ明確ではないが、前篇(三十卷)と後篇(十卷)とが時を異にして成つたとするのが通説である。和田博士は前篇の記事が後一條天皇の萬壽五年(長元元年)に終り、卷一「月の宴」に「世はしまりて後、この國のみかど六十餘代にならせ給ひ」とあり、卷十五「疑」のうち寛弘三年十月淨妙寺供養の條に「佛の御前にて、三昧の火をうたせ給ふ云々。この火一どに出でて、この二十餘年末だきえず」とあるに本づき、前篇は後一條天皇の長元二年より同六年までの五年の間に成つたと推定され、後篇については、その記事が堀河天皇の寛治六年に終り、「畫鼓典侍日記」嘉承二年十二月朔日、鳥羽天皇御即位の條に、本書卷三十三「着るは佗しと歎く女房」中の記事を引いたと思はれる箇所があるから、寛治六年以後嘉承二年まで十四五年の間に成つたものとされてゐる(藤岡博士もほぼ同説)。

物語の手法を歴史的事實の記述に應用したはじめのものとして、文學史上注意すべき位置を占めてゐる。但しその記述の對象は、京洛の間における宮廷並びに上流貴族のことに限られ、しかも刀伊入冠の如き國家的事件には觸れないで、諸種の儀式・遊宴・佛事などに關して記したところが多く、文章も概ね平板單調で

特性

諸本

ある。

古寫本

平安時代末には證本と偽本(普通本)の二種があつたらしく(顯昭「柿本人麿勸文」)、前者は湮滅して、今傳はつてゐるのは後者であらうといふ。

○三條西家本 十七冊

前半十冊(二十卷)は「榮華物語」と題する大本で、平安時代末期の書寫、後半七冊(残り二十卷)は「世繼」と題する小本で、鎌倉時代中期の書寫であらうといふ。「實隆公記」によれば永正六年十一月に實隆の手に入つたもので現存完本中最古の寫本である。前記の如く三條西公正氏はこの本に據つて、「榮華物語」の題名・組織・卷名に關する新説を提出された。

○爲親本

二條爲親(爲世の孫)の自筆本といはれ、三條西家本と別系統の善本で、屋代弘賢・新見正路等がこれを校合に用ひてゐるが、原本は今所在不明である。

○宮内省圖書寮藏桂宮舊藏本 四十冊 ○内閣文庫藏本 二十冊 ○靜嘉堂文庫藏本 四十冊

○同繪入本 四十冊 ○神宮文庫藏本 (三部)

校合本

○屋代弘賢校本 十冊 (帝國圖書館藏) ○柳原芳野校本 (古活字本書入。帝國圖書館藏)

○小杉楳邨校本 (古活字本書入。帝國圖書館藏) ○新見正路等校本 (古活字本書入。宮内省圖書寮藏)

なほ他に、村上眞澄・伴信友・高田與清・藤原資重・伴直方・久米幹文・大澤清臣・小中村清矩等諸家の校本がある。

古版本

○古活字本 二十冊 ○明暦二年本 二十一冊 (内一冊目錄系圖)

○繪入抜抄本 九冊(内一冊目錄系圖)

活版本

○史籍集覽 (通記類) ○國史大系 (第十五卷) ○日本文學全書 (第十三―第十五編)

○國文叢書 (第十卷) ○日本文學大系 (第十一卷) ○日本古典全集 (第一期)

註釋書・研究書

○榮華物語抄 著者未詳 (井上頼閑家藏)

卷十までの略註で、室町時代後花園天皇の頃に成り、現存註釋書中最古のものである。

○榮華物語考 一卷 安藤 爲 章 (國文註釋全書・國文學註釋叢書)

○榮華物語目錄年立 二卷 土肥 經 平 (同上)

○榮華物語事蹟考 三卷 野村 尙 房 (同上)

○榮華物語抄 九卷 岡本 保 孝 (同上。自筆本黒川眞頼家藏)

第二篇 平安時代 (物語)

参考書

○同 附録

岡本保孝

(同上。自筆本静嘉堂文庫蔵)

○榮華物語系圖

一卷

檜山成徳

(國文内註釋叢書)

○榮華物語抄

六冊

池邊義象・關根正直

明治二十三年

○榮華物語略註

池邊眞棹

明治二十四年

○榮華物語詳解

十七冊

和田英松・佐藤球

明治三十二年—同三十九年

註釋十四冊、首卷三冊より成り、首卷には解題及び諸家の考説・年表・系圖・人名索引・語句索引を掲げてある。本文は諸本を對校して、異同を欄外に記し、註釋は古來の諸註を集めて取捨補正してある。

○新譯榮華物語

四冊

與謝野晶子

○榮華物語研究

和田英松

(日本文學講座)

○榮華物語——題名及び卷名に關する提案——

三條西公正

(岩波講座「日本文學」)

右の外參考すべきものに、契沖「百人一首改觀抄」追考、大石千引「榮華物語考雜註」(文化七年成)、伴信友「比古婆衣」卷十三、伊勢貞丈「世繼物語考」(安齋隨筆)、林諸島「榮華物語愚見」、橋守郁「榮華物語總論」、土肥經平「春添浪話」、湯淺元貞「常山棟筆餘」、伴蒿蹊「關田次筆」、木下幸文「亮々草紙」、前田夏隆「童放辨證偽」、藤岡作太郎「國文學全史平安朝篇」等がある。

◎大

鏡(おほかがみ)

三卷(古本)

八卷(流布本)

文徳天皇の御代から藤原道長の勢威がその絶頂に達した後一條天皇の萬壽二年まで、十四代百六十七年間の事蹟を、特殊の仕組のもとに記した歴史物語である。その仕組は、はじめに雲林院の菩提講に當り、大宅世繼といふ老翁が、夏山茂樹といふ舊友に會つて、古今の見聞を語り合ひ、青侍がその話に加はることを書き、著者はその會話を傍聴して筆記した體裁にしたもので、内容は帝紀と列傳とに分れ、帝紀には文徳天皇以下後一條天皇までの御略傳を、列傳には左大臣冬嗣以下太政大臣道長まで藤原氏の攝關大臣二十人の傳記言行を述べ、最後に拾遺として、和歌・藝道・神佛等に關する雜話を添へてある。全篇の中心をなすものは「榮華物語」と同様に道長の權勢榮達の記事で、道長以前の帝紀列傳はそのための準備と見るべきものである。それは作者が世繼をして次のやうにいはせてゐることからも分る。

まめやかに世繼が申さむと思ふことはことごとくは。只今の入道殿下の御ありさまの世に勝れておはしますことを道俗男女の御前にて申さむと思ふが、いと事多くなりて、あまたのみかど・后また大臣・公卿の御上をつづくべきなり。その中にさいはひ人におはしますこの御有縁申さむと思ふほどに、世の中のかくれなくあらはるべきなり。つてにうけたまはれば、法華經一部を説き奉らむとこそ、まづ餘經をば説き給ひけれ。それを名づけて五時教とはいふにこそはあなれ。しかの如くに、入道殿の御榮を申さむと思ふほどに、餘經の説かるといひつべし。

すなはち道長の事蹟を法華經に、他を餘經に擬してゐるのである。しかし「榮華物語」のやうに道長の榮華を單に讚嘆するに止まつてゐるのではなく、その裏面の事實をも擧げて批判を下してゐる。三人の話者のうち、世繼は専ら事の表面を語り、茂樹はその裏面を説き、青侍は忌憚なく暴露の言葉を放つのである。



本書古本は三卷（各卷を二冊づつに分けた六巻本もある）、流布本は八巻であるが、三巻本は原作に近く八巻本には後人の補筆が加はつて居る。各巻の内容は次の通りである。（括弧内は三巻本の區別）

（上巻） 卷一 御歴代 卷二 冬嗣―時平 卷三 仲平―師尹  
 （中巻） 卷四 師輔 卷五 伊尹―兼家 卷六 道隆・道兼  
 （下巻） 卷七 道長 卷八 雑話

本書が前述の如く三人の假設人物の對話形式によつて叙述を進めてゐるのは、佛教の經典に見られる問答形式に倣つたものらしく、また帝紀と列傳とに分けたのは、「史記」を模したものである。

「大鏡」の名稱については「無名抄」下、假名書事の條に、「日記は大鏡の言ざまをならふ」とあり、「水鏡」の卷末にも「世あがり、才賢かりし人の大鏡などいひて書きおきたりける」と見えるが、この名稱ははじめからあつたものかどうか明らかでない。書中「鏡」といふ名に關係のあるのは、後一條天皇の條に「明らかき鏡にあへば過ぎにしも今行末の事も見えけり」すべらぎのあともつぎつき隠れなくあらたに見ゆるふる鏡かも」といふ茂樹と世繼との應答の歌があり、更に世繼をして、「今様の葵・八花形の鏡、螺鈿の箱に入れたるに向ひたる心地し給ふや。いでそれはさきらめけど、曇り易くぞあるや。如何にいにしへの古代の鏡はかね白くて人手觸れねどかくぞ明かき」と自讃せしめてゐる。これらによつて見れば、むしろ「古鏡」とでも名づくべきで、本書の後を襲うた「今鏡」の名稱に對しても、その方がふさはしいのであるが、「古鏡」の名は文献に所見がない。「袋草子」卷三には、本書藤原師輔の條にある師輔が父貞信公忠平から魚袋をもらひ、貫之の

許に行つて歌を召した記事を引いて「世繼物語」には彼家に行き向て被仰たりとそ侍」とあり、「愚管抄」卷三には、忠平の子供について「この貞信公の御子に小野宮・九條殿とておはすめり。この事どもは世繼のかみ・かみの卷にこま／＼と書きたれば申に及ばねども、つち／＼に合ふ所をば申すべきにや」とある。（伴信友が「比古妻衣」卷十三「榮華物語」の項で、「世繼のかみの卷」を「世繼のかみの卷」と訂正し、「榮華物語」上巻の意味だとしたのは誤である。）これによつて見れば、平安時代末には「世繼物語」「世繼の鏡の卷」などの名稱が用ひられてゐたことが分る。そしてこの場合の「世繼」は大宅世繼を指したものである。「徒然草」第六段に「末のおくれ給へるはわろき事なりとぞ、世繼の翁の物語にはいへる」とあるのも、その證左と見られる（但し「徒然草」の著者は「今鏡」の記事を本書のと思ひちがへたのである）。また「無名草子」の卷末には「世繼大鏡などを御覽せよかし」、顯明の「散木集註」にも「世繼大鏡云……」とあり、共に本書を「世繼大鏡」と稱してゐる。

このやうに、平安時代末から鎌倉時代にかけて、「大鏡」「世繼物語」「世繼の翁の物語」「世繼の鏡の卷」「世繼大鏡」などの名稱が並び行はれてゐたのであるが、今は一般に「大鏡」とのみ呼ばれてゐる。

本書の作者については古來諸説がある。（一）藤原爲業説。「尊卑分脈」に「爲業法名寂然世繼作者」とあるのがもとで、「大日本史」爲業傳・「群書一覽」「圖書解題」等もこれに従つてゐるが、「尊卑分脈」にはゆる「世繼」は「本朝書籍目錄」假名部に「世繼四十卷 自三宇多天皇至三朝川院御宇」とあるのと同様「榮華物語」を指したもので、「大鏡」の作者を爲業とするのは明らかに誤である。（二）源道方説。井上通泰博士の「南天莊雜

筆」に見えるもので、書中の記事により作者は皇太后姁子(瀛子内親王の母后)に關係深い人であらうとの考から想定した説である。(二)源經信説。關根正直博士の「大鏡新註」に見えるもので、道方説は年代が合はなから、むしろその子の經信を作者とすべきであらうといふ説である。(四)藤原能信説。鎌倉時代末に書かれたと思はれる「日本紀私抄」の末に「(摩訶略)河大圓鏡百文德至後一條十五帝、自冬嗣公至道長とあるのを手がかりにして立てた説で、西岡虎之助氏の「大鏡の著作年代とその著者」(史學雜誌昭和二年七月號)は、多くの理由をあげて強くこれを主張してゐる。(五)源俊明説。山岸徳平氏の「大鏡概説」(岩波講座「日本文學」)において立てた新説である。

作者の問題は著作年代の問題と密接に繋がつてゐるのであるが、著作年代についても、諸説區々としてまだ定説と見るべきものが現はれない。今これを大別すれば、(一)萬壽二年説と、(二)非萬壽二年説との二つとなり、(二)は更に數説に分れる。

萬壽二年説は「大鏡」の記事をそのままに認容したものである。すなはち書中序の部分に文徳天皇御即位の嘉祥三年より「今年迄は一百七十六年ばかりにやなりぬらん」とあり、後一條天皇の條には「位に即かせ給ひて十年にやならせ給ふらむ。今年は萬壽二年乙丑の歳とこそ申すめれ」と記し、天皇を當帝といひ、後朱雀天皇を今の東宮といひ、道長を只今の入道殿下、頼通を今の關白といつてゐるやうに、すべて人物の官位なども萬壽二年の頃を現在として記してあるから、それを事實と見れば當然萬壽二年に成つたものとしなければならぬのである。しかし多くの學者はこれに疑ひを挟み、萬壽二年作に擬したのは假託の方便であ

年代

特性

前本

るとして、非萬壽二年説を取つてゐる。而して藤岡博士の「國文學全史平安朝篇」に引く所によれば、萩野山之博士は白河天皇以後とし、藤岡博士は鳥羽天皇の頃とし、芳賀博士の「歴史物語」は十一世紀末としてゐるが、西岡氏は前記の論文中にそれらの説の論據を一々退けて、萬壽二年説の正しいことを主張した。然るに山岸氏の「大鏡概説」は書中に萬壽二年以後の官職が存することを例示して、更に西岡氏の所説を反駁し、從來の非萬壽二年説の論據の上に、なほ「大鏡」には「江談抄」に據つて書かれた記事があることを附加して、本書は鳥羽天皇の末年、永久・元永の頃から、崇徳天皇の天治頃までの間に成つたものであらうと想定された。氏の源俊明著作説はこの想定に基づいて立てられたものである。

本書は、「榮華物語」に於けるが如く宮廷の行事等の羅列を主とせず、史實に批判を施し、人物の逸事言行を記してその性格を躍動せしめてゐる。その敘述も「榮華物語」の平板單調なのに比して、曲折變化に富み、文章も和文を骨子として、ままた漢語・佛語等を交へ、優雅と簡勁とを兼ねてゐる。

古寫本

三卷本・六卷本・八卷本の三種がある。三卷本は古本と稱し、原形に近いものと思はれるが、これにも裏書分註のある本と裏書を持たない本とがあり、本文にも多少の相違がある。八卷本はいはゆる流布本系統のもので、後人の加筆があり、前者に比して記事詳細、しかも事實の重複または齟齬があつて、全體の統一を缺いてゐる。六卷本は三卷本の各巻を二冊づつに分けたものである。關根正直博士藏本は現存唯一の六卷本の完本であつたが、大正十二年の震災に焼失したといふ。

- 尾州徳川家藏本 三卷 應永年間寫 (岩波文庫)  
裏書分註本で、現存完本中最古のものである。
- 宮内省圖書寮藏桂宮本 三卷 ○京都帝大圖書館寄託近衛家本 三卷
- 帝室博物館藏本 三卷 ○刈谷圖書館藏本 三卷 (以上裏書分註本)
- 千葉胤明氏藏本 零本一帖 鎌倉時代末期寫 (古典保存會複製)  
三卷本の上巻の後半(冬嗣―師尹)と中巻の後半(兼家―道兼)とを合綴したもので、もと六巻に分れてゐたものであらう。本文は裏書分註を持たない古本の系統のものである。
- 宮内省圖書寮藏本 三卷 ○近衛家藏本 三卷 (以上無裏書本)
- 高松宮家御藏大鏡繪卷 十六卷 (江戸時代書畫。本文流布本系統)  
古版本
- 木活字本 八卷 ○整版本 八卷
- 久米博士校訂本 四冊 明治二十四年  
活版本
- 史籍集覽 (通記類) ○國史大系 (第十七卷) ○國文大觀 (歴史一)
- 日本文學全書 (第二十三編) ○國文叢書 (第九卷) ○新釋日本文學叢書 (第七卷)

- 日本文學大系 (第十二卷) ○國民文庫 (第十) ○有朋堂文庫 (第一輯)
- 岩波文庫  
これらの叢書收載本は、岩波文庫本が尾州徳川家本を底本とせる外、概ね流布本を底本とし、他本を以て校訂したものである。
- 校訂大鏡 一冊 萩野由之・松井簡治校訂  
流布本を三巻本によつて校訂し、三巻本にない部分は輪廓を施して區別してある。
- 註釋書
- 大鏡裏書 一卷 著者未詳  
古本に分註せられた裏書は「大鏡」の著作後間もなく出来たものらしく、後にこれを本文から切離して纏めたものが「大鏡裏書」であるが、異本もあり、「大鏡陰書」と名づけたものもある。これらは群書類從(第四百四十九)・國文註釋全書(第七)・國史大系(第十七卷)・改訂史籍集覽(第三十二)などに収めてあり、各異同がある。
- 大鏡短觀抄 五卷(六冊) 大石千引 文化七年成 (國文註釋全書・國文學註釋叢書)
- 大鏡攷 二卷 岡本保孝
- 大鏡詳解 和四冊・洋一冊 落合直文・小中村義象 明治三十年―同三十四年
- 大鏡註釋 一冊 鈴木弘恭 明治三十一年

- 口譯大鏡 一冊 芳賀矢一 大正五年
- 大鏡新註 一冊 關根正直 大正十五年
- 大鏡詳解 一冊 佐藤球 昭和二年
- 大鏡活釋 一冊 小林榮子

研究・評論

- 大鏡目錄系圖 一卷 土肥經平 (國文註釋全書・國文學註釋叢書)
- 大鏡系譜 一卷 岡本保孝 (自筆本靜嘉堂文庫藏)
- 大鏡に關する考察 藤村作 (國語と國文學一ノ一・二)
- 大鏡の著作年代とその著者 西岡虎之助 (史學雜誌三十八ノ七)
- 大鏡の人物裏面觀 平林治徳 (國語と國文學七ノ十)
- 大鏡研究 五十嵐力 (日本文學講座)
- 大鏡鑑賞 小島政二郎 (日本文學講座)
- 大鏡概説 山岸徳平 (岩波講座「日本文學」)
- 同續稿 (今昔物語集概説「附載」) 山岸徳平 (同上)

以上の外参考すべきものに、「打開集」書中に大鏡の引用がある、伴信友「比古婆衣」卷六、井上通泰「南天莊雜筆」

芳賀矢一「歴史物語」、沼澤龍雄「歴史物語の本質」、國語と國文學昭和二ノ四、島津久基「大鏡と道長時代」(日本文學聯講第一期)、阪口文章「大鏡について」(月刊日本文學昭和六ノ九)、三浦圭三「大鏡私考」(歴史と國文學昭和七ノ二)などがある。

◎今 鏡(いまかがみ) 十卷 嘉應二年成

概説

大鏡の後を繼いだ歴史物語で、後一條天皇の萬壽二年から高倉天皇の嘉應二年まで百四十六年間の事蹟を記したものである。「大鏡」に做つてははじめに序があり、嘉應二年の春著者が同志數人と初瀬詣をしたついでに、大和のとある木蔭で、世繼の翁の孫に當る百五十歳餘の老女から聞いた話を筆記したといふ趣向を設け、本文は帝紀・列傳・雜話の三部に分れ、帝紀は「すべらき」と題して上・中・下に分ち、列傳は藤原氏の事蹟を記した「藤なみ」上・中・下と、村上源氏の人々のことを記した「村上源氏」と、三條天皇の第一皇子小一條院の御子源基平の子孫や白河・堀河・鳥羽・崇徳・後白河・二條各院の御子達のことを記した「御子達」とより成り、雜話は「昔語」「打開」と題して、古代の詩歌・物語に關することなどを記し、この部分は歌物語または説話集に類した體裁を持つてゐる。而してこれらの項目は更に七十九の章段に小分され、各章段には「榮華物語」などに做つて、次のやうな名稱が與へられてゐる(括弧内は卷名と御歴代並に人物)。

- (卷一) すべらきの上 後一條・後朱雀・上東門院・後冷泉・後三條) 1 雲井 2 子の日 3 初春 4 星合
- 5 望月 6 菊の宴 7 黄金の御法 8 司召

- (卷一) すべらぎの中 後三條・白河・堀河・堀河母后・鳥羽・崇徳) 9 手向 10 御法の師 11 紅葉の御狩
- 12 釣せぬ浦々 13 玉章 14 所々の御寺 15 白河の花の宴 16 鳥羽の御賀 17 春の調 18 八重の汐路
- (卷三) すべらぎの下 近衛・後白河・二條・六條・高倉) 19 男山 20 蟲の音 21 大内渡 22 内宴 23 少女の姿
- 24 鄙の別 25 花園の匂 26 二葉の松
- (卷四) 藤なみの上 頼通・教通・師實・師通・忠實等) 27 藤波 28 梅の匂 29 伏見の雪の且 30 雲の返し
- 31 白川のわたり 32 蓮の露 33 小野の御幸 34 薄花櫻 35 波の上の盃 36 宇治の川瀬
- (卷五) 藤なみの中 忠通・頼長・雅教・公房・家忠等) 37 三笠の松 38 菊の露 39 藤の初花 40 濱千鳥
- 41 使合せ 42 飾太刀 43 苔の衣 44 花の山 45 水草 46 古里の花の色
- (卷六) 藤なみの下 頼宗・宗忠・宗通・伊通・成通・能信・公實・實行・實能・公能・實定等) 47 繪合の歌
- 48 唐人の遊 49 旅寝の床 50 弓の音 51 雁が音 52 眞澄の影 53 竹のよ 54 梅の木の下 55 花散る庭の面
- 56 宮城野 57 志賀の陂
- (卷七) 村上の源氏 師房・俊房・師頼・雅實・雅定・雅俊等) 58 轉寝 59 堀川の流 60 夢の通路 61 根合
- 62 有柄川 63 紫のゆかり 64 新枕 65 武藏野の草 66 藻鹽の烟
- (卷八) 御子達) 67 源氏の御息所 68 花の主 69 伏柴 70 月の隠るる山の端 71 腹々の御子
- (卷九) 昔語) 72 葦田鶴(一名・薄墨) 73 祈るしるし 74 唐歌 75 まことの道 76 賢き道々
- (卷十) 打聞) 77 敷島の打聞 78 奈良の御代 79 作り物語の行方

文章も「大鏡」よりはむしろ「榮華物語」に近似してゐる。

序にあたる部分に「いにしへをかどみ、今をかどみるなどいふ事にてあるに、いにしへもあまりなり、今鏡とやいはまし」とあるのが、書名の出所である。なほその次に「まだをさくしげなる程よりも、年も積らす見めもさやかなるに、小鏡とやつけまし」とあつて、「小鏡」といふ名稱も準備されたのであるが、實際には用ひられなかつたやうである。別に「續世繼」の名があり、また「新世繼」ともいはれた。これらは「世繼物語(大鏡)を受けての名稱である。

序の部分に「ことしは嘉應二年庚寅なれば」とあり、その年に成つたことを示してゐるが、黒川春村の「碩鼠漫筆」關根正直博士の「今鏡證註」に説いてゐるやうに、起稿したのはその前年であらう。

著者は明らかでない。黒川春村は中山忠親(水鏡の著者)であらうといひ、屋代弘實は源通親とした(弘賢校増鏡序傍註)。これに對して關根博士は本書が「水鏡」と文體がちがふ上に、「花の山」の章には忠親をほめた詞さへあるから、忠親著作説は不可であるとし、通親説を當れるに近いといつてゐる。なほ尾上八郎博士が、日本文學大系本の解題に説かれたやうに「水鏡」には「今鏡」には見られない佛説の混入などがあり、作の態度、思想の上に著しい相違があつて、兩書の著者を同一人とは認めがたいから、忠親説は明らかに誤であらうが、通親説もまだ確實な積極的根據は具はつてゐない。

なほ本書の後を受けて、高倉・安徳・後鳥羽の御代のことを記した「彌世繼」(二卷)があり、「本朝書籍目錄」に名が見えるから、室町時代までは存在したらしいが、今は傳はらない。

書名

年代

著者

彌世繼

諸本

古寫本

今鏡

二七〇

○毛利子爵家舊藏本

○前田侯爵家藏本

○小杉楳邨氏藏小山田與清校本

○中村秋香氏藏本

○關根正直氏藏里村昌純書寫本

○松本愛重氏藏本 (四卷以下缺)

○松井簡治氏藏本 (六卷以下缺)

古版本

○慶安三年本 ○天保十三年本

活版本

○校訂鏡 一冊

關根正直校訂 明治二十九年

○史籍集覽(通記類)

○國史大系(第十七卷)

○國文大觀(歴史一) ○國民文庫(第十)

○國文叢書(第九卷)

○新釋日本文學叢書(第七卷)

○日本文學大系(第十二卷)

參考書

註釋書・研究書

○今鏡證註 二冊

關根正直 明治三十年

○今鏡新註 一冊

關根正直 昭和二年

大正十二年の震災後に前者を増訂して頭註とし、本文を加へたものである。

○續世繼問答(寫本) 伊勢貞丈

概説

○續世繼一名今鏡 (比古婆衣卷六) 伴信友 (伴信友全集)

○今鏡追考 (碩鼠漫筆) 黒川春村

◎水鏡(みづかがみ) 三卷 中山忠親

神武天皇から仁明天皇嘉祥三年まで五十四代の事蹟を記した歴史物語で、「大鏡」に倣つて、その前を補つたもの。帝紀のみで臣下の列傳はなく、神武より欽明までを上巻、敏達より孝謙までを中巻、淳仁より仁明までを下巻としてゐる。はじめに「大鏡」類似の序があり、作者自らを七十三歳の老尼に擬し、龍蓋寺より初瀬寺へ詣でて通夜をした時に、三十四五歳の修業者が、一昨年の九月葛城で仙人に會つて聞いた話だといつて語り聞かせたのを、書きとどめた體にしてある。文章は概ね平易暢達、多分に佛教思想を含んでゐるのを特色とする。

本書を「大鏡」「増鏡」と併せて三鏡といひ、更に「今鏡」を加へて四鏡とも呼ばれてゐる。

卷末に「これももし大鏡に思ひよそへば、その形正しく見えずとも、などか水鏡のほどは侍らざらんとてなん」とあり、書名の出所はこれで明らかである。

「本朝書籍目録」假名部に「水鏡三卷 中山内府抄」とあり、また「薩戒記」應永三年十一月十六日の條に、「下賜宸筆水鏡一帖於予。此抄中山内大臣殿御作也。正本紛失、而今賜此御本、頗家寶也、可秘々々」とあるのによつて、<sup>(註)</sup>中山忠親が本書の著者と見られてゐる。「薩戒記」は中山定親の日記で、定親は忠親の九代の孫で

著者

書名

年代  
諸本

ある。忠親著作説は有力な反證のあがらない限り従ふべきであらう。

(註) 中山忠親 藤原(花山院)忠宗の次子。中山家の祖。建久二年より同五年まで内大臣。建久六年三月十二日没年六十五。日記「山槐記」の著がある。

著作年代は明らかでない。もし忠親晩年の作とすれば、鎌倉時代初期に成つたものであるが、今は便宜上ここに入れておく。

本書には異本が多く、記事の繁簡一様でない。それらの書誌的研究は今後に俟つところが多い。

古寫本

○近衛公爵家藏本 ○前田侯爵家藏本 ○松井簡治氏藏本烏丸光廣書寫本

○帝國圖書館本 (中巻のみ) ○内閣文庫本 ○神宮文庫本 ○靜嘉堂文庫本

古版本

○木活字本 ○整版本

活版本

○校水鏡 (校訂四鏡の内) 萩野由之・松井簡治・關根正直共編 明治三十年

○日本文學全書 (第十九編) ○國文叢書 (第九卷) ○國文大觀 (歴史二)

○國民文庫 (第十) ○有朋堂文庫 (第一輯) ○新釋日本文學叢書 (第七卷)

○日本文學大系 (第十二卷) ○史籍集覽 (通記類) ○國史大系 (第十七卷)

参考書

註釋・研究書

○水鏡短觀抄 六卷 大石千引 (寫本)

○水鏡詳解 一冊 江見清風 明治三十六年

○水鏡考 (比古婆衣卷八) 伴信友 (伴信友全集)

○水鏡と扶桑略記、水鏡の價值を論ず 喜田貞吉 (史學雜誌十四ノ二)

○水鏡の書名卷數著者について 西岡虎之助 (歴史地理四十五ノ三)

〔四〕傳説物語

◎三寶繪詞 (さんばうゑことば) 三卷 源為憲 永觀二年成

概説

一種の佛教説話集で、源為憲が冷泉院の二の宮尊子内親王の若くして出家入道された時、その御修業の心をほげまし慰めるために、繪を人にかかせ、自ら文を加へて奉つたものであるといふ。物語といふ名稱はな

いが、便宜上ここに加へる。

初に總序があり、三寶即ち佛・法・僧の尊むべき所以などを説き、各巻首に小序、巻尾に讚が添へてある。上巻は「昔の佛の行ひ給へる事」として、六度集經・智度論・大論・報恩經・最勝王經・涅槃經・太子須臾那經等を典據として、釋尊の生前に關する説話を記し、中巻は「中ごろ法のまゝにひろまる事」として、「日本靈

年代

諸本

異記」その他に據り、聖德太子以下十八人の僧俗の事蹟、主として佛教の功德談惡報談を記し、下巻は佛教關係の年中行事即ち各種の法會のことを記し、その由來に關して幾多の佛教傳説が語られてゐる。總序の終に「永觀二年仲冬」と書かれてゐるので、圓融天皇の永觀二年冬に成つたことが明らかである。「日本靈異記」を受けて「今昔物語」を起す橋渡しとなつたものとして注意すべきものである。

(註) 源爲憲 忠幹の子。遠江守・美濃守・加賀守。源順に就いて學び、「本朝詞林」の著があり、「拾遺集」に歌がある。寛弘八年歿。

古寫本

○東寺觀智院藏本 三卷 (國寶)

下巻の奥に「文永十年八月八日(彼岸中日)未刻書寫了」とあり、中・下二巻は當時の書寫で、上巻はもつと書寫年代が古いらしい。上巻の尾に缺脱がある。

○關戶氏藏本 一卷 保安元年寫

○前田家藏本 三卷 正徳五年寫

版本

○大日本佛教全書 (傳記叢書)

研究書

○三寶繪詞の研究 安西覺承 (國文學踏査第一輯)

参考書

概説

### ◎今昔物語集 (こんじやくものがたりしよ) 三十一卷

「日本靈異記」「三寶繪詞」などの系統をひく説話集で、天竺・震旦・本朝の三部に分れ、現存本は三十一卷から成つてゐるが、卷八、卷十八、卷二十一の三卷は缺けてゐる。天竺部は卷一より卷五まで、震旦部は卷六より卷十まで、本朝部は卷十一より卷三十一までで、それら各部の説話は更に或程度に分類して集められてゐる。その大體を示せば次のやうである。

卷一——卷三 佛陀に關する傳説、卷四 佛陀入滅後の傳説、卷五 佛陀の前生説話 (以上天竺部)

卷六、卷七 佛教説話、卷八(缺)、卷九 孝養説話、卷十 歴史傳説 (以上震旦部)

卷十一——卷二十 佛教説話(高僧の傳法弘法・名刹緣起・佛會由來・持經者の靈驗・訪法者の冥罰・往生・諸佛の靈驗・出家入道・天狗魔道等に關するものをそれ／＼類集す)、卷二十一(缺)、卷二十二 藤原氏傳説、

卷二十三 武勇強力譚、卷二十四 藝術説話、卷二十五 兵戰説話、卷二十六 宿報説話その他、卷二十七 靈鬼談、卷二十八 滑稽奇談、卷二十九 盜賊談、卷三十 戀愛談など、卷三十一 雜 (以上本朝部)

現存する説話の数は天竺部百七十一、震旦部百四十二、本朝部六百九十八、通計一千一十一話で、これを更に佛教關係の説話と然らざるものとに分ければ、前者は六百二十八話、後者は三百八十三話である。

原本の卷数は三十卷で、卷次も現存本と多少違つてゐたらしく、これを原形に復する試みが、佐藤誠實博士・芳賀矢一博士・坂井衡平氏らによつてなされてゐるが、まだ決定的な結果は得られない。



各説話が「今は昔」の語を以て始まるので、「今昔物語」または「今昔物語集」と呼ばれるのであるが、別に「宇治大納言」（和歌色葉集）「宇治大納言物語」（宇治拾遺物語序）「宇治縣相之巧語」（古今著聞集序）などともいはれた（これについては異説もある）。但し續群書類從物語部所収の「宇治大納言物語」は、鎌倉時代の小説物語「昔の衣」の卷三に誤り名づけられたもので、本書とは全く無関係のものである。なほ佐藤誠實博士は、「本朝書籍目録」假名部に「宇治拾遺物語二十卷 源隆國作」とあるのも、本書を指すものであるとせられた。

著者は源隆國と傳へられてゐる。隆國は大納言俊賢の第二子で、寛弘元年に生れ、藏人頭・參議・皇后宮大夫等を経て、治暦三年權大納言になつた人で、白河天皇の承保四年（承暦元年）七月九日、七十四歳で薨じた。「古事談」に彼の機智に富んでゐたことを語る逸話が見える。流布本「宇治拾遺物語」序（著者以外の人の書入）の傳へるところによれば、彼は晩年夏季には暑を避けて、宇治平等院一切經藏の南の山際にあつた南泉房に籠つてゐたので、宇治大納言といはれたといふが、その眞偽は明らかでない。隆國に「宇治大納言物語」の著があつたことは、「八雲御抄」卷一・「實物集」卷一・「愚管抄」卷三・「古今著聞集」序（宇治縣相を隆國を指すものと見て）などによつて知られるが、「今昔物語集」をこれと同一の書と見ることにについては異説があつて、もし兩者を同一でないとするれば、「今昔物語」を隆國の著とする説は根據を失ふわけである。これを決定するには、本書の成立を明らかにする必要があるが、坂井衡平氏は「今昔物語集の新研究」中に、兩者の同一ならざることを論じ、「宇治大納言物語」は「今昔物語」の一流流と見るべきものであるが、「今昔物語集」その

ものではないとし、なほ種々の理由をあげて「今昔」の隆國著でないことを説いて居られる。最近山岸徳平氏も岩波講座の「今昔物語集概説」に本書と「宇治大納言物語」とを區別し、本書の成立を隆國歿後にあるとして、隆國著作説を否定された。しかし本書の如き説話集は、その性質上往々原著の上に後人の増補改修が加へられるものであり、本書も「宇治大納言物語」が増補改修されて現在見るやうな形になつたものと認め得るならば、原著者を隆國とする説は、あながち否定するに及ばないであらう。何れにしても「宇治大納言物語」と本書との關係についてはなほ研究の餘地があると思はれる。

藤岡博士の「國文學全史平安朝篇」に、本書は「寛治以後に成れるにあらざることを推すべく、なほ康平三年に歿したりといふ駿河前司橋季通を「唯今ある」といへるなどを以ても、康平前後に編せるものなるを知るべし」と説かれて以來、本書の成立を後冷泉天皇の康平（一七一八—一七二四）頃とする説が一般に行はれたが、坂井衡平氏は書中に隆國歿後の記事があることを擧げて、鳥羽天皇の天永（一七七〇—一七七二）の初年頃に完成したものといひ、山岸徳平氏は前記の研究において、長治・嘉承・天仁（一七六四—一七六九）頃の所産であらうとされた。山岸氏は小野玄妙博士の説により、本書の「三寶感應要略録」（高麗の僧非獨著）は隆國歿後の著作であり、その日本渡來はなほ後れてゐることを主なる根據として立論されたのである。本書の完成したのは、恐らく山岸氏または坂井氏の説の如くであらうが、原作の流動變化を認める立場からすれば、原作の成立は、藤岡博士説の如く、康平前後とすることも可能かと思はれる。

隆國が「宇治大納言物語」を書いた由來については、前記「宇治拾遺物語」序に、彼が南泉房にあつて、

貴賤を問はず、往來の者を呼びとめて物語をさせ、聞くにしたがつてそれを書きとめた由を記し、その本はもと十五帖であつたのを、後の人が書加へて、物語の数がふえたといつてゐる。「今昔」にはこの記事に相應するやうな民間説話も少くないが、當時存在した和漢の典籍に原據を有するものが甚だ多い。その典據は次のやうなものである。

(天竺部)「法苑珠林」「佛祖統記」「經律異相」「三寶感應要略錄」「雜寶藏經」「涅槃經」「智度論」「大唐西域記」など  
(震旦部)「法苑珠林」「三寶感應要略錄」「神僧傳」「冥報記」「搜神記」「列女傳」「漢書」「左傳」「史記」「莊子」「淮南子」「世説」「說苑」「白氏文集」など。

(本朝部)「日本靈異記」「三寶繪詞」「日本往生極樂記」「日本法華證記」「續本朝往生傳」「地藏菩薩驗記」「續日本紀」「文德實錄」「三代實錄」「萬葉集」「古今集」「伊勢物語」「大和物語」「竹取物語」及び諸社寺の緣起など。

本書の文章は、小説物語の如き純粹の和文ではなくて、多量に漢語漢文脈を交へ、對話の部分などにはまゝ當時の俗語を用ひ、概して簡潔平明である。

書寫法は、古寫本によつて推測すれば、漢字を主として、川言の活用する部分や助辭(助動詞・助詞)の類は片假名で小書きにし、それが三字以上に亘る場合には二行に分けて書く方法をとつたものらしい。たとへば、

今昔釋迦如來未<sup>ル</sup>タ佛ニ不成給<sup>ル</sup>時ハ釋迦菩薩ト申ス兜率天ノ内院ト云所ニツ住給ケル而ニ閻浮提ニ下生シナム思シケ時ニ五衰ヲ現ハシ給フ(卷一、第一話)

文章

書寫法

特性

諸本

本書は我が國最大の説話集として文學史上に重きをなすのみならず、社會史・風俗史・思想史・國語史などの資料としても貴重な性質を具へてゐるものである。

古寫本

○東北帝大狩野文庫藏本 二十二冊

紀州新宮城舊藏本で、丹鶴叢書本の原本であらうといふ。卷三・八・十七・十八・十九・二十・二十一・二十三・二十五の九卷を缺いてゐる。

○京都鈴鹿氏藏本 九卷

「異本今昔物語」と題し、殘缺本であるが、鎌倉時代の書寫といはれ、流布本の佚文を補ふところが多い。

○押小路家藏本 二十七冊

○東京文理科大學藏本 二十八冊

○内閣文庫藏本 二十八冊

○靜嘉堂文庫藏本 (殘缺本五部あり)

古版本

○考訂今昔物語 三十冊 井澤長 秀校訂 享保五年・十八年

本朝部三十冊、天竺部十五冊、震旦部十五冊に編次したうち本朝部だけ刊行された。説話を取捨し、順序を變へ、假名を平假名に改めなどして、原本の面目を壊してゐる。明治二十九年・三十年に上下二冊の複製本が出た。

○丹鶴叢書本 三十冊

水野忠 央校訂 嘉永年間

本朝部だけであるが、原本の形式をとどめた善本である。

第二編 平安時代(物語)

活版本

- 國史大系 (第十六) ○訂史籍集覽 (第九) ○國書刊行會本丹鶴叢書 (第二・三)
  - 國文叢書 (第十六・十七卷) ○日本文學大系 (第八・九卷) ○日本古典全集 (第四期)
- 右のうち、國史大系本は本朝部を丹鶴叢書本により、天竺・震旦部を押小路家本によつて收め、史籍集覽本は本朝世俗部だけを收め、國書刊行會本は舊丹鶴叢書本に天竺・震旦部を増補し、國文叢書本は本朝部のみを收め、日本古典全集本は芳賀博士の攷證本の本文を底本として、丹鶴叢書本の原本と見られる現東北帝大藏野文庫本によつて校合したものである。

参考書

註釋書・研究書

- 今昔物語訓 一卷 小山田與清 (國文註釋全書)
  - 今昔物語出典攷 一卷 岡本保孝 安政七年序 (國文註釋全書)
  - 改訂今昔物語集 三冊 芳賀矢一 大正二年・三年・十年
  - 今昔物語集の新研究 一冊 坂井衡平 大正十二年・増訂版同十四年
  - 宇治拾遺物語考 佐藤誠實 (史學雜誌十二ノ二)
- 本文は諸本によつて流布本の缺を補ひ、嚴密に校訂を加へ、各説話の出典を博搜してその原文を掲載對照せしめたもの。卷頭に「今昔物語」の性質及び價値を論じた序論がある。
- 狩谷被齋の手記その他をもとにして多少増補したもの。

- 今昔物語作者考 菊池久吉 (東洋哲學明治四十二ノ一)
- 今昔物語の研究 南方楠熊 (郷土研究一ノ六・九・十、南方隨筆)
- 今昔物語補遺 鈴鹿三七 (藝文六ノ十二)
- 今昔物語研究 島田退藏 (日本文學講座)
- 今昔物語鑑賞 芥川龍之介 (日本文學講座)
- 今昔物語の漢語と漢字 岡井慎吾 (國語國文昭和七ノ三)
- 今昔物語概説 山岸徳平 (岩波講座「日本文學」)

◎打聞集 (うちききしふ) 殘缺一卷

説話集の一種で、久しく埋没してゐたのを、山口光圓氏が滋賀縣愛知郡の某寺で古寫本を發見し、それが「書物禮讚」大正十四年九月號に有川武彦氏に紹介されて世間に知られ、次いで古典保存會から複製本が刊行されて、容易に見られるやうになつた。

その本は表紙に下帖と記してあるから、もと上下二卷または上中下三卷あつたものと思はれる。但し「本朝書籍目録」雜抄部に「打聞一卷」とあるのがもし本書を指すものとすれば、該本は一卷を上下或は上中下に分冊したものであらう。

解説

この本の内容は「達磨和尚事」以下印度・支那及び日本の佛教關係の説話二十七條を記したもので、各説話は「昔」の語で始まり、文體・書寫法なども「今昔物語集」に類似してゐる。橋本進吉氏の調査によれば、本書の説話二十七條中「今昔物語集」に見えるものが二十條、「宇治拾遺物語」に見えるものが七條ある。本書と「今昔」及び「宇治拾遺」との間に密接の關係があることは、これによつて推測されるが、その關係の詳細については今後の研究に俟たなければならない。

著者並びに著作年代は未詳であるが、前記の本は崇徳天皇の長承三年頃に榮源といふ僧侶の書寫したものと見られるから、原本は少くともそれ以前に成つたものであることは明らかで、恐らく「今昔物語集」の完成した頃に接近して作られたものであらう。

古典保存會の複製本に添へた橋本進吉氏の解説以外には、まだ註釋書・研究書の類が現はれない。

◎江 談 抄 (がうだんせう) 六 卷

大江匡房(後拾遺和歌集の條参照)の談話を筆録したもので、物語系統のものではないが、説話集の一種として便宜上ここに入れる。

「江」は「大江」の略。大江氏の談話を書きとめた本の意味であらう。「本朝書籍目録」雜抄の部には「江談」と記されてゐる。

「本朝書籍目録」に「江談六卷<sup>江區</sup>」とあり、また別に「江談三卷」と記してある。兩者の關係は明らかで

ないが、恐らく一は異本であらう。群書類從に收めて流布してゐるものは六卷である。

「今鏡」卷十「敷島のうちぎき」の條に「藏人實兼と聞えし人の、匡房の中納言の物語に書ける文にも云々」とあり、「江談抄」卷三の「郭公爲鴛子事」の記事を指してゐるから、藏人實兼が本書の筆録者であつたと考へられる。實兼の如何なる人であつたかについては、黒川春村の「碩鼠漫筆」卷十一に、内大臣藤原能長の孫、中納言基長の嫡男、散位從五位實兼であらうと考證してゐるが、それは誤りで、少納言藤原通憲(信西)の父に當る人とする説の方が正しいやうである。

「碩鼠漫筆」に、「嘉承二年三月三十日、中右記云、或人談云、江帥匡房此兩三年行步相不叶、仍不出仕、只每人來逢、記錄世間雜事之間、或多僻事、或多人上、偏任筆端、記世事、尤不便歟、不見不知、暗以記之、狼藉無極云々、大儒所爲、世以不甘心歟」とあるが、ここに引かれた「中右記」(中御門右大臣宗忠の記錄)の記事は、本書を指すものやうで、これによれば、本書の原本は堀河天皇の長治・嘉承頃に成つたものと思はれる。但し流布本は原本の形をそのままにとどめたものではなく、後に整理改修を経たものやうである。

流布本の内容は、第一公事・攝關家事・神佛事、第二・第三雜事、第四(缺題)、第五詩事、第六長句事に分れ、故事・傳説・文人の逸事・實話・詩文の評論などを記したもので、各説話は概ね何々の事といふ題を設け、「被談云」「被命云」「何某云」などの冒頭を置いて記してゐるが、まき問答體のところもある。文章は概して準漢文の記録體であるが、中には假名交りに書いたところもある。

古 寫 本

名 稱

卷 數

編 者

年 代

内 容

諸 本

○醍醐三寶院藏「水言鈔」一帖 (古典保存會第一期複製)

「水言」は江談の二字の偏をとつたもので、内題には「江談抄」とある。卷四及び卷五の零本で、平安末期の書寫かといはれ、信西の子で實業の孫に當る醍醐寺座主勝賢(建久七年寂)の所持したもの。大正十一年四月國寶に指定せられた。

○神田喜一郎氏藏高山寺本 一卷 (古典保存會第三期複製)

匡房の歿後間もない永久二三年頃の書寫である。右二本共に原本からの轉寫本と思はれ、流布本と説話の順序が甚だしく違ひ、後の改修を經ない原本の形を保存したものと見られてゐる。但し兩者條項の順序が同一でない。

版 本

○群書類從 卷四百八十六 (活版本第十七輯) ○國史叢書

#### 第四 隨筆・日記・紀行

緒 言

平安時代に於ける假名文の隨筆・日記・紀行は、家集・物語と密接な關係があり、また三者相互の間に相即不離の關係がある。しかしそれらの關係を跡づけることは文學史の職分であるから、ここには立入らない。ただ作品の解説をする準備として三者の性質を一應明らかにしておかう。

便宜上日記からはじめよう。一體廣義の日記には公的なものと私的なものとがある。而して公的な日記には宮廷の日記(内記日記・殿上日記の類)と、官廳の日記(外記日記・近衛府日記の類)とがあり、私的な日記にも(一)公私の行事の覺書、日毎の事件の備忘として書きとめられた廷臣の記録の類と、(二)自己の經驗・見聞を

内省告白した類のものとがある。公的な日記と私的な日記の第一類とは漢文または準漢文で書かれ、實用的な目的のもとに成つたもので、文學的な性質を殆ど持つてゐない。ここに解説しようとするのは私的な日記の第二類に屬するものである。これを假に狭義の日記と名づける。

狭義の日記は和歌の詞書や物語などと同様に假名文で書かれたもので、主として宮廷または貴族の女子の手に成り、多數の和歌を配してその經驗見聞を語つてゐる。それには日時を逐うて記した日次の日記もあり、過去を追憶回想して記したと思はれるものもあるが、共に自己の生活を内省し、告白し、作者の個性と生活感情とに色づけられてゐる。

次に紀行も日記の一種である。時日と共に環境が變る旅中の經驗見聞を記した點が、普通の日記と違ふだけである。随つて紀行もまた日記と名づけられて居り、また普通の日記中にも紀行の部分を含むものが少なくない。

隨筆は日記・紀行に比して内容が一層廣汎雜駁である。元來隨筆とは直接に經驗した事實を具體的に書く代りに、人生の一般事象に對する感想批評を心の赴くままに書きしるしたものを指すのであるが、この時代の隨筆はこの意味の隨感隨想録的部分の外に、日記的部分、紀行的部分を含み、また物語的部分をも包有してゐるのである。但しこの時代の隨筆書の現存するものは「枕草子」だけである。

參 考 書 王朝時代の日記文學 池田龜鑑 (日本文學講座)

日記文學の本質 池田龜鑑 (國語と國文學四ノ四)

第二篇 平安時代 (隨筆・日記・紀行)

- 隨筆文學の本質 佐藤幹二 (國語と國文學四ノ四)
- 日記紀行文學概説 宮田和一郎 (月刊日本文學昭和七ノ一)
- 平安朝の日記文學 岩永 胖 (國漢昭和七ノ八)
- 平安朝の日記紀行 西下徑一 (岩波講座「日本文學」)

◎土佐日記 (とさにつき) 一卷 紀 貫之

土佐の國から京に歸る途中の旅日記で、紀貫之(古今和歌集)の修參照が女性に假託して書いたものと傳へられる。貫之歿後五年の天曆五年に成つた「後撰集」中に、本書中の和歌を貫之の作として載せてあるのを見ても、貫之を本書の作者とする説は動かせないであらう。貫之は延長八年正月土佐守となつて赴任し、在國五年、任終へて承平四年十二月二十一日に彼の地を舟出し、翌五年二月十六日に京に歸着した。その歸還の旅の見聞感想を記したものが本書で、文中に六十首の和歌を含んでゐる。書き終つた年月は明らかでないが、旅中に書きつけた心覚えを、歸京後更に推敲修補して成つたものであらう。

當時男子の日記は漢文で書くのが普通であつたが、本書は和文即ち假名書きの女文の形を用ひて書き、冒頭に「男もすといふ日記といふものを、女もして心みむとてするなり」とことわつて、女の日記のやうに見せかけてある。後に多く書かれた女流日記の源頭に立つものであると同時に、同じ作者の「大堰川行幸歌序」「古今集序」及び「竹取物語」「伊勢物語」等の初期の物語類と共に國文發達史上に重要な位置を占めるもので

解説

性質

諸本

あり、且つ一面に於ては、當時の交通状態・海賊・民間行事、民謡などに關して社會上民俗上の資料たり得る性質を持つてゐる。

古寫本

○定家本 一卷 文曆二年藤原定家寫 前田侯爵家藏

文曆二年五月十三日に藤原定家の寫了したもので、奥書によれば、蓮華王院所藏の貫之自筆本の轉寫であるといふ。尊經閣叢刊本の複製がある。

○亞槐本

奥書に「明應壬子仲秋候 亞槐藤原判」とあり、明應元年に三條西實隆が將軍家所藏の本を借りて書寫したもので、これに群書類從所收本・妙壽院本(藤原愷高が漢字をあてた片假名本)の二系統がある。もとは定家本と同じく蓮華王院から出たものであらうといふ。天文二十二年の寫本が三條西伯爵家にあり、古典保存會第五期中に複製本刊行の豫定である。

○爲家本・爲相本

爲家本は岸本由豆流の「考證」に引かれ、爲相本は人見卜阿の「附註」に引かれてゐるが、二者は同系統のものらしく、蓮華王院本系統の諸本とは本文が全く違つてゐる。その理由はまだ明らかでない。

古版本

○寛永二十年本 ○萬治三年本 ○群書類從本 (卷三二七) ○扶桑拾葉集本

第二篇 平安時代 (隨筆・日記・紀行)

活版本

- 日本文學全書 (第二編) ○國文叢書 (第六卷) ○國文大觀 (日記草子部)
- 國民文庫 (第九) ○有朋堂文庫 (第一輯) ○新釋日本文學全書 (第四卷)
- 日本古典全集 (第二期) ○群書類從 (第十八輯) ○岩波文庫

以上の版本は概ね亞槐本系統のものであるが、岩波文庫本は定家本を底本とし、妙壽院本を附載してある。

参考書

註釋書

- 土佐日記聞書 二卷 著者未詳 (寫本)
- 土佐日記抄 二卷 北村季吟 寛文元年
- 土佐日記附註 三卷 人見卜幽 萬治四年成  
本文は爲相筆本に據るといふ。
- 土佐日記註 一卷 加藤宇萬伎 明和五年成 (寫本)  
契沖と眞淵の説を併せ記したるもの。
- 土佐日記打聞 二卷 楫取魚彦 (寫本)  
眞淵説の開書だが、「註」の説と異同がある。
- 土佐日記考證 二卷 岸本由豆流 文化十二年成・文政二年 (國文註釋全書・國文學註釋叢書)  
諸本を比較し、諸抄を取捨して、綿密に考證したるもの。爲家本の本文を引いてゐる點注意を惹く。明治三十一年刊行

鈴木弘恭の「訂正土佐日記考證」(一冊)は、本書に訂補を加へたものである。

- 土佐日記燈 二十四卷 富士谷御杖 文化十三年成

著者の言語學的見地から、辭句・文章に詳細な解釋を加へてゐる。明治三十一年洋裝三冊本として刊行された。

- 土佐日記創見 四卷 香川景樹 文政六年成 (國文學註釋叢書)

諸家の説を檢討批判した點に特色がある。明治二十四年刊行の複製本(一冊)もある。

- 土佐日記舟の直路 二卷 橋守部 天保十三年成 (橋守部全集・國文學註釋叢書)
- 土佐日記地理辨 一卷 鹿持雅澄 文久三年
- 土佐日記俚言解 一冊 佐佐木弘綱 明治十七年
- 土佐日記地理考 一冊 福島成行 明治二十五年
- 土佐日記講義 一冊 今泉定介 明治二十九年
- 土佐日記評釋 一冊 吉川秀雄 大正十一年
- 土佐日記新釋 一冊 森山右一 昭和二年
- 土佐日記全釋 一冊 小室由三 昭和五年
- 譯註 竹取物語・土佐日記・方丈記 一冊 藤井乙男 昭和七年

- 王朝文學叢書 (第十一)

第二篇 平安時代 (隨筆・日記・紀行)

研究書

- 先驅者としての紀貫之の表現 齋藤清衛 (國語と國文學七ノ四)
- 本文批評の史的考察及び批評法(土佐日記) 金子岩吉 (國漢研究昭和六ノ九)
- 定家本土佐日記の研究 橋純一 (大倉廣文堂刊行「土佐日記」附録)

◎いほぬし 一卷 増基

作者が文中に廬主(いほぬし)と自稱してゐるので、書名はそれを取つたものと思はれる。別に「増基法師集」の名がある。

「中古歌仙傳」に「増基法師 後拾遺集目云號廬主云々」とあり、能因「玄々集」に本書中の歌を二首採つて作者名を「増基法師 いほぬし」とし、「後拾遺集」「詞花集」などに本書中の歌を「増基法師」として載せ、「袋草子」「和歌色葉集」などに書名を「廬主」、作者を増基としてゐることによつて、廬主は僧増基の號であり、本書の著者が増基であることが分る。

増基は平安時代中期以前の歌僧で、その歌が後撰・後拾遺・詞花・新古今・玉葉・續後拾遺・風雅・新千載・新拾遺・新續古今の諸集に採られてゐるが、傳記は明らかでない。「大和物語」に見える増基君(または増喜君)を同一人とすれば「比叡にすむ 院の殿上もする法師」であつたらしい。但し「後撰集」「大和物語」に見える増基と、「玄々集」「後拾遺集」に見える増基即ち本書の著者とは別人でなからうかと疑つてゐる人もある。

(「袋草子」巻二「後撰和歌集」の條、岩波講座「日本文學」所載西下經一氏「平安朝の日記紀行」など参照)

成立年代も明かでない。著者の傳記と共に今後の研究を要する。

内容は熊野紀行と遠江紀行の二部に分け、中間に紀行と關係のない歌集を含んでゐる。

熊野紀行は神無月十日の頃に京を出發し、八幡・住吉・紀の國吹上の濱などを経て、熊野に詣で、伊勢路から京に歸るまでのことを、三十首の和歌を骨子として書き、遠江紀行は三月十日に京を立つて、關・洲岐・二村山・宮路山・高師山などを経て、濱名のあたりまで行つたことを五十首の和歌を骨子として書いてある。共に旅中の和歌とその詞書とを道順に従つて排列した形のものであるが、概して前者は詞書が複雑で、後者は簡單である。後者は終に遠江滞在中の歌を添へてある。

紀行としても日記としてもまとまつたものではなく、歌集に或程度の整理を加へたに過ぎないやうな性質のものであるが、「土佐日記」につぐ時代のものとして注意すべきものである。

宮内省圖書寮その他に「増基法師集」と題する寫本があり、版本には群書類從本(卷三百二十七。活版本第十一冊)・扶桑拾葉集本(卷三)・國文大觀本(日記草子部)がある。扶桑拾葉集には「熊野紀行」と「遠江の道の記」とを別々にして收め、兩者の中間にある歌集的部分は省いてゐる。註釋書・研究書の類はまだ現はれない。

◎蜻蛉日記(かげろふにつき) 三卷 藤原道綱母

第二篇 平安時代(隨筆・日記・紀行)

書名

著者

年代

内容

性質

諸本

参考書



名稱	内容	年代	性質
----	----	----	----

右大將藤原道綱母藤原倫事女・藤原兼家室の日記で、書名は上巻の終りに「なほ物はかなさを思へば、あるかなきかの心地するかけろふの日記なるべし」とあるのに本づいてゐる。「大鏡」太政大臣兼家の條にも「歌など書きあつめて、かけろふの日記と名づけて、世にひろめ給へり」と見えてゐるから、「の」を添へていふのが、もとのいひ方であつたらしい。「かけろふ」は普通「蜻蛉」の字を當ててゐるが、その意は「陽炎」であらう。外に「遊士日記」「八雲御抄」「遊絲日記」「清水濱臣寫本標題」などと書いたものもある。

記事は藤原兼家が作者に通ひそめて、和歌の贈答をしたことに始まり、道綱誕生のこと、兼家の愛が薄らいで、間の絶えたのをなげくこと、道綱が成長して、二十歳の時賀茂の臨時の祭の舞人になるまでの間に起つたいろいろの見聞・経験などを書いたもので、村上天皇の天曆八年より醍醐天皇の天延二年まで前後二十一年に亘つてゐる。但しその間天徳二年・同四年・應和元年の三箇年は記事が缺けてゐる。「蜻蛉日記解環」には、それを兼家の父師輔薨去のために作者と兼家との間に交渉が少かつたからであらうと説明してゐるが、その前後に錯簡が非常に多い所から考へると、もつた記事が散佚して今日見るやうなものになつたのかも知れない。

この日記の執筆年代については、藤岡作太郎博士は、「國文學全史平安朝篇」中に、各巻の記事の精粗、作者の生活状態等から推して、天祿二年頃から筆を執つて、前の分は追記したものであらうと論じたが、池田龜鑑氏は全部を天延二年以後の追記と見て居られる(日本文學大辭典)。

本書は傳本が不完全で、錯簡・誤寫・脱落等のためにもとの姿を損ねてゐるけれども、平安朝の一貴婦人

の、戀愛に破れ、結婚に失敗し、愛兒の成長に唯一の望と慰安とを見出した半生の心の記録として、自叙傳體物語の性質を持ち、藝術的に高い價值を有すると同時に、女流日記文學の先驅として文學史上に重要な位置を占めるものである。

古寫本

- 彰考館本 (契沖自筆の書入あり)
- 學習院本
- 永森氏藏本 (以上三本契沖校訂本系統)
- 京都帝大本
- 東京文理大本 (以上二本清水濱臣の奥書あり、他本と本文の異同がある)
- 南葵文庫本
- 帝國圖書館本
- 神宮文庫本
- 池田氏藏本 (松下見林舊藏本)

古版本

- 元祿十年本 三冊
- 寶曆六年本 八冊
- 文政元年本 三冊

なほこれらの刊本に江戸時代の學者の書入をしたものに、横山由清書入本三冊(東京文理大藏)、契沖・若沖・士清・橋彦・麗女等考異本三冊(神宮文庫藏)、伴蒿隱書入本八冊(宮内省圖書寮藏)、陽春庵舊藏書入本八冊(南葵文庫藏)、富士谷成章書入本三冊(帝國圖書館藏)、伊藤光總舊藏書入本八冊(同上)、賀茂季鷹說書入本八冊、山岡俊明說書入本(廣島文理大藏)などがある。

活版本

- 日本文學全書 (第五編)
- 國文大觀 (日記草子部)
- 國文叢書 (第十二卷)
- 第二篇 平安時代 (隨筆・日記・紀行)

諸本

参考書

- 日本文學大系 (第三卷) ○新釋日本文學叢書 (第四卷) ○有朋堂文庫「平安朝日記集」
- 日本古典全集 (第二期)
- 註釋書・研究書
- 蜻蛉日記考證 三卷 契 沖 元祿九年成 (寫本)
- 蜻蛉日記解環 三十六卷(十八冊) 坂 微 天明五年 (國文註釋全書・國文學註釋叢書)
- 全譯王朝文學叢書 (第十七)
- 宮廷女流日記文學 一冊 池田龜鑑 昭和二年 (國文學研究叢書)
- 蜻蛉日記に表はれた愛慾の世界 齋藤清衛 (國語教育十二ノ十二)
- 天曆期を背景として見たる蜻蛉日記の作者 齋藤清衛 (國語と國文學六ノ十)
- 蜻蛉日記に關する二三の考察 荒木田楠千代 (國語と國文學八ノ四)
- 蜻蛉日記に關する新發見 岡田稔 (國語と國文學九ノ五)
- 蜻蛉日記人物考 阪口玄章 (國語と國文學九ノ六)

◎枕草子 (まぐらのさうし) 卷數不定 清少納言

清少納言の隨筆集で、「源氏物語」と並んで平安時代散文藝術の雙璧と稱せられるものである。

名稱

作者

成立

通稱「枕草子」の外、古くは「清少納言記」「清少納言枕草子」などとも呼ばれた。「枕草子」といふ名稱は、跋文に「宮の御前に内の大臣の奉り給へりけるを、「これに何を書かまし。うへの御前には史記といふ文をなむ書かせ給へる」など宣はせしを、「枕にこそはし侍らめ」と申ししかば、「さば得よ」とて賜はせたりしを、あやしきを、こよや何やと、盡きせずおほかる紙の數を書きつくさむとせしに、いと物覺えぬことぞ多かるや」とあるのに本づくものと考へられてゐる。但しこの記事を「枕草子」全體に對する跋文と見ることにについては疑問がある。

作者清少納言は歌人清原元輔の女で、正暦二年頃より一條天皇の中宮定子(道隆女、後皇后)に仕へて寵遇せられ、長保二年十二月皇宮崩御の後間もなく宮仕を辭して、不遇の身となつたらしいが、その後の詳しい消息は不明である。晩年落魄して餘生を送つてゐたのを、若い殿上人が嘲笑した時、「駿馬の骨をば買はずやありし」といひ返したといふ話が、「古事談」第二に見えてゐるが、それは彼女の負けじ魂と、漢學の素養のゆたかであつたことと、生來機智に富んでゐたことなどから思ひついた作り話であらう。本書の外、家集「清少納言集」があり、後拾遺・詞花・千載・續後撰・續古今・玉葉・續千載の諸集に歌が採られてゐるが、歌人としてはさまで傑出したものとは見られない。

「枕草子」は着手並びに擱筆の年代が共に明らかでない。前に引いた文中の内大臣は伊周で、その内大臣在任は正暦五年八月二十八日から翌々年の長徳二年四月二十四日までであつて、作者が中宮から草子の料紙を賜はつたのは、その間のことであらうが、本書の記事は皆その時以後に書かれたとは斷言出来ない。書中に

ある事柄のうち年代の推測出来る範囲では、彼の女の宮仕の前花山天皇の寛和二年のことが最初で、長保三・四年頃のことか最後である。しかしその大部分は宮仕中に遭遇した出来事であり、殊に長徳年間の記事が多いから、やはり多くは中宮から料紙を賜はつた時以後の執筆にかかると、摺筆は長保四年頃と見るべきであらう。しかし本書の成立についてはまだ不明の點が多く、形態及び一々の記事の書きざまなどの上から、なほ詳細に研究する餘地が残されてゐる。

「枕草子」の記事には、作者の見聞遭遇した事件を叙したもの、種々の題を設けて、その答を記したもの、(その中にも自然の現象事物について書いたものと各種の情緒の對象になる事物について書いたものがある)、自然人事に關して感想・批判を試みたもの等を含み、全體としては隨想隨感録と見られるけれども、部分的には、日記・紀行・短篇物語・雜錄・感想等の集合である。

「枕草子」には、本文も形態も互に異なる異本が多く、しかもそれらは何れも原本の形をそのままに傳へたものではないやうである。現存諸本はこれを形態上の異同によつて分ければ、雜纂的な形態のものと、類別的な形態のものとの二種類になるが、和辻哲郎氏は「枕草子に就ての提案」と題する論文に於て、本書の原形が今日の流布本(雜纂的な形態)とは異なつたものであるべきことを説き、原形に對して一種の想定を下したが、池田龜鑑氏は「清少納言枕草子の異本に關する研究」に於て、實證的にこの説を補足し、最近更に「枕草子の形態に關する一考察」に於て、現存諸本の系統とその相互の異同について述べ、それらはすべて原形でないことを明らかにし、原本は分類型(類別的な形態)のものであつたとする説に一二の新しい根拠を附加

内容  
形態

された。

次に池田氏の研究の結果による分類に従つて本書の諸本を挙げる。

古寫本

一 傳能因法師所持本系統

この系統の本はもと二巻で、後に五巻とされたものであるといふ。この系統の主要な寫本には次のものがある。

- 三條西家本 室町中期以前寫 ○細川侯爵家本 細川幽齋自筆本(三條西家本を轉寫したもの)
- 高野辰之氏藏本 ○池田龜鑑氏藏本

二 安貞二年奥書本系統

奥に「安貞二年三月 遷及愚翁在判」とある本で、三巻本ともいはれる。この系統の本には文安四年・五年秀隆書寫の本と、文明七年教秀書寫の本と二通りあり、前者は亡佚して、今日傳はるものは後者の系統の本である。次の諸本はこれに屬する。

- 勸修寺伯爵家本 (教秀自筆かといふ) ○宮内省圖書寮本 ○故富岡謙藏氏藏本
- 前田侯爵家一本 ○内閣文庫本 ○久原文庫本 (飛鳥井雅章寫)
- 松井簡治氏藏本 ○京都帝大本 ○岩瀬文庫本 ○鈴鹿三七氏藏本
- 淺野侯爵家藏繪卷 (南北朝頃書畫。大和繪同好會の複製あり)

以上二系統の本は、共にいはゆる雜纂型の形態を持つてゐるが、本文の異同、章設の出入、順序の差異等があつて、同

諸本

一系統と見ることは出来ない。

三 前田家本

前田侯爵家所蔵の四冊本で、もと五冊あつたのが一冊缺けたものかといふ。藤原爲氏筆或は民部卿局筆と傳へられ、鎌倉時代中期の書寫と見られてゐる。この本は整然たる組織を持つた類別型の形態を持ち、第一冊は「はるはあけぼの」以下四十六枚で、主として「何々は」といふ形で自然現象や事物について記した部分、第二冊は「めでたきもの」以下七十四枚で、主として「何々なるもの」といふ形で種々の情緒の對象について述べた部分、第三冊は「正月一日は」以下八十枚で、四季と人事の觀察・感想を記した隨筆的部分、第四冊は「小白河といふ」以下七十八枚で、作者の見聞した事實を叙した日記的部分である。曾經國叢刊の玻璃版複製本及び活版本が出てゐる。

四 堺本系統

元龜元年十一月宮内卿清原朝臣の奥書のある本で、前田家本に類似した類別型の形態を持つてゐるが、隨筆的部分と日記的部分のうち約六十段を缺き、且つ本文の異同、順序の差異等があつて、兩者同系一統とは見られない。群書類從所收本は後光嚴院宸翰本の轉寫本の由の奥書があり、堺本より記事は少いが、同系統の本らしい。堺本系統の寫本には次のものが知られてゐる。

- 高野辰之氏藏本
- 前田侯爵家一本
- 池田龜鑑氏藏本
- 無窮會文庫本
- 靜嘉堂文庫本
- 古版本

参考書

- 木活字本 五冊 (十行本・十二行本・十三行本の三種あり、皆傳能因所持本系統)
  - 慶安二年本 七冊 (傳能因所持本系統)
  - 群書類從本 (第四百七十九卷)
  - 活版本
    - 群書類從 (第十七輯)
    - 國文大觀 (日記草子部)
    - 日本文學全書 (第二編)
    - 國民文庫 (第九)
    - 國文叢書 (第六卷)
    - 新釋日本文學叢書 (第五卷)
    - 日本文學大系 (第三卷)
    - 有朋堂文庫 (第一輯)
    - 日本古典全集 (第二期)
- 以上の活版本は、群書類從本を除く外は概ね北村季吟の春曙抄本、またはその基礎となつた傳能因所持本系統の本に據つてゐるが、安貞二年奥書本(三卷本)系統の内閣文庫本を底本としたものに、藤村作博士編の「清少納言枕草子」(一冊)が出てゐる。
- 註釋書・研究書
- 清少納言枕草子註 十卷 藤原季經 (本朝書籍目録所見)
  - 枕草紙春曙抄 十二卷 北村季吟 延寶二年成  
本文は傳能因所持本系統の本を三卷本・堺本で校訂したもの。註釋が概ね妥當で、最も廣く行はれてゐる。
  - 枕草子抄 十五卷 加藤盤齋 延寶三年 (國文註釋全書・國文學註釋叢書)  
整齊抄ともいはれる。本文は「春曙抄」と同種、註釋は道學的な附會説も多いが、博引旁證、參考となる所も少くない。
- 第二篇 平安時代 (隨筆・日記・紀行) 二九九

○枕草紙傍註 十一卷 岡西惟中 天和元年 (國文註釋全書・國文學註釋叢書)

細川幽齋から宮本孝庸に授けられた説を集成して、傍註を加へたもの。本文は前二者同様、傳能因所持系統本に三卷本・堺本を混じてゐる。

○枕草子裝束抄 一卷 壺井義知 享保十四年 (國文學註釋叢書)

○枕草子抄 一卷 伊勢貞丈 (安齋雜考下)

有職故實・家屋・調度などに關する説明を主とし、作者の傳記、草子の成立に關する考なども記す。

○枕草紙新釋 五卷 藤井高尙

○枕草子註釋 加納諸平

○枕草紙圖抄 十卷 齋藤彦麿

○枕草紙私記 一卷 岩崎美隆 天保十二年成 (國文學註釋叢書)

○枕草紙扛圖抄 四卷 岩崎美隆 (國文學註釋叢書)

「春曙抄」に著者の傍註を添加したものである。

○枕草子考 一卷 伴直方

○枕草子存疑 一卷 岡本保孝

○訂正枕草紙春曙抄 一冊 鈴木弘恭 明治二十六年

○枕草子詳解 三冊

○枕草子通釋 二冊

精密な異本研究によつて本文を整理してある。

○清少納言枕草子別記並逸文 一冊 金子元臣 大正八年

○枕草子評釋 一冊・二冊 金子元臣 大正十三年

批評に文化的觀察を施したのを特色とする。

○枕草子全釋 一冊 栗原武一郎 昭和二年

語釋・本文・口譯を三段に組んだところに特色がある。

○清少納言枕草紙異本考 武藤元信 (東洋學藝雜誌明治四十三年五月)

○枕の草紙と日本女性 島崎藤村 (文章世界五ノ十四)

○枕草紙に就ての提案 和辻哲郎 (國語と國文學三ノ四、日本精神史研究)

○清少納言枕草子の異本に關する研究 池田龜鑑 (國語と國文學五ノ一)

○枕草紙の研究 有馬賢頼 (國語國文の研究廿七・廿九)

○枕草子研究 窪田空穂 (日本文學講座)

○美論としての枕草子 池田龜鑑 (國語と國文學七ノ十)

- 清少納言と則光 鹽田良平 (國語と國文學九ノ八)
- 枕草紙を讀まうとする方々に 島田退藏 (月刊日本文學昭和六ノ九)
- 枕草子の形態に關する一考察 池田龜鑑 (岩波講座「日本文學」)

◎和泉式部日記 (いづみしきぶにつき) 一卷 和泉式部

解説

平安朝女流歌人中の第一人者といはれる和泉式部の自傳的な手記と見られるが、他の日記と違ひ、三人稱で書かれて居り、古來「和泉式部物語」とも呼ばれた。和泉式部は大江雅致（やろ）の女で（生歿年月不明、父についても異説がある）、一條天皇の中宮上東門院に仕へた人。始め和泉守橘道貞の妻となつたが、性多情奔放で、冷泉天皇の第三皇子爲尊親王（みかど）その他と情交があり、道貞と離別し、爲尊親王薨去の後、その御弟敦道親王（あつた）と契り、後また藤原保昌に再嫁した。日記に書かれてゐるのは、長保五年四月式部が敦道親王の寵を得るやうになつてから翌寛弘元年正月までのこと、式部と敦道親王との情事が中心になつて居り、文中兩者贈答の和歌を多く載せてある。内容は比較的單調な戀愛事件の叙述で、著者の一生の經歷より見れば、ほんの一挿話に過ぎないものであるが、天才的抒情歌人であつた彼女の面容はこの小篇中にも窺ふことが出来る。但し今日傳はるものはこの日記の全部であるかどうかは明かでない。著作年代は敦道親王の薨去（寛弘四年十月二日）の頃かといはれる。

諸本

本書は傳本が尠いが、應永本・扶桑拾葉集本・三條西家本の三つの異なつた系統の本がある。そのうち前二者の間には大差がないが、三條西家本は兩者と著しく異なる本文を持つてゐる。これら相互の關係はまだ明らかにならない。

古寫本

○三條西家本 一冊

從來世に知られなかつた本で、昭和六年十一月始めて世上に紹介された。書寫年代は室町中期三條實隆の頃であらうといふ。雑誌「文學」昭和八年八月號・九月號に本文が掲載されてゐる。

○京都帝大本 一冊

奥に「千時應永廿一年孟春日書之 權大納言從二位爲尹判」とあり、いはゆる應永本で、爲尹書寫の本を後人の轉寫したものである。近時龍谷大學國文學會出版叢書第二編として複製刊行された。

○大阪圖書館本 一冊

天保十五年正月の奥書があり、扶桑拾葉集本・元文刊本等數種の異本で校合し、異同を記してある。

○宮内省圖書寮本 ○彰考館本

古版本

○寛文十年本 三冊

享祿二年五月初日、山科言繼が右中辨登秀の本を借りて寫し學つた由の奥書のある本を底本として刊行したもので、

題簽は「和泉式部物語」となつてゐる。本文は應永本と概ね一致する。

○元文元年本 一冊

題簽「和泉式部物語」。本文は寛文十年本と同一である。

○扶桑拾葉集本 (第五卷)

○群書類従本 (第三百二十卷)

類従本は拾葉集本を以て校合した由奥書に見えるが、本文は兩者同系統のものである。

活 版 本

○群書類従 (第十一輯) ○扶桑拾葉集

○日本文學全書 (第五編)

○國文大觀 (日記草子部)

○國文叢書 (第十八卷)

○新釋日本文學叢書 (第五卷)

○日本文學大系 (第三卷)

○日本古典全集「和泉式部全集」

○有朋堂文庫「平安朝日記集」

註 釋 書 ・ 研 究 書

○和泉式部日記標目 (帝國圖書館藏寫本)

○新譯和泉式部日記 一冊 與謝野晶子

○<sup>全</sup>王朝文學叢書 (第十一)

○Diaries of Court Ladies of Old Japan, translated by Annie Shepley Omori & Kochi Doi.

大正九年米國出版。「和泉式部日記」の外「紫式部日記」「更教日記」をも含んでゐる。

參考書

内 容

○Erklärung des Tagebuches Izumi-Sikibu, von Dr. August Peizmaier.

○和泉式部傳の研究 岡田希雄 (國語國文の研究四・六・八・十・十一・十三・十五・十六・十九・二十)

○和泉式部と藤原保昌 岡田希雄 (歴史と地理十九ノ二・三・五・六)

○和泉式部の戀愛生活 岡田希雄 (國語國文の研究二十四・二十七)

○異本和泉式部日記 池田龜鑑 (文學昭和六年十一月)

三條西家本の紹介である。

○宮廷女流日記文學 一冊 池田龜鑑 昭和二年 (國文學研究叢書)

◎紫式部日記 (むらさきしきぶにつま) 二卷 紫式部

寛弘五年七月より同七年正月十五日までの間に作者の見聞遭遇した事柄を記したもので、式部の宮仕してゐた中宮(上東門院彰子)が、お産のために里居して居られた土御門殿(道長邸)の有様に筆を起し、お産(後一條天皇御誕生)前後の出来事や模様を詳細に述べ、なほ交友に關することや道長に關すること、五節・臨時祭等の公事に關することなどを書き、翌六年正月の諸儀式、著者自身に關する経緯より、翌七年正月初のこと等に及び、十五日二宮(後朱雀天皇)の御五十日のことに終つてゐる。寛弘六年正月三日の記事と同十一日の記事との間には、當時の宮女等を批評して、齋宮の中將・和泉式部・赤染衛門・清少納言・左衛門内侍等に言及し、處世上・藝術上の教訓を述べた書簡風の文が挿まつてゐる。

第二篇 平安時代 (隨筆・日記・紀行)

三〇五

性質

成立

紫式部日記

三〇六

日記の記事には宮廷の男女の服装や、諸儀式の有様などが細かに書かれてゐるので、有職・故實・風俗史などの好参考資料とせられ、又「榮華物語」の「初花巻」の如きは本書を主要な材料として成つたものと見られてゐる。本書はさういふ點で、重要であるばかりでなく、著者の自然人生に對する態度や心持の表現されたものとしても、著者の性格を知る直接の資料としても、貴重な文献であり、隨つて又「源氏物語」を正當に理解するためにも、必ず讀まなければならぬものである。

本書の成立や原形については多くの疑問が残されてゐる。既に安藤爲章は「紫家七論」に於て「其日記むかしは數十年の巻有りぬべけれど、世に傳はらざるは不幸といふべし」といつて、今傳はるものはその殘篇であると考へてゐるが、その後「紫式部日記釋」の著者清水宣昭も「この日記そのかみはおほくありつらめども今の世に残れるはわづかに二卷なり」といつて、これと同意見を取り、明治以後も「評釋紫女手簡」の著者木村架岑氏を始め、中根香亭氏（關根氏「精解」にその説の紹介あり）、近頃では「宮廷女流日記文學」の著者池田龜鑑氏等は皆現存本非原形説を唱へてゐる。それに對して一方では「紫式部日記解」の著者足立稻直は現存本原形説を取り、關根正直氏も大體これと同意見であり、最近星加宗一氏も「紫式部日記考」に於て原本散佚説の非なる所以を論じ、現存本が原形のまゝなるべきを説いてゐる。この兩説に關聯して考ふべきことは、寛弘六年正月三日の記事と、同十一日の記事との間にある書簡風の記述であつて、これは相當多くの分量（三四十頁）を有するに關らず、謂はゆる日記と稱すべき性質のものでないから、日記とは別に書かれた書簡の竄入したものであらうとする考が、前述の木村氏・中根氏などによつて懷かれ、池田氏もこれに賛して

現存の「紫式部日記」は、日記と書簡の二部に分けて見るべきだと主張して居られる。この考は日記の錯簡説、並びに原形散佚説の有力な論據である。しかしもし本書がその成立に於て日次の日記でなくて、回想的のものであり、且初から特定の讀者を豫想して書かれたものであるとすれば、途中に書簡風の文致が混つてゐても必らずしも竄入とは考へられず、隨つて又一部殘存説の根據も薄弱になるわけである。星加氏はそれらの點について具體的な例證をあげて、本書が字義通りの日記ではなく、全部寛弘七年一月以後に於て回想的に書かれたものであり、且始から、對者を豫想して書かれたものであるとして、その現存本原形説の論據としてゐる。しかし日記體と書簡體との連続の不自然であることは争はれないところで、星加氏の研究はまだその點の説明が十分でない。最近山口かつ子は雑誌「文學」に於て、宮内省圖書寮藏の「異本紫式部集」と「紫式部日記歌」とを精査した結果に本づき、本書の殘缺本である所以を論じて居られる。なほ桂泰藏氏の「文學」に紹介された「別本紫式部日記」は「紫日記」の名で傳へられる後人の偽作であるが、源氏物語の著作事情その他式部に關する傳説を考へる上の参考となるものである。

古寫本

○池田龜鑑氏藏本（寛文元年寫・明曆二年寫・天和二年寫の三本があるといふ）

○彰考館本（寛文八年寫・寛文十一年寫の二本がある）

○神宮文庫本（天明四年寫） ○南英文庫本（嘉永三年寫）

これらの本は何れも室町後期の伏見宮邦高親王白筆本を轉寫した本の系統で、現在この系統以外の本は知られない。

第二篇 平安時代（隨筆・日記・紀行）

三〇七

諸本



古版本

○扶桑拾葉集本 (卷四) ○群書類従本 (第三百二十一卷)

活版本

○群書類従 (第十一輯) ○扶桑拾葉集  
○國文大觀 (日記草子部) ○國文叢書 (第六卷) ○新釋日本文學叢書 (第五卷)  
○日本文學大系(第三卷) ○有朋堂文庫 平安朝日記集 ○日本古典全集 (第二期)  
○岩波文庫

參考書

註釋書・研究書

○紫式部日記傍註 二卷 壺井義知 享保十四年  
○紫式部日記解 五卷 足立稻直 文政二年成 (國文註釋全書)  
註書中最も詳密なもの。本文は傍註本・契沖校本・橋本稻彦校本・群書類従本・榮華物語「初花卷」等によつて校合し、本文を改めた場合には、その由を斷つてゐる。  
○紫式部日記釋 四卷 清水宣昭 天保五年 (國文學註釋叢書)  
○紫式部日記講義 一冊 長田致孝 明治二十七年  
○紫式部日記講義 一冊 三木五百枝 明治三十二年

○新譯紫式部日記 一冊 與謝野晶子 大正五年

○紫式部日記精解 一冊 關根正直 大正十三年

○紫式部日記全釋 一冊 小室由三 昭和五年

○Diaries of Court Ladies of Old Japan, translated by Annie Shepley Onori & Kochi Doi.

○源語及び日記より見たる紫式部 手塚昇 (國語と國文學大正十四年四月)

○宮廷女流日記文學 一冊 池田龜鑑 昭和二年 (國文學研究叢書)

○紫式部日記考 星加宗一 昭和三年 (日本古典全集本附録)

○日記に表はれたる紫式部の苦惱 岡田稔 (鹿兒島日本文學昭和六年七月)

○紫式部日記に表はれた服装 中島幸枝 (風俗研究昭和六年八・九月)

○紫式部日記は殘缺なるべし 山口たけ子 (文學昭和八年四月)

○別本紫式部日記と式部傳説 桂泰藏 (文學昭和八年四月)

○紫式部日記と更級日記 西下經一 (國語と國文學昭和八年十月)

關係書

○紫式部日記繪卷 殘闕 (秋元子爵家・蜂須賀侯爵家・久松子爵家に各一卷分藏)

○紫式部日記歌 寫一卷 (宮内省圖書寮・内閣文庫に各一本所藏。岩波文庫本に附載)

第二篇 平安時代 (隨筆・日記・紀行)

「紫式部日記」中の歌と「異本赤染衛門集」中の歌とが誤つて合されたものである。

○評釋紫女手簡 一冊 木村架空 明治三十二年

◎高光日記 (たかみつにつき) 一卷

普通「多武峯少將物語」と呼ばれるが、「本朝書籍目録」には假名部に「高光日記一卷」と見えてゐる。後出「篁日記」などと共に實録物語と見るべきものであるが、今は便宜上日記の部に入れる。

この作の主人公藤原高光は師輔の八男で、醍醐天皇の皇女雅子内親王を母として生れ、幼名をまぢをさ君といつた。村上天皇の天徳四年右近衛少將に任じ、同五年(應和元年)從五位上に叙せられ備後権介を兼ねたが、同年十二月五日、「かくばかりへがたく見ゆる世の中にうらやましくもすめる月かな」の詠を残し、妻・幼女・妹等を捨てて遽かに比叡山に上り、横川の増賀上人について薙髮し、法名を如覺と稱した。翌應和二年八月には多武峯に移り、草庵を結んで極樂房といひ、正暦五年三月十日に入寂した(尊卑分脈・三十六歌仙傳・榮華物語・多武峯略記)。いはゆる三十六歌仙の一人で、歌人として名があり、家集「高光集」の外、その歌は拾遺・新古今・新勅撰・續後撰・續古今・玉葉・續千載・續後拾遺・新千載・新拾遺・新後拾遺の諸集に採られてゐる。

本書は高光の出家を中心として、夫婦・親子・兄弟の恩愛悲歎を一箇の歌物語の體裁によつて記したもので、比叡山に上る前後のことから、翌年の夏頃までのことが書かれてゐるが、高光を第三人稱で表はし、敬語を

名稱

主人公

内容

作者  
成立者

語本

参考書

内容

用ひてゐるから、高光自身の日記でないことは明らかである。「榮華物語」の月宴の巻に高光の出家のことを記して、終に「これは物語につくりて、世にあるやうにぞ聞ゆめる。あはれなることにこのことをぞ世にはいふ」とあるのは、本書を指すものであらう。

作者も成立年代も明らかでないが、高光の歿後に、近侍の者が書き綴つたものであらうといはれてゐる。

版本

○群書類従 第四百八十二卷(活版本第十七輯) ○日本文學全書 (第七編)

○國文大觀 (第四卷)

註釋書・研究書

○多武峯少將物語考證 一卷 丸林孝之 文政七年成 (國文註釋全書)

本文を掲げ、考證を主とする頭註を施したのも。本文は群書類従本と岸本由豆流の藏本とを以て校合し、行間にその異同を擧げてある。

○多武峯少將物語の文學史的意義 岩永 昨 (國語と國文學昭和六年十一月)

◎更級日記 (さらしなにつき) 一卷 菅原孝標女

著者の少女時代から、五十一歳の頃まで約四十年間に亘る經歷を回想的に記した自傳で、寛仁四年十三歳の秋に父の任地であつた上總から上京することに筆を起し、その道中の有様、歸京後家庭内における色々の

第二篇 平安時代 (隨筆・日記・紀行)

特性

出来事や経験、後朱雀天皇第三皇女祐子内親王家への宮仕、橘俊通との結婚後に於ける生活等を叙し、康平元年夫俊通に死別して、一子仲俊を養育しながら、彌陀の來迎に頼をかけて靜かにしめやかな餘生を送ることに終つてゐる。

著者は熱烈な文藝の愛好者で、文中所々に物語に關する記事があり、又夢に關する記事が十一もある。全體としてこれを見れば、一個の夢見る人であつた著者の空想的・主情的な心が、現實の生活に觸れて、いろいろな姿をとるに至つた経緯が反省的に書かれたもので、過去の自分の姿に強い愛着を感じ、これをいたはりながらも、それに否定的な眼を向けてゐる點からいへば一種の懺悔録であり、夢幻的なセンチメンタリズムが、だんだん宗教的信仰に轉向して行つた経路を書いたものとしては、一個の魂の發展史とも見られるのである。

名稱

「更級日記」といふ書名については諸説があるが、終りの部分に、作者の佗住居を六番目の甥が訪れたので「月も出でて間にくれたるをばすてになにとてこよひたづね來つらむ」といふ歌を詠んだ記事があり、その歌の「をばすて」に縁のある「更級」をとつて名づけたとするのが通説になつてゐる。「大和物語」に、信濃國更級にあつたこととしてをば捨傳説を載せ、をばを捨てた男の歌として「我が心なぐさめかねつさらしなやをばすて山に照る月を見て」といふ歌を記してある。これらの故事にちなんで、「をばすての日記」の意味を含めて「更級日記」といつたのだらうといふのである。

錯簡

本書の流布原本は現在帝室の御物本たる藤原定家書寫の本であるが、この本はいつの頃か綴ぢ目の破れた

のを修理する際に、複雑な綴ぢ誤りを生じ、本文の接續を甚だしく混亂させるに至つた。それをそのまま轉寫して流布することになつたので、世上の本は皆錯簡を持つてゐた。江戸時代の初期からこれについて考へた學者がいろいろあつたが、完全に正しい姿に復することが出来なかつた。然るに大正十三年に至り、玉井幸助氏が佐佐木信綱博士の助力で、前記の御物本を拜觀し、詳細に調査した結果、錯簡のもとが同本の綴ぢ誤りにあることを確かめ、これを訂正して始めて原本の形に復歸させることが出来たのである。玉井氏の「錯簡考」にはその詳細が記されてゐる。

諸本

古寫本

- 帝室御物本 一卷 藤原定家寫
- 宮内省圖書寮藏御物本模寫本
- 彰考館本
- 南葵文庫藏齋藤彦磨舊藏本
- 同伴直方舊藏本
- 帝國圖書館本
- 宮内省圖書寮一本
- 松井簡治博士藏脇坂安元舊藏本
- 佐佐木信綱博士藏本

古版本

これらの諸本は皆御物本から出たもので、御物本以前または以外の本の系統と見られる傳本はまだ發見されない。

- 扶桑拾葉集本 (卷六)
- 群書類從本 (第三百二十八卷)
- 元祿十七年輸入本
- 西門蘭溪校訂本 天保五年

活版本

- 群書類従 (第十一輯)
  - 扶桑拾葉集
  - 國文大觀 (日記草子部)
  - 國文叢書 (第十二卷)
  - 有朋堂文庫「平安朝日記集」
  - 新釋日本文學叢書 (第五卷)
  - 日本文學大系 (第三卷)
  - 日本古典全集 (第二期)
- 以上のうち最後の二つ以外は皆御物本の錯簡に本づく誤を持つてゐる。

参考書

註釋書・研究書

- 更級日記考證 四卷 小山田與清
- 校註更級日記 一冊 佐佐木信綱 明治二十五年
- 更級日記講義 一冊 大塚彦太郎 明治三十二年
- 更級日記略解 一冊 關根正直 明治三十三年
- 更級日記錯簡考 一冊 玉井幸助 大正十四年
- 更級日記新註 一冊 玉井幸助 大正十五年
- 更級日記詳釋 一冊 宮田和一郎 昭和六年
- Diaries of Court Ladies of Old Japan, translated by Annie Shepley Omori & Kochi Doi. 1920.
- 更級日記詞章研究 白石勉 (國語國文の研究十四・十七・十九・二十・廿七)

- 更級日記の著者 玉井幸助 (國語教育八ノ十二)
- 濱松中納言と更級日記 齋藤清衛 (國語教育十三ノ六)
- 更級日記内容の一解釋 佐山濟 (國語と國文學昭和六年九月)
- 更級日記作者の靈生活 市村平 (國文學誌昭和六年十二月)
- 本文批評の史的考察及び批評法 (更級日記) 金子岩吉 (國漢研究昭和六年八月)
- 更級日記に於ける浪漫思想の考察 大内義郎 (國漢研究昭和七年二月)
- 更級日記の夢に現れたる二元的欲求の相尅 谷亮平 (歴史と國文學昭和七年七月)
- ◎篁日記 (たかむらにつき) 一卷

名稱

内容

「小野篁集」または「篁物語」として傳へられてゐるが、「河海抄」「花鳥餘情」には「篁日記」と見えてゐる。小野篁に關した歌物語で、「高光日記」(多武峯少將物語)などと同様の性質を持つたものであるが、便宜上ここに入れることにした。

小野篁が大學の學生であつた頃、異腹の妹に書を教へてゐるうちに相思の仲となつたのを、母親に妨げられ妹は監禁の身となり、魂となつて男の身に添はうと決心して、食を絶つて死ぬに至つた顛末と、その後數年を経て、篁が時の右大臣の三の君の婿になり、榮達した次第とを記したもので、書中に三十二首の贈答の

和歌がある。「古今集」卷十六に妹の死を悼んだ墓の歌があり、また「本朝文粹」卷七には右大臣の女を妻に望んだ墓の文があるが、それらによつて考へれば、本書の記事は大體事實に本づいて書かれたもので、或は今傳はらぬ墓の歌集の如きものを潤色して成つたのかとも思はれるが、書中の和歌は果して墓らの手に成つたものかどうか疑はしむ。

作者は全く分らない。

製作年代についても、平安時代中期以前とするもの、以後とするもの、末期とするものなど、人によつてまちまちのやうである。元來本書は最近までその存在が知られず、昭和二年後藤丹治氏によつて、宮内省圖書寮本が紹介せられて、はじめて學界の注意を引くに至つたものであるから、すべて今後の研究に俟つところが多いのである。

古寫本

○宮内省圖書寮藏「小野篁集」一卷 ○彰考館藏「墓物語」一卷 ○同一本 一卷

版 本

○「文學」昭和八年四月創刊號附錄

鎌倉時代の古寫本の影寫かといはれる彰考館所藏の「墓物語」の一本を底本としたもので、本書の最初の刊行である。

解説書

○新たに知られた小野篁日記 後藤丹治（國語と國文學昭和二年十二月）

参考書

諸本

作者年代

なほ「日本文學大辭典」小野篁の項及び池田龜藏氏の岩波講座「日本文學書目解説平安時代下」にも本書の解説がある。

◎成尋阿闍梨母集（じゃうじんあざりははのしふ） 二卷 成尋阿闍梨母

現在知られてゐる唯一の傳本たる宮内省圖書寮本は「成尋阿闍梨母集」と題してゐるが、實は日記で、「成尋阿闍梨母日記」といふを可とする。但し原の書名の有無は明らかでない。

成尋阿闍梨が延久四年に入宋して、あとに残された母が、八十餘歳の老齡で子に別れた悲歎の情を書き列ねたもので、記事は後冷泉天皇の治暦三年十月、關白頼通の別業宇治平等院に天皇の行幸があつた頃のことから、後三條天皇の延久五年五月までのことに及び、成尋の入宋を中心としてその前後七年に亘つてゐるが、内容は愛兒を思ふ切ない母の情で一貫してゐる。書中に百七十餘首の和歌を含んでゐる。

作者成尋阿闍梨の母は歌人として名のあつた人で、千載・新古今・新勅撰・續後撰・續後拾遺・新拾遺・新後拾遺・新續古今の諸集に歌が各一首づつ採られてゐる。なほ成尋は「元亨釋書」によれば、姓は藤原氏、石藏の文慶について密教を修めた人で、渡宋の翌年（延久五年、宋神宗の熙寧六年）、早天に雨を祈つて善慧大師の號をおくられ、高僧の譽を得たが、歸朝するに及ばず、彼の地に歿した。

因みに本書は、昭和五年に佐佐木信綱博士が宮内省圖書寮本を紹介されるまで、久しく世に忘れられてゐたものである。

諸本

古寫本

○宮内省圖書寮本 二卷(一冊) 近世初期書寫  
現在これ以外の本は發見されてゐない。

活版本

○内閣博士史學論叢 一冊 昭和五年  
頌壽記念  
書中に佐佐木博士の紹介と共に本文が収めてある。

○「文學」昭和八年五月・六月號

五月號に本書の上巻を、六月號に下巻を附載してある。

参考書

解説書

○成尋阿闍梨母日記解説 佐佐木信綱 昭和五年

(内閣博士史學論叢)  
頌壽記念

なほ「日本文學大辭典」西下經一氏の「平安朝の日記紀行」(岩波講座)・池田龜鑑氏の「日本文學書目解説平安時代下」  
(岩波講座)にも解説がある。

◎讚岐典侍日記(さぬきのすけのにつき) 二卷 讚岐典侍

上巻は嘉承二年六月堀河天皇の御不例に筆を起して、七月十九日崩御し給ふまでのことを詳細に記し、下巻は鳥羽天皇の御即位の前後から翌天仁元年十一月大嘗會の頃までのことを記した日記である。

内容

作者

作者讚岐典侍は讚岐守藤原顯綱の女で、名を長子といひ、康和三年十二月晦日堀河天皇の典侍となり、奉仕すること六年、天皇崩御の後には、鳥羽天皇の典侍として約十年間奉仕したが、致仕の後元永の初年に發狂したと傳へられる(長秋記)。從來この典侍を、源頼政の女で二條院の典侍となり、「沖の石の讚岐」と呼ばれた女と混同する説があつたが、それは明かに誤である。なほ池田龜鑑氏の「宮廷女流日記文學」には、長子の姉で伊豫守敦家に嫁し、敦兼を生んで、堀河天皇の乳母となり、後讚岐典侍と呼ばれた兼子を、本書の作者に擬してゐるが、今は妹長子を作者とする説に従つた(玉井幸助氏「讚岐典侍日記の作者について」参照)。

年代

製作年代は明らかでないが、池田龜鑑氏は作中の最終記事の後二三年の間に、當時のことを追想して書いたものと見て居られる。

特性

本書には、作者の深く愛慕し奉つた天皇の御不例並びに崩御に遭遇して得た嚴肅な經驗が敬虔な態度で表現されて居り、そこに個人的心境の特異性が見られない代り、君臣の情誼と、君を失つたものの悲痛が全篇に溢れてゐる。而してまた諒闇の前後に於ける宮中の有様を詳細に描いたものとして、史料的にも多くの價値を持つてゐるのである。但し本書の傳本には、誤脱・竄入などがあつて、完全なものと姿を可なり毀してゐるらしい。

諸本

古寫本

○神宮文庫本 ○住吉文庫本 ○彰考館本 ○南葵文庫本

皆同系統で、卷末に寛永十六年、仙洞御本を拜借して書寫校合した山の秘書郎の識語を持つてゐる。

第二篇 平安時代 (隨筆・日記・紀行)

版 本

- 群書類従 第三百二十二卷 (活版本第十一輯)
- 日本文學全書 (第六編)
- 國文大觀 (日記草子部)
- 有朋堂文庫 「平安朝日記集」

参考書

註釋書・研究書

- 讃岐典侍日記通釋 玉井幸助 (國語教育昭和七年三月—昭和八年二月)
- 讃岐典侍日記標目 寫一卷 著者未詳 (帝國圖書館藏)
- 宮廷女流日記文學 一冊 池田龜鑑 昭和二年 (國文學研究叢書)
- 讃岐典侍日記 萩野由之 (國學院雜誌一ノ二)
- 讃岐典侍日記の作者について 櫻井秀 (わか竹十)
- 讃岐典侍日記の印象 玉井幸助 (國語教育十二ノ六)
- 讃岐典侍日記の作者について 玉井幸助 (史學雜誌四十ノ九)
- 讃岐典侍日記中の人物 玉井幸助 (史學雜誌四十一ノ十一)

### 第三篇 鎌倉室町時代

#### 第一 和歌

##### 〔一〕勅撰歌集

##### ◎新古今和歌集 (しんこきんわかしよ) 二十卷 藤原定家等撰

成立

勅撰歌集の第八。和歌史上「萬葉集」「古今集」と共に最も重んぜられる歌集である。「千載集」の撰集後十餘年を経て、土御門天皇の建仁元年七月廿七日に後鳥羽院が久しく中絶してゐた和歌所を設置し給ひ、同年十一月三日、寄人參議右衛門督源通具・大藏卿藤原有家・左近中將藤原定家・前上總介藤原家隆・左近少將藤原雅經・沙彌寂蓮(翌年歿)の六人に、上古以來の和歌を撰進すべき由の院宣があり、通具以下の撰歌に院の御取捨が加はつて、元久三年三月一先づ完成して、同月廿六日竟宴が行はれたが、その後も後鳥羽院の思召により、數年に互つてしばしば切繼(撰歌の訂正加除)が行はれ、承元四年四月廿五日に至つて、重ねて修正本の披露があつた。(撰集の事情・過程などについては「明月記」に多くの記事がある)。しかし切繼はその後にも行はれたらしく、和歌所における公の事業としてこの集の最後の決定を見たのは、建保四年の頃であつたらしい。

いはゆる家長本はその時の筆寫である。その後間もなく承久の亂が起り、後鳥羽院は隱岐に遷幸になつたが、院は彼の地でなほこの集に改定を加へ、親ら跋文を添へ給うた。これがいはゆる隱岐本である。集名はじめ「續古今」といふ説があつたのに對し、定家は「後撰集」以後の六集を隔てて「續」とするの不可を説いて、「新勅撰古今」説を提出したが、評定の結果「新古今」と定められたといふ。新たにつくられた古今集の意味であらう。

本集は二十卷を、春上下・夏・秋上下・冬・賀・哀傷・離別・釋旅・戀一―五・雜上中下・釋教に部立し、卷頭に藤原良經作の假名序、卷末に日野親經作の同内容の眞名序を具へ、整然たる組織を持つてゐる。歌數は「八雲御抄」「拾芥抄」には千九百七十八首、「勅撰次第一本」には千九百七十四首と見えてゐるが、成立過程が前記の如くであるから、諸本によつて一様でない。

集中に多くの歌を採られた歌人は、古代では貫之(三十二首)・和泉式部(二十五首)・人麿(二十三首)など、當代では西行(九十四首)・慈圓(九十一首)・良經(七十九首)・俊成(七十二首)・式子内親王(四十九首)・定家(四十六首)・家隆(四十二首)・寂蓮(三十五首)・後鳥羽院(三十四首)・俊成女(二十五首)・雅經(二十二首)・有家(十九首)・秀能(十七首)・二條院讚岐(十六首)・後鳥羽院宮内卿(十五首)などである。

序文に、「古今集」以後の勅選集に入つた歌は採らず、「萬葉集」の歌はこれを載せる由を記してゐるが、概して當代歌人の作を多く採つてゐるのが特徴である。

本集の歌風については諸家の説があるが、格調・修辭の上では、一句切・三句切・體言止の歌が多く、歌詞優

名稱

組織

歌人

特性

歌風

麗巧緻で韻律的諧調を重んじ、取材の上では本歌取の歌が多く、表現法の上では、繪畫的・象徴的に詠出したものが多いことが特色として挙げられる。

註(1) 源 通 具 内大臣通親の子、藤原俊成の女姉。參議・右衛門督・中宮權大夫・藏人頭などを經て、正二位

大納言に至る。嘉祿三年(安貞元年)歿、年五十七。新古今以下の諸勅撰集(續千載・風雅を除く)に歌が採られてゐるが、歌人としてはさまで傑出してゐなかつた。

(2) 藤原有家 顯輔の孫、刑部卿重家の子、清輔・顯昭の甥、顯家の弟。少納言・中務權大輔を經て、大藏卿從三位に至る。建保三年出家、翌四年歿、年六十二。千載集以下の各勅撰集に歌がある。

(3) 藤原定家 皇太后太夫俊成の子。左近衛中將・參議・民部卿などを經て正二位權中納言に至る。京極に邸宅があつたので、京極中納言または京極黃門と呼ばれ、民部卿であつたために戸部尙書とも稱した。天福元年出家(法號明靜)、仁治二年歿、年八十。「新古今集」の撰修にたづさはつた外、單獨で「新勅撰集」を撰進した。著書には、「近代秀歌」「毎月抄」「詠歌大概」「顯註密勸」「辭案抄」「三代集之間事」などの歌學書、日記「明月記」

家集「拾遺愚草」「同員外」などがあり、また古典の筆寫考勸に力を注ぎ、歌人・歌學者・古典考勸學者として偉大な功績を遺してゐる。歌は家集、諸種の百首歌、歌合などの外、千載集以下の各勅撰集に採られてゐる。

(4) 藤原家隆 兼輔八世の孫、權中納言光隆の子、定長(寂蓮)の女姉。越中守兼侍從・上總介などを經て、宮内卿從二位に至る。通稱壬生二品。嘉祿二年出家(法號佛生)、翌三年歿、年八十。歌人として定家と並稱せられ、共に後鳥羽院の珠麗を蒙つた。作歌六萬餘と傳へられる。家集「壬二集」の外「家隆公百番自歌合」



(群書類従巻二二〇)・朗詠百首(群書類従巻一七五)などの著があり、「千載集」以下各勅撰集に歌がある。

(5) 藤原雅經 頼經の子、宗長の弟、飛鳥井家の祖。越前介・左近衛少將・同中將などを經て、從三位參議に至る。承久三年没、年五十二。和歌と共に蹴鞠の技に長じた。家集、明日香井集(二卷)があり、新古今以下の各勅撰集に歌がある。

(6) 寂 蓮 「千載和歌集」の條参照。

(7) 慈 圓 慈鎮和尚、「拾玉集」の條参照。

(8) 良 經 「月清集」の條参照。

(9) 式子内親王 後白河院の皇女。御母は大納言藤原季成の女高倉三位局成子。平治元年賀茂齋院に立ち給ひ、大炊御門齋院とも、齋齋院ともいふ。嘉應元年齋院を辭し、建久八年御出家(法號如法)、建仁元年正月薨、御年五十ばかり。當時女流歌人の第一人者であらせられた。家集があり、「千載集」以下各勅撰集に歌がある。

(10) 後鳥羽院 高倉天皇の皇子、第八十二代の天皇、御在位十三年。建久九年御讓位、院政を聽き給うたが、承久三年の亂により隱岐島に遷幸、御在島十九年、延應元年二月二十二日崩御。御年六十。御多藝で、特に歌道に勝れさせ給うた。「新古今集」の勅撰の外、「後鳥羽院御口傳」「後鳥羽院御記」「後鳥羽院宸記」などの御著作があり、諸種の百首歌・歌合、新古今以下の諸勅撰集(新勅撰を除く)に御製があり、御家集もある。

(11) 藤原秀能 河内守秀宗の子。和歌所寄人・出羽守正五位上。承久の亂後、熊野に出家して如願と號し、仁治元年五月没、年五十七。新古今以下の各勅撰集に歌がある。

(12) 二條院讀妓 源三位頼政の女、二條院の女房。長治二年没、享年未詳。「わが袖は汐干に見えぬ沖の石の人こそ知らねかわくまもなし」の詠によつて、「沖の石の讀妓」といはれた。家集があり、「千載集」以下の諸勅撰集(風雅集を除く)に歌がある。

(13) 後鳥羽院宮内卿 右京大夫源師光の女、後鳥羽院の女房。女流歌人として俊成の女と並稱せられ、建仁元年の千五百番歌合にも作者に列せられた。建永二年(承元元年)五月九日に若くして没した。新古今以下の諸勅撰集(續後撰・續拾遺・續千載を除く)に歌がある。

諸本

本集にはいはゆる流布本の外に數種の異本が傳はつて居り、それぞれ歌數や歌詞に異同を持つてゐるが、それら諸本の由來や相互の關係はまだ十分明らかでない。撰修の當時、「後鳥羽院宸翰本」「家長本」「御室本」「梶井宮本」「壬生二位自筆本」「京極中納言入道自筆本」などの諸本があつたことも、傳本の奥書によつて知られるが、原本はいづれも傳はらない。現存諸本は、徳本正俊氏の「家長本新古今和歌集の形態」によれば、家長本(建保四年十二月に和歌所開闢源家長の書寫した本の傳本)及びそれと同一系統のものと、家長本以前の系統のものに二大別され、下記柳瀬福市氏藏本・宮内省圖書寮藏合點本・高野辰之博士藏親行本などは前者に屬し、前田侯爵家本・宮内省圖書寮藏烏丸本などは後者に屬するものであるといふ。なほ徳本氏の前記論文には各本の比較異同が紹介されてゐる。

古寫本

○柳瀬福市氏藏本 二冊

第三篇 鎌倉室町時代 (和歌)

享祿五年九月、二條家流の本に今河五郎氏輝所藏の後鳥羽院宸翰と傳へる本を以て校合を加へた山の泰昭の奥書がある。歌の上に撰歌者の名があり、また後鳥羽院が隠岐で改修を加へられた面目をよく傳へてゐるといはれる。三矢・武田・折口三氏校訂の「隠岐本新古今和歌集」は本書を底本として刊行したものである。

○宮内省圖書寮藏合點本 缺本三冊

卷十六以下を缺く零本。奥書によればこの本は、阿闍梨圓嘉が御室御本（定家が書寫して御室に献じた本）によつて書寫し、延應元年に家隆自筆の九條前内大臣家本を以て校合し、更に寛元元年六月十四日に、定家筆本を以て校合した本の轉寫本らしく、書寫年代は江戸時代初期かといはれる。歌の上に撰歌者の略號があり、また後鳥羽院が隠岐で加へられた合點を持つてゐるので、これも隠岐本と呼ばれてゐる。

○高野辰之博士藏親行本 ○松田武夫氏藏隱岐本

○前田侯爵家本 四冊 傳二條爲親寫

撰歌者の略號並びに切繼の歌六首を存してゐる。尊經閣叢刊の複製が出た。

○宮内省圖書寮藏烏丸本 二冊 享保十七年烏丸光榮寫

撰歌者の略號があり、切繼の歌十二首を存してゐる。藤村博士編「新古今和歌集」は本書を底本としたものである。

○佐佐木信綱博士藏親長筆本 一冊 文明四年寫

甘露寺親長が勾當内侍本を以て書寫し、校合を加へた本である。

○佐佐木信綱博士藏中山家舊藏本 二冊

宮内省圖書寮藏烏丸本の原本かといふ。

○德本正俊氏藏家長本 二冊 室町前期寫

建保四年家長の假名及び眞名の奥書があり、歌に撰者名の略號なく、切繼の歌の痕跡もない。歌数は千九百七十六首であるといふ。

○彌富破摩雄氏藏傳爲氏筆本 ○同氏藏堯孝法師筆本

古 版 本

○正保四年本 四冊 ○承應三年本 四冊 ○無刊記本 二冊 ○延寶二年本 二冊

○元祿九年本 四冊

活 版 本

○二十一代集 ○國歌大觀 ○國歌大系（第四卷） ○日本歌學全書（第七編）

○和歌叢書（第四卷） ○國民文庫「八代集下」 ○有朋堂文庫（第一輯）

○日本古典全集（第三期） ○岩波文庫

○隱岐本新古今和歌集 一冊 三矢重松・折口信夫・武田祐吉共編 昭和二年

柳瀬氏藏本を底本とし、他本を以て校合したもの。巻頭に編者三氏の研究論文（後出）がある。

○新古今和歌集 一冊 藤村 作編 昭和三年

宮内省圖書寮藏烏丸本を底本として刊行したもの。

註釋書

- 新古今集新抄 四卷 東 常 縁 慶長二年成・寶永八年 (名著文庫)  
細川幽齋の補筆したもので、「新古今集開書」とも「四巻抄」ともいふ。集中の歌を抜抄して註釋したもの。
- 新古今集増抄 二十卷 加藤 盤 齋 寛文三年  
前者の増抄で、一首毎に簡単な評釋を加へてゐる。
- 新古今集抄 十卷 北村 季 吟 天和二年 (活版本二十一代集・国歌大系)  
「八代集抄」中巻四十から五十までに收められ、一首毎に要を得た頭註がついてゐて、通俗的だが便利なるものである。
- 新古今集美濃家苞 五卷 本居 宣 長 寛政六年 (本居宣長全集)  
宣長が門弟美濃の大矢重門の爲に新古今集を説いたものをまとめ、その歸國に際し家苞として與へたもの。次の折添はその補足で新勅撰以下の諸勅撰集の歌を採録して評釋したものがある。
- 美濃の家苞折添 三卷 本居 宣 長 寛政九年 (本居宣長全集)
- 尾張廼家苞 九卷 石原 正 明 文政二年 (國文註釋全書)  
美濃家苞の説を評論し、各首を評釋したもの。
- 新古今集もろかづら 一卷 市岡 猛 彦 文政八年
- 科野の家苞 一卷 千葉 葛 野 嘉永三年成
- 美濃尾張家苞くらべ 二冊 林 重 義 明治三十五年

美濃家苞と尾張家苞の説を並記して批判したもの。批判そのものは大して参考にもならぬが、兩説が見られるので便利である。

- 新古今集註解 一冊 飯田 永 夫 明治三十九年
- 新古今和歌集詳解 七冊 鹽井 正 男 明治四十一年完  
明治三十年から刊行して同四十一年に完了、更に大正十四年大町芳衛の校訂で上下二冊の改訂版が出てゐる。明治以後の最も詳密な全釋である。
- 新古今集遠鏡 一冊 鴻巣 盛 廣 明治四十三年  
宣長の「古今集遠鏡」に倣つて一首毎に口譯を施したもの。
- 古今と新古今 一冊 尾上 八 郎 大正十一年  
兩集歌風の特徴を説き、これを例證する爲に代表作を抄出評釋したもの。
- 新古今集選釋 一冊 佐佐木 信 綱 大正十二年
- 新古今和歌集評釋 二冊 窪田 空 穂 昭和七年・八年  
昭和七年、四季の部の評釋を出し、同八年戀の部以下の評釋を下巻として出して完結した。一首毎に語釋・通釋・評を施し、必要に応じて「評、又」の項を設け、従来の諸註の再吟味をしてゐる。これまでの註釋書中最も完備したもの。
- 新古今和歌集の鑑賞 一冊 川 田 順 昭和七年
- 新古今集講義 佐成謙 太郎 (國文學講座)

- 新古今集抄解 太田 水穂 (湖音大正十四年一月より)
- 新古今集研究 尾上 八郎・石井直三郎 (水豊大正十五年一月—昭和三年十月)  
上田 英夫・兒山 信一 (水豊大正十五年一月—昭和三年十月)
- 新古今集私抄 石井直三郎 (國の花昭和二年一月より)
- 新古今集夏の歌 稻垣 浩 (白樺昭和二年六月)
- 新古今集評釋 石井直三郎 (國漢研究昭和四年六月より)
- 新古今集講義 石井直三郎 (短歌講座第五卷)
- 新古今の研究 吉澤義則他十四氏 (帯木昭和七年二月より)

研究書

- 新古今和歌集研究 松浦 貞俊 (日本文學講座)
  - 新古今的なるものの範圍 風巻景次郎 (岩波講座日本文學)
  - 家長本新古今和歌集の形態 徳本 正俊 (岩波講座日本文學)
  - 新古今集の研究 一冊 水豊社編 昭和五年
- 雜誌「水豊」の昭和五年四月特別號を單行本の形にしたもので、左の諸研究を収めてゐる。
- 新古今和歌集概説 石井直三郎
  - 新古今集時代の文學思潮 久松潜一
  - 新古今集の歌風 兒山信一
  - 新古今集の成立 松浦貞俊
  - 新古今集に於ける萬葉歌人の歌 上田英夫
  - 新古今和

歌集の異本に就いて

武田祐吉 ○新古今集と現歌壇 山崎敏夫 ○修辭から觀た新古今 尾上柴舟  
右の外、新古今時代の代表的歌人、俊成・慈鎮・定家・家隆・良經・實朝・式子内親王等に關する論文その他が掲載されてゐる。

- 新古今集各歌の撰定 三矢 重松 (隱岐本新古今和歌集)
- 新古今和歌集の成立とその諸傳本 武田 祐吉 (隱岐本新古今和歌集)
- 新古今集及び隱岐本の文學史的價值 折口 信夫 (隱岐本新古今和歌集)
- 新古今和歌集の成立に就いて 山崎 敏夫 (國語國文の研究十一・十二)
- 新古今集選述の態度に就いて 木 下 仙 (國語國文の研究十六)
- 新古今集概観 加藤 順三 (月刊日本文學昭和六年九月)
- 新古今集に於ける「本歌取」について 松浦 貞俊 (月刊日本文學昭和六年九月)
- 新古今集と具平親王 木本 通房 (湖音昭和六年十一月)
- 新古今集編纂にはたらいた意識 風巻景次郎 (水豊昭和七年三—七月)
- 新古今和歌集 石井直三郎 (國語と國文學昭和七年十月)

關係書

- 明月記

藤原定家 (圖書刊行會第二期本)

◎源家長日記

源 家 長 (續々群書類從歌文部)

◎新勅撰和歌集 (しんちよくせんわかしふ) 二十卷 藤 原 定 家 撰

勅撰歌集の第九。後堀河天皇の勅によつて藤原定家の撰進したもの。序文に「貞永元年十月二日これを奏す」とあるが、奉勅並びに奏覽の年時について異説があり、「拾芥抄」勅撰次第「一本は貞永元年六月十三日奉勅、天福二年奏覽とし、「勅撰次第」別本は、貞應元年十二月奉勅とし、「増鏡」藤ごろもの巻、貞永元年の所には「いと疾く十月二日そうせられけり、一とせのうちに奏せられたる、いとありがたくこそ」と記してゐる。吉田令世は「歴代和歌勅撰考」に、これらの相違について考へ、「貞永元年十月二日に奏す」とあるは序と目録ばかりを奏せられたること拾芥抄の如くにて、全部奏覽は勅撰次第の如く天福二年なり」といつてゐる。「明月記」天福二年八月七日の記事によれば、本集は奏覽後間もなく、宮中に於て焼失したことが知られ、また「百鍊鈔」文暦元年十一月九日の條には、集中の和歌の取捨が行はれたことが見えてゐる。これらによつて奏覽後に訂正があつたことが考へられる。

撰者藤原定家作の假名序があり、歌数は「勅撰次第」には千三百五十三首、「拾芥抄」には千三百七十一首外短歌四首とあるが、国歌大観本には短歌千三百四十一首に長歌その他の雜體を合せて、都合千三百七十六首を載せてゐる。部立は二十巻を、春上下・夏・秋上下・冬・賀・壽・神祇・釋教・戀一・二・三・四・雜一・二・三・四・五に分けてあり、戀部・雜部の大きいこと、離別・哀傷部を設けないこと、雜五に、物名・くつかうぶり・折句・同じ文字なき歌などの遊戯的な歌を集めたことなどが部立の上の特徴と見られる。

歌を多く採られた歌人は、家隆(四十三首)・俊成(三十五首)・良經(三十首)・公經(三十首)・道家(二十五首)・慈圓(二十四首)・雅經(二十首)・實朝(十九首)・相模(十七首)・實氏(十六首)・定家(十五首)・殷富門院大輔(十五首)等である。公經<sup>(1)</sup>・道家<sup>(2)</sup>・實朝<sup>(3)</sup>・實氏<sup>(4)</sup>など、鎌倉幕府に關係あるものの歌が多く採られてゐること、後鳥羽・土御門・順徳三院の御歌がないことなどが注意される。武人の作を多く収めたために、「宇治川集」と異名されたといふ傳へがある(異本井蛙抄)。異名は「武士の八十氏川」に本づいたのである。

註(1) 公 經 藤原實宗の子。從一位太政大臣。晩年刺髮して覺勝と號した。寛元二年八月廿九日歿、年七十四。西園寺入道とも今出川入道ともいひ、時人は賴朝大將と稱した。妻は源頼朝の縁者である。新古今以下の各勅撰集に歌がある。

(2) 道 家 藤原良經の子。土御門天皇以下五朝に歴仕して、攝政關白となつた。曆仁元年刺髮(號行惠)、建長四年二月廿一日歿、年六十一。光明峰寺入道といふ。その子頼經は鎌倉將軍となつた。著書に日記「玉葉」があり新勅撰以下の各勅撰集に歌がある。

(3) 實 朝 「金槐和歌集」の條參照。  
(4) 實 氏 藤原公經の子。土御門天皇以下の六朝に仕へて、從一位太政大臣に至つた。文應元年刺髮(號實空)、文永六年六月七日歿、年七十六。世に常盤井入道といふ。新勅撰以下の各勅撰集に歌がある。

第三篇 鎌倉室町時代 (和歌)

成立  
組織  
内容

歌人

新勅撰和歌集

本集の歌は概して平明である。「幽齋聞書」に「新古今は花すぎたりとて、新勅撰には實を以て根本とせり」と見えてゐる。蓋し撰者定家の和歌に對する後年の好尚を卜すべきものであらう。

「古今」以下「新古今」までの八集を八代集といふに對し、本集以下續後撰・續古今・續拾遺・新後撰・玉葉・續千載・續後拾遺・風雅・新千載・新拾遺・新後拾遺・新續古今の十三集は十三代集と呼ばれてゐる。

古寫本

○定家自筆本 二冊 細川侯爵家藏

版 本

○二十一代集 ○國歌大系 (第五卷) ○國歌大觀

註釋書・研究書

○新勅撰抄 寫二十卷 堯 眞

○新勅撰集評註 二卷 契 沖 元祿十二年成 (契沖全集)

集中の歌を抜出して註解・批評を加へたもので、初に總論がある。「新勅撰集抄」「新勅撰集評註」「新勅撰斥非」「雜勅撰」などの異名があるが、皆著者の命名ではないらしい。契沖の自筆本が圓珠庵に現存する。

○新勅撰和歌集抄 八卷 祖 能 寛政十一年

○美濃廼家苞折添 三卷 本居 宣長 寛政九年 (本居宣長全集)

集中の和歌六十餘首を抜出して評註を加へてゐる。

○新勅撰類礎 一卷 著者 未詳

○新勅撰愚考 一卷 黒川 眞頼

○歴代和歌勅撰考 (卷四) 吉田 令世 (存採叢書)

○新勅撰集の成立について 石村 貞吉 (國語と國文學昭和六ノ七)

○新勅撰和歌集の一考察 谷 亮平 (國語と國文學昭和七ノ一)

○新古今・新勅撰兩集の風格の差の原因に就いて 風卷 景次郎 (文學昭和八ノ十一)

◎續後撰和歌集 (しよくごせんわかしふ) 二十卷 藤原 爲家撰

勅撰歌集の第十。藤原爲家が、後深草天皇の實治二年七月、後嵯峨院の院宣を奉じて、三年後の建長三年十二月に撰進したもの。奏覽の日について、「拾芥抄」は十二月二十七日、「勅撰次第」は十二月二十五日としてゐる。「歴代和歌勅撰考」に、「新古今」の例に倣つて五人の撰者が定められたが、衣笠の前内大臣(家良)が薨じたので、四人で撰ばれた由を記した「五代帝王物語」の記事を引いて居り、「日本文學大辭典」の本集の解説にも、これを踏襲してゐるが、「五代帝王物語」の記事は、「續古今」を指すもので、本集には關係がない。二十卷を春上中下・夏・秋上中下・冬・神祇・釋教・戀一・二・三・四・雜上中下・醫旅・賀に部立し、序はない。歌數は「拾芥抄」「勅撰次第」共に千三百六十八首と記してゐる。

作者

歌を多く採られた作者は、定家(四十三首)・實氏(三十一首)・良經(二十七首)・俊成(二十六首)・後鳥羽院(二十五首)・土御門院(二十三首)・後嵯峨院(二十首)・道家・家隆・慈圓(各十八首)・知家(十七首)・和泉式部(十五首)・基俊・信實(各十四首)・順徳院・實朝・公經(各十三首)・家良(十二首)・爲家・西行・入麿(各十一首)・俊成女(十首)などで、概して新古今時代の人が多く、また「新勅撰」には入れ奉らなかつた後鳥羽・土御門・順徳三院の御歌を多く載せてゐることが注意を惹く。當代の歌人としては、撰者爲家の外、知家・信實などが名高い。本集の歌風は「新勅撰」の傾向を承けて、更に平明の度を加へてゐる。烏丸光廣の「耳底記」には、「千載」「新勅撰」に本集を合せて、二條家では家の三代集といふ習であることを述べ、「幽齋聞書」には、「此集正風體、花實相應、初心の學、最も肝要なる由先達稱之」と記されてゐる。なほ「續古今」の序には十代集の語が見えるが、それは「古今」から本集までを指してかく呼んだものである。

註(1) 爲家 藤原定家の子。藏人頭・參議兼侍從・右兵衛督・右衛門督などを經て、仁治二年權大納言、建長二年民部卿に至つた。「續後撰」を撰した外、「續古今」の撰にも掌つた。康元六年病によつて出家、融覺と號した。別に辨眞の號があり、また中院禪門・民部卿入道などともいふ。建治元年五月一日歿、年七十八。その子孫二條・京極・冷泉の三家に分れ、歌道の上に對立抗争を生じた。著書に「詠歌一體」(八雲口傳ともいふ)、「後撰集正義」などがあり、家集「爲家集」及び「爲家卿千首」の外、歌は「新勅撰」以下の各勅撰集に多數採られてゐる。

(2) 知家 藤原顯家の子。「新古今」撰者の一人なる有家の甥。正三位。出家して蓮性と號した。はじめ歌を定家に學んだが、定家の歿後、その子爲家と相反目し、實治二年の後嵯峨院御歌合における判者爲家の判を論難し

歌風

諸本

古寫本

○住吉文庫本 一冊 鎌倉時代寫

片假名の書入があり、その字體より推して鎌倉時代の書寫であらうと思はれる。

版

○二十一代集 ○國歌大觀 ○國歌大系(第五卷)

註釋書・研究書

○美濃の家苞折添 三卷 本居宣長(本居宣長全集)

上卷に、本集の和歌六十餘首を抜いて評釋してゐる。

○歴代和歌勅撰考(卷四) 吉田令世(存採叢書)

◎續古今和歌集(しよくこさんわかしふ) 二十卷 藤原爲家等撰

第三篇 鎌倉室町時代(和歌)

參考書

て、「蓮性陳狀」を奉つた。歌は「新古今」以下の各勅撰に採られてゐる。

(3) 信實 藤原隆信の子。四位陸奥守。入道して寂西といふ。和歌の外、書畫に巧であつた。文永二年歿。「井蛙抄」に「故宗匠(爲世)云、民部卿入道(爲家)は信實朝臣をば無雙の歌よみに思はれたりき。續後撰巻頭にいれんとて、立春歌十首許書て給はらんと云つかはされたれば、それは何の御要にか候らんとて、書ても出されず、卑下の心も幽玄なりき」とあり、爲家が信實を推重したことが窺はれる。家集及び「今物語」(別項)の著があり、「新勅撰」以下、「風雅」を除く各勅撰集に歌が採られてゐる。

成立

勅撰歌集の第十一。正元元年三月十六日、後嵯峨院の院宣により藤原爲家が撰集の命を承けたが、弘長二年に至つて、爲家の外に基家・家良・行家・光俊の四人が撰者に加へられ、そのうち家良は文永元年九月十日に歿したので、他の四人の手で、文永二年十二月二十六日に撰進した。「續後撰」の後十四年である。翌文永三年三月十二日「新古今」の場合に倣つて竟宴が行はれた。

名稱

名稱については、本集の假名序に、「この集を續古今といへることは、延喜に古今集を撰ばれて後、他の勅撰おほく隔たれども、重ねて元久に新古今と名づけらる。そのうへ古今の字をなほ用ゐるは、すなはちこの三たびの集をもちて、とりわきまさしきただちと相つぎて、永き世にもつたへ、時の人にも知らしめんがためなり」とあるのによつて明らかである。

内容

二十卷を、春上下・夏・秋上下・神祇・釋教・離別・露旅・戀一・二三四五・哀傷・雜上中下・賀に部立し、後嵯峨院の御作に擬した假名・眞名の兩序を添へてある。歌数は「拾芥抄」に千九百七十二首、「勅撰次第」に千九百十八首としてゐるが、「國歌大觀」には千九百二十五首を収めてゐる。假名序に「一ちち」と記し、眞名序に「取捨分得二千首」と記したのは概數であらう。

歌人

集中に多く歌を採られてゐる歌人は、宗尊親王(六十七首)・實氏(六十首)・定家(五十六首)・後嵯峨院(五十首)・後鳥羽院(四十九首)・爲家(四十二首)・家隆(四十一首)・土御門院(三十七首)・順徳院(三十五首)・知家(二十九首)・良經・光俊・俊成(各二十八首)・信實(二十六首)・家良・人麿(各二十五首)・道家(二十首)・行家・爲氏(各十七首)・貫之・基家(各十六首)・實雄・雅經・俊頼(各十四首)等である。

特色

本集は「新勅撰」「續後撰」の平淡を避けて、撰歌の方針・編輯の體裁などすべて「新古今」に範を取らうとした跡が見えるが、全體として際立つた特色を具へてゐない。

註(1) 基家 藤原良經の子、道家の弟。嘉祿三年内大臣。後九條前内大臣といふ。弘安三年七月十一日歿、年七十八。「續後撰」以下、「風雅」を除く各勅撰集に歌がある。

(2) 家良 藤原忠良の子。正二位内大臣。衣笠内大臣といふ。文永元年九月十日歿、年七十三。「新勅撰」以下、「風雅」を除く各勅撰集に歌がある。

(3) 行家 藤原知家の子。「詞花集」の撰者顯輔の五代の裔。從二位。建治元年正月十一日歿。「續後撰」以下の各勅撰集に歌がある。

(4) 光俊 藤原光親の子。四位右大辨。出家して辨入道眞觀といつた。歌ははじめ二條家に學んだが、後やや異風の詠をなして、爲家と合はず、爲家撰の「續後撰」に對して「續後撰の雜」をつくつたといはれる(井蛙抄)。建治二年歿、年六十八。「新勅撰」以下の各勅撰集に歌がある。

(5) 宗尊親王 後醍醐天皇の皇子。一品中務卿を経て、建長四年より文永三年まで鎌倉の將軍職につかれた。歌は光俊を師範として學ばれた。文永十一年薨、御年三十二。御歌集「瓊玉和歌集」十卷があり、「續古今」以下の各勅撰集に御歌がある。

諸本

版本

○二十一代集 ○國歌大觀 ○國歌大系(第五卷)

第三篇 鎌倉室町時代(和歌)



参考書

註釋書・研究書

○美濃の家苞折添 三卷 本居宣長（本居宣長全集）

本集の歌四十餘首を抜いて評釋してゐる。

○歴代和歌勅撰考（卷四） 吉田令世（存探叢書）

◎續拾遺和歌集（しよくしふわかしふ）二十卷 藤原爲氏撰

勅撰歌集の第十二。龜山院の院宣により、藤原爲氏の撰進したもの。奉宣並びに奏覽の年月について、「拾芥抄」は文永十一年奉宣、弘安二年十二月二十七日奏覽としてゐるが、「尊卑分脈」「勅撰目錄」「増鏡」「勅撰次第」などの記載によつて、建治二年八月奉宣、弘安元年十二月二十七日奏覽とすべきであらう。

二十卷を春上下・夏・秋上下・冬・雜春・雜秋・釋旅・賀・戀・二三四五・雜上中下・釋教・神祇に部立し、序はない。歌數は「拾芥抄」に千六百首、「勅撰次第」に千四百四十一首としてゐるが、國歌大觀本は千四百六十一首を收めてゐる。部立に雜春・雜秋の類を設けた點、「拾遺集」の頃以來の歌を採つた點など、「拾遺集」を目標としたことを示し、集名の由來もそこにあることが分る。

集中の主なる歌人は、爲家（四十一首）・後嵯峨院（三十三首）・實氏・定家（各二十八首）・俊成（二十二首）・實經・爲氏（各二十一首）・龜山院・信實（各二十首）・後鳥羽院（十九首）・宗尊親王・良經・家良（各十八首）・家隆・行家（各十七首）・土御門院・知家（各十六首）・順徳院・道家・光俊（各十五首）などである。

歌人

内容

成立

歌風

諸本

参考書

成立

内容

「増鏡」(老の波)に本集について、「たましひあるさまにはいたく侍らざめれど、艶には見ゆると時の人々申侍りけり。」と記し、「井蛙抄」には、「續拾遺をば勅舟集といふ。善(善固の武士の意)おほく入りたる故なり」と記してゐるが、特に擧ぐべき特色はない。

版 本

○二十一代集 ○國歌大觀 ○國歌大系(第五卷)

註釋書・研究書

○美濃の家苞折添 三卷 本居宣長（本居宣長全集）（本集の歌三十首を抜いて評釋してゐる。）

○歴代和歌勅撰考（卷四） 吉田令世（存探叢書）

◎新後撰和歌集（しんごせんわかしふ）二十卷 藤原爲世撰

勅撰歌集の第十三。後宇多院の院宣を奉じて、藤原爲世の撰進したもの。奉宣は後三條天皇の正安三年十一月二十三日、奏覽は同じく嘉元元年十二月十九日で、「續拾遺」の後二十六年である。

二十卷を春上下・夏・秋上下・冬・離別・釋旅・釋教・神祇・戀・二三四五六・雜上中下・賀に部立し、序はない。

第三篇 鎌倉室町時代（和歌）

歌数は「拾芥抄」には千九百七十首、「勅撰次第」には千六百二首といひ、國歌大觀本は千六百六首を収めてゐる。「勅撰次第」に「近古限年紀事、自天仁元年至正安三年」と見え、「金葉集」の頃以後の歌を集めたものと思はれる。

集中に歌の多い歌人は、定家(三十二首)・爲家(二十八首)・實兼・爲氏(各二十七首)・龜山院(二十五首)・基忠(二十首)・伏見院・後宇多院・後一條院・俊成・家隆(各十八首)・宗尊親王・津守國助(各十六首)・後嵯峨院・家良・實氏・道玄(各十五首)などで、撰者爲世の歌は十一首である。

國助をはじめ、國平・國冬・經國・國道ら津守氏を名のる住吉の神官が多く入つてゐるために、「津守集」と呼ばれた由が「異本井蛙抄」に見えるが、歌風特性の特記すべきものがない。

(註) 藤原爲世 爲氏の子。正二位權大納言。二度勅撰集の撰者となつた。嘉曆四年朝受して明釋と號し、延元三年歿。「續拾遺」以下の各勅撰集に歌がある。

版 本

○二十一代集 ○國歌大觀 ○國歌大系 (第六卷)

参考書

註釋書・研究書

○美濃の家苞折添 三卷 本居宜長 (本居宜長全集)

本集の歌十一首を抜いて評釋してゐる。

○歴代和歌勅撰考 (卷四) 吉田 令世 (存探叢書)

### ◎玉葉和歌集 (ぎよくえふわかしふ) 二十卷 藤原爲兼撰

成立

勅撰歌集の第十四。伏見院の院宣により<sup>(註)</sup>藤原爲兼の撰進したもの。奉宣・奏覽の年月について諸説があり、「勅撰目錄」「勅撰次第」一本は應長元年十月三日奉宣、正和元年三月二十九日奏覽とし、「勅撰次第」他本は應長元年七月二日奉宣、正和三年三月十九日奏覽とし、「拾芥抄」は正和二年八月奏覽としてゐるが、「歴代和歌勅撰考」は「勅撰目錄」「勅撰次第」一本に従つて、應長元年十月三日奉宣、正和元年三月二十九日奏覽と定むべきかといつてゐる。但し「増鏡」(うら千鳥)には、三月二十八日奏覽の由に記して居り、正確なことはまだ分らない。

二十卷を春上下・夏・秋上下・冬・賀・旅・戀一二三四五・雜一二三四五・釋教・神祇に部立し、序はない。歌数は「拾芥抄」に二千八百三首、「勅撰次第」に二千七百十五首としてゐるが、國歌大觀本は二千七百八十七首を収めてゐる。

内容

歌人

集中に多く歌を採られた歌人は、伏見院(七十六首)・定家(六十八首)・從二位爲子(五十九首)・實兼(五十七首)・俊成(五十六首)・爲家(五十三首)・西行(四十九首)・永福門院(四十三首)・爲兼(三十三首)・源親子(三十二首)・實氏(二十九首)・貫之(二十六首)・入麿(二十五首)・慈鎮(二十一首)・宗尊親王・基忠(各二十首)・和泉式部(十九首)などで、伏見院をはじめ持明院統及び京極家關係の人が目立つてゐる。永福門院は實兼の女で伏見院の後、從二位爲子は撰者爲兼の妹で、永福門院に奉仕してゐた人である。また入麿・貫之ら萬葉・古今時代

特性

の人を入れたのも「新後拾遺」その他と違ふところである。  
「續拾遺集」以下勅撰集の撰者は殆んど二條家からのみ出てゐる中であつて、本集のみは京極家の撰者の手に成つた點で注意すべきである。京極家の歌風は二條家のそれが因襲的で平板なのに對して、革新的な傾向があり、心を重んじて、或程度まで用語の自由を認めてゐる。本集は後の「風雅集」と共に、京極家の歌風を代表するものと見られる。

(註) 藤原爲兼 爲教の子。京極家の代表的歌人。正三位權大納言。伏見天皇の御信任を得て、永仁元年爲世らと共に撰集の仰を受けたが、實現に至らなかつた。永仁六年政治的策謀のため佐渡に配流せられ、五年後嘉元元年に召返された。花園天皇の延慶年間に勅撰集の撰者とならうとしたが、爲世はこれに反對して訴狀を奉り、爲兼もまた陳狀を奉つて辯駁し、爲世は更に訴狀を奉つた。いはゆる「延慶兩卿訴陳狀」(群書類從二九三)がそれだ。二條京極兩家の軋轢はこれ以後ますます甚しくなつたが、伏見院の仰せて「玉葉集」は爲兼の手に成つたのである。正和二年伏見院御出家の跡を追うて剃髮、法名を蓮覺、後靜覺と呼んだ。元弘二年三月二十一日、年七十九歳で歿したと傳へられるが、「新千載集」に元弘二年より三年後の建武二年九月十三夜に内裏でよんだ彼の歌が出てゐるのと矛盾し、何れかに誤があると思はれる。歌論に「爲兼卿和歌抄」(一卷)の著があり、「爲兼卿家集」同補遺「爲兼卿遠所詠歌」爲兼卿百首などの外、續拾遺・新後撰・玉葉・風雅・新千載・新拾遺・新後拾遺・新續古今の諸勅撰集に歌がある。(参考) 上田英夫「歌人京極爲兼」(歌と觀照昭和六年十月以下)

諸本

版本

参考書

○二十一代集 ○國歌大觀 ○國歌大系 (第六卷)

註釋書・研究書

○美濃の家苞折添 三卷 本居宣長 (本居宣長全集)

中巻に本集の歌二十首を抜いて評釋してゐる。

○歴代和歌勅撰考 (卷四) 吉田令世 (存探叢書)

◎續千載和歌集 (しよくせんざいわかしく) 二十卷 藤原爲世撰

勅撰歌集の第十五。後醍醐天皇の御代に後宇多院の院宣によつて藤原爲世の撰進したもの。奉宣・奏覽の年時について諸説があり、奉宣は「勅撰目錄」「勅撰次第」に文保二年四月十九日、「尊卑分脈」「勅撰次第」一本に同年十月三十日とし、奏覽は「拾芥抄」「尊卑分脈」に文保三年(元應元年)四月十九日、「勅撰次第」に同年七月二十五日、「増鏡」に元應二年四月十九日、「勅撰目錄」「勅撰次第」一本に同年七月二十五日としてゐる。文保二年に院宣を承けて翌元應元年に奏覽とするのは、撰修期間短きに失するから、元應二年奏覽説に従ふべきであらう。

内容 二十卷を春上下・夏・秋上下・冬・雜體・露旅・神祇・釋教・戀一・二・三・四・五・雜上中下・哀傷・賀に部立し、序はない。雜體の目を設けて、長歌五首、反歌三首、旋頭歌五首、折句歌四首、物名十五首、俳諧歌二十首を収めてゐるのが注意を惹く。歌數は「拾芥抄」に二千二百二十首、「勅撰次第」に二千九十七首としてゐるが、國歌大

第三篇 鎌倉室町時代 (和歌)

三四五

歌人

観本は二千百五十九首を収めてゐる。

集中に多く歌のある歌人は、後宇多院(五十首)・實兼(四十五首)・爲氏(四十一首)・爲世(三十四首)・爲家(二十七首)・定家(二十六首)・後二條院・覺助法親王・國助(各二十一首)・後醍醐天皇・俊成・公雄(各十九首)・龜山院・伏見院(各十八首)などで、皇室では大覺寺統、民間では二條派を優位におき、持明院統と京極派とは、西園寺實兼を別として他は一般に冷遇され、爲兼及びその妹爲子は一首も採られてゐない。和歌の四天王といはれた兼好・頼阿・淨辨・慶雲のうち前三者の詠は各一首づつ採られてゐる。

「増鏡」(秋のみ山)に、「新後撰集と同じ撰者の事なれば、多くはかの集にかはらざるべし。」とあるやうに、因襲的な二條家の傳統を墨守したもので、取立てていふべき特徴もないが、「増鏡」(秋のみ山)に、爲世は本集撰進の仰を拜した後、玉津島神社に詣でて、「今ぞしるむかしにかへる我が道のまことを神もまもりけるとは」と詠じたといひ、「玉葉のねたかりしも今ぞむねあきぬらんかし」と評してゐるやうに、爲兼と「玉葉集」とに對する挑戦的態度で撰ばれた集として、歌風の上でもかれと對立的な關係にあるものといへよう。

諸本

○二十一代集 ○國歌大觀 ○國歌大系 (第六卷)

参考書

註釋書・研究書

○美濃の家苞折添 三卷 木居宣長 (本居宣長全集)

中巻に本集の歌十一首の評釋がある。

○歴代和歌勅撰考 (卷四) 吉田令世 (存疑叢書)

◎續後拾遺和歌集 (しよくごしふるわかしふ) 二十卷 藤原爲藤・同爲定撰

勅撰歌集の第十六。鎌倉時代に於ける勅撰歌集の最後のもの。元亨三年七月二十二日に藤原爲藤が後醍醐天皇の勅命を拜して、撰修に當つたが、翌四年七月十七日に爲藤は病歿したので、更にその甥爲定が拜命して選進した。奏覽は「拾芥抄」に正中二年十二月八日としてゐるが、「増鏡」「勅撰次第」によれば、正中二年十二月十八日にまづ四季の部を奏覽し、その翌年(嘉暦元年)に至つて全部完成したもののやうである。集成つて後醍醐天皇がおほめのお言葉を下さつたので、爲定は「今ぞしる拾ひし玉のかすく」に身をてらすべき光ありとは」とよんで差上げ、天皇より「かすく」にあつむる玉のくもらねばこれも我が世の光とぞなる」と御返しの御製を賜はつたことが「増鏡」(春のわかれ)に記されてゐる。

二十巻を、春上下・夏・秋上下・冬・物名・離別・露旅・賀・戀・一・二・三・四・雜上中下・哀傷・釋教・神祇に部立し、序はない。物名の部を設けたのは、「拾遺集」の先例に倣つたものであらう。歌数は「拾芥抄」に千三百四十三首、「勅撰次第」に千三百五十三首とあり、國歌大觀本は千三百四十七首を収めてゐる。

歌の多い歌人は、爲氏(二十四首)・爲家・爲世(各二十一首)・後宇多院・後醍醐天皇(各十七首)・公雄・俊成(各十五首)・伏見院・覺助法親王・冬平・實兼(各十三首)などで、撰者爲藤は十二首、爲定は七首である。京極派は爲兼が二首あるだけで、爲兼・爲子は一首も採られない。歌風は概ね平板低調である。

第三篇 鎌倉室町時代 (和歌)

成立

内容

歌人

續後拾遺和歌集 風雅和歌集

三四八

註(1) 爲 藤 藤原爲世の第二子。正二位權中納言。元亨四年(正中元年)七月十七日没年五十。新後撰以下の各勅撰集に歌がある。

(2) 爲 定 藤原爲道の子。爲世の甥。爲世の生前その養子となつた。正二位大納言。「續後拾遺集」の外「新千載集」を撰した。正和十五年没、年六十八。玉葉以下の各勅撰集に歌がある。

版 本

○二十一代集 ○國歌大觀 ○國歌大系 (第七卷)

研究書

○歴代和歌勅撰考 (卷四) 吉田 令 世 (存採叢書)

◎風雅和歌集 (ふうがわかしふ) 二十卷 花園院御撰

勅撰歌集の第十七。<sup>(註)</sup>花園院の御自撰で、「勅撰目錄」によれば、康永三年(興國五年)に御着手、藤原公蔭・同爲秀・同爲基を校合に召仕はれて、貞和二年(正平元年)十一月九日に御完成、「拾芥抄」「園太曆」「勅撰次第」に同年十一月九日竟宴が行はれたことが記されてゐる。

二十卷を春上中下・夏・秋上中下・冬・旅・戀・一・二・三・四・五・雜上中下・釋教・神祇・賀に部立し、花園院御作の假名と眞名の兩序を添へてゐる。歌数は「拾芥抄」に二千二百十首、「勅撰次第」に二千二百八首とあり、國歌大觀本には二千二百一首を収めてゐる。

諸 本

参考書

成 立

内 容

歌 人

歌 風

諸 本

集中に多くの歌を採られた歌人は、永福門院(七十一首)・伏見院(六十八首)・爲兼(五十二首)・花園院(四十九首)・定家(三十五首)・後伏見院(三十四首)・進子内親王(伏見院の皇女。三十二首)・光嚴院(後伏見院の皇子。三十首)・從二位爲子(爲兼の妹。三十首)・俊成(二十九首)・貫之(二十七首)・爲家(二十六首)・永福門院内侍(二十五首)などで、持明院統と京極派の人々が優位を占め、大覺寺統は後宇多院八首、後二條院七首、後醍醐天皇三首、二條派は爲家を除けば、爲定十四首、爲氏八首、爲世七首、爲藤四首といふやうに輕視され、爲道や從三位爲子(爲世の女)は一首も採られてゐない。

假名序に「元久の昔の跡を尋ねて、古き新しき言葉目につき心に適ふを撰び集めてはた卷とせり。名づけて風雅和歌集といふ。これ色に染み情に引かれて目の前の興をのみ思ふにあらす。正しき風古の道末の世に絶えずして、人の惑を救はむがためなり」と記されてゐるやうに、和歌の正道を示して後世の模範たらしめようとの御抱負からお撰びになつたものであるが、宸記に「頃年以來、憶念彼(爲兼)口傳等、又以内外典之深儀思之、舊院(伏見)並爲兼卿所立之儀、寔是正義也」と見えるやうに、花園院は京極派の立場をお取りになつたから、爲兼撰の「玉葉集」と相呼應して、二條派には見られない清新な作が採られてゐる。

(註) 花園院 伏見天皇の第二皇子。諱は富仁。御在位十一年、文保二年東宮尊治親王(後醍醐)に御讓位、剝禪して遁行と號し給うた。「風雅集」御撰の後二年、貞和四年(正平三年)十一月十一日崩御、御年五十三。御家集があり、玉葉以下の各勅撰集に御製がある。

版 本

第三篇 鎌倉室町時代 (和歌)

三四九

参考書

○二十一代集 ○國歌大觀 ○國歌大系 (第七卷)

研究書

○風雅集三踏四雪之口訣 一卷 河瀬菅雄

○歴代和歌勅撰考 (巻五) 吉田令世

◎新千載集 (しんせんざいしふ) 二十卷 藤原爲定撰

成立

勅撰歌集の第十八。延文元年(正平十一年)六月十一日(岡太膳「勅撰次第」による。「尊卑分脈」拾芥抄は十日)足利尊氏の執奏により、光嚴院から藤原爲定に撰集の輪旨が下り、同年七月二十八日に着手して、延文四年(正平十四年)四月二十八日に四季の部六巻を奏覽し、ついで同年十二月二十五日に全部を奏覽した。

内容

二十巻を春上下・夏・秋上下・冬・雜別・釋教・神祇・戀一・二三四五・雜上中下・哀傷・慶賀に部立し、序はない。歌数は「勅撰次第」に二千三百五十九首とあり、國歌大觀本には二千三百六十四首を収めてゐる。

歌人

集中に歌の多い歌人は、爲世(四十二首)・爲定(三十六首)・伏見院(二十七首)・爲氏(二十五首)・後醍醐天皇(二十四首)・後宇多院・尊氏・爲世女爲子(各二十三首)・爲藤(二十二首)・爲家(二十一首)・光嚴院・爲道(二十首)などで、概して二條家の歌が優位を占めてゐるが、尊氏の北朝擁立後、二條家が持明院統に接近した結果として、京極家排斥の態度が幾分緩和され、「後拾遺集」に一首も入らなかつた爲兼の歌が十五首採られてゐる。特徴として特にあげるべきものがない。

諸本

版本

○二十一代集 ○國歌大觀 ○國歌大系 (第七卷)

註釋書・研究書

○美濃の家苞折添 三巻 本居宣長 (本居宣長全集)

○歴代和歌勅撰考 (巻五) 吉田令世 (存探叢書)

○新拾遺和歌集 (しんしゆわかしふ) 二十巻 藤原爲明撰

成立

勅撰歌集の第十九。後光嚴院の貞治二年(正平十八年)二月二十九日、足利義詮の執奏によつて、藤原爲明に撰集の輪旨が下り、同年四月十六日事始、同三年四月二十日四季の部六巻を奏覽し、なほ業を續けるうちに完成に至らないで、同年十月二十七日に撰者爲明が歿したので、頼阿がその後をつぎ、同年十二月に功を終へた。頼阿の引繼いだのは、「正徹物語」に雜の篇か戀の篇からと見えるが、まだ詳らかでない。

内容

二十巻を春上下・夏・秋上下・冬・賀・雜別・釋教・哀傷・戀一・二三四五・神祇・釋教・雜上中下に部立し、序はない。雜下に「短歌」として長歌五首と反歌一首を採り、なほ旋頭歌三首、折句歌六首、物名十首、俳諧歌十七首を収めてゐるが、これは集名の典據となつた「拾遺集」に一部の範を取つたものであらう。歌数は「勅撰次第」に千七百五十八首とあるが、國歌大觀本には千九百二十首を収めてゐる。

第三編 鎌倉室町時代 (和歌)

新拾遺和歌集

歌数の多い作者は爲藤(二十七首)・爲世(二十四首)・定家(二十三首)・爲家(二十二首)・伏見院・爲定(各二十首)・家隆(十九首)・爲氏(十八首)などで、武家では尊氏が十六首、義詮が十四首採られ、撰者爲明のは十一首、頼阿のは九首載つてゐる。

註(1) 藤原爲明 爲藤の子。元弘の變に北條氏に従ひ、捕へられて土佐に流されたが、後免され、延文四年(正平十四年)權中納言兼侍從に任じた。貞治三年(正平十九年)十月二十七日、「新拾遺集」撰修の業半ばにして歿。年七十。續千載以下の各勅撰集に歌がある。

(2) 頼阿 俗名二階堂貞宗、下野守光貞の子。比叡山・高野山に上つて修業し、歌は藤原爲世に學んで、二條家の正風を傳へ、同派中興の祖と稱せられた。光嚴院・後光嚴院の殊遇を受け、二條良基・足利尊氏・同義詮らと親しかつた。西行を敬慕して東山雙林寺なるその舊跡に草庵を結んだ。應安五年(文中元年)三月十三日入寂、年八十四。家集に「草庵集」「續草庵集」、著書に「井蛙抄」「愚問賢註」「高野日記」「十樂庵記」があり、續千載以下の各勅撰集に歌がある。

版本

○二十一代集 ○國歌大觀 ○國歌大系 (第八卷)

参考書

註釋書・研究書

○美濃の家苞折添 三卷 本居宜長 (本居宜長全集)

下卷に集中の歌十八首を抄出して評釋してゐる。

○歴代和歌勅撰考 (卷五) 吉田令世 (存探叢書)

◎新葉和歌集 (しんえふわかしふ) 二十卷 宗良親王撰 弘和元年成

成立

宗良親王が南朝の君臣の詠を撰集せられたもの。二十一の勅撰集以外ではあるが、勅撰に准ずる歌集としてここに入れて解説する。本集は天授年間に着手されて、弘和元年に完成し、十月十三日長慶天皇より勅撰集に准ぜられる由の綸旨があり、同年十二月三日に奏覽せられた。「耕雲口傳」及び京都富岡謙蔵氏所藏の本集古寫本奥書によつて、花山院長親(耕雲)・師成親王(法名惠梵。宗良親王の甥)などが撰歌の事に與つたことが知られる。撰集の動機については、「歴代和歌勅撰考」に北朝方の撰集に南朝の人々の歌が入れられないのを遺憾に思召されて、南朝の歌を集めようと思はれたのであるといふ説と、「續後拾遺」や「新千載」は撰者が爲藤・爲定で、それ／＼親王の伯父・從兄に當る關係であるのに、足利氏に憚つたためか、親王の御歌をこれらの集に入れ奉らなかつたので、みづから本集を撰せられたのであるといふ説とをあげてゐる。

宗良親王御作の假名序があり、その中に「かみ元弘のはじめより、しも弘和の今に至るまで、世は三つぎ年は五十とせの間、假の宮にしたがひ仕うまつりて、折にふれ時につけつゝいひあらはせる言の葉どもを、玉のうてな金の殿より、瓦のまど繩のとぼそのうちに至るまで、人をもちて事を捨てず、撰び定むるところ、千うた四もちあまり、名づけて新葉和歌集といへり」とあつて、南北朝分立以來五十年間における南朝の君臣の歌のみを集めてある。歌數、通行本は千四百二十首(新葉集作者部類)には千四百二十八首とある)、二十卷を春上下・夏・秋上下・冬・離別・釋旅・神祇・釋教・戀一二三四五・雜上中下・哀傷・賀に部立してゐる。

内容

歌人

歌の多い歌人は、後村上天皇(百首)・宗良親王(九十九首)・長慶天皇(五十三首)・妙光寺内大臣花山院家賢(五十二首)・文貞公花山院師實(四十九首)・後醍醐天皇(四十六首)・冷泉入道前右大臣洞院公泰(四十五首)・尊良親王(四十四首)・前中納言藤原爲忠(四十二首)・關白左大臣藤原教頼(二十八首)・中院入道一品北畠親房(二十七首)・右近大將花山院長親母(二十六首)・右近大將長親(二十五首)・春宮大夫高師兼(二十四首)などである。

特性

南朝の君臣が非常時に際して、流離窮迫の間に成つた歌が多く、或は慷慨の氣を吐き、或は忠誠の情を訴へ、悲壯沈痛の色が漲つてゐる點は、他の歌集に見られない特色である。但し單に花鳥風月を因襲的にうたつたに過ぎないものも交つてゐて、その類の歌は概ね二條派流の平板な風を傳へてゐる。

(註) 宗良親王 後醍醐天皇の第八皇子。はじめ薙髮して尊澄法親王といひ、妙法院に住し、天台座主となられたが、元弘の役に御兄護良親王と共に國事に参劃し、足利尊氏の叛するに及んで、北畠親房・同顯家らと共に伊勢・遠江・信濃・美濃などの各地に轉戦し、のち吉野朝にあつて長慶天皇を補翼し給うた。弘和元年本集を撰進せられた時は御年七十であつたが、その後元中六年(御年七十八)正月までの間に薨せられたらしい。御母は爲世の女贈從三位爲子で、親王は爲定の御從兄弟に當り、御血統並びに親戚の關係上、御歌は二條家の風を傳へられた。御家集に「李花集」があり、また「長慶院御千首」中に親王の千首歌が傳はつてゐる。

諸本

古寫本

○富岡氏藏本 寛正四年寫

奥に「斯集南朝慶壽院法皇御在位之時、詔於予叔父中務卿宗良親王、而所被令撰也(中略)、依得付屬應此撰舉、作

者皆以亡逝矣、雖現存者兩三輩而已(下略)」といふ師成親王の應永三十二年の談話を傳へ、これによつて師成親王も撰歌の事にあづかつたことが分る。

○前田侯爵家舊藏傳爲重筆本 室町初期寫 ○吉野吉水神社本 室町中期寫

○帝國圖書館本 永正三年寫

古版本

○承應二年本 (六冊) ○寶曆元年本 (四冊) ○無刊記本 (二冊)

活版本

○國歌大觀 ○國民文庫 (第五) ○有朋堂文庫 (第一輯) ○國歌大系 (第九卷)

註釋書・研究書

○頭註新葉集 一冊 村上忠順 明治二十五年

○新葉集作者部類 一卷 榊原忠次 明曆三年成

○歴代和歌勅撰考 (卷五) 吉田令世 (存探叢書・國歌大系)

○新葉和歌集を讀む 鳥野幸次 (國學院雜誌五ノ六以下)

○新葉集の奥書について 中村直勝 (歴史地理十八ノ六)

○新葉和歌集を讀む 岳南道士 (わか竹四ノ十一)

○芳野朝の歌道 武田祐吉 (わか竹七ノ一)

参考書

第三篇 鎌倉室町時代 (和歌)



- 新葉集と李花集 芝野 六助 (わか竹七ノ二)
- 新葉集は長慶天皇の勅撰 八代 國治 (わか竹九ノ十一)
- 南北朝の和歌 川 田 順 (心の花二十八ノ十)
- 新葉和歌集 大野木克豊 (岩波講座「日本文学」)

◎新後拾遺和歌集 (しんごしゆわかしゆ) 二十卷 藤原爲遠・同爲重撰

勅撰歌集の第二十。永和元年(天授元年)六月二十九日に、後圓融天皇から藤原爲遠に勅命が下り、八月から撰修に着手したが、六年後の(永徳元年)八月二十七日、未了のまま爲遠が歿したので、同年十一月更に藤原爲重が命を奉じて事に當り、永徳二年(弘和二年)三月十七日にまづ四季の部を奏覽し、同三年十月二十八日に一應功を終へたが、錯亂があつて重ねて御沙汰を蒙り、翌至徳元年(元中元年)十二月に至つて漸く返納した。爲遠の受命以來十年、爲重が繼いでから三年である。この間に撰集の命を下された後圓融天皇が、永徳二年四月十一日に御退位になり、後小松天皇が即位し給うた。本集の序文が永徳二年三月二十八日の日附になつてゐるのは、表面上後圓融天皇の御在位中に撰進した形にするために、さうしたものであらう。二十卷を春上下・夏・秋上下・冬・雜春・雜秋・離別・羈旅・戀一・二・三・四・五・雜上下・釋教・神祇・慶賀に部立し、二條良基作の假名序が添へてある。哀傷の部を缺き、四季の次に雜春・雜秋の部を設けたのは、「續拾遺集」に

成立

内容

歌人

諸本

参考書

成立

做つたものであらう。歌数は「勅撰次第」に千五百五十四首とあり、國歌大觀本にも同数を収めてゐる。集中に多くの歌を採られたのは、良基(二十八首)・爲定(二十七首)・爲重(二十三首)・近衛道嗣・足利義詮・同義滿(各十九首)・尊氏・定家(各十八首)・爲氏(十五首)・爲家・爲世(各十四首)・後圓融天皇・爲冬(各十三首)などで、爲遠と頼阿は八首づつである。

註(1) 藤原爲遠 爲定の子。中納言。永徳元年(弘和元年)歿、年四十。新千載以下の各勅撰集に歌がある。

(2) 藤原爲重 爲冬の子。爲定の従兄弟。従二位權中納言。歌の外、書畫にも巧であつた。「新後拾遺集」の成つた翌年、至徳二年(元中二年)二月十五日に五十二歳で横死した。新千載以下の各勅撰集に詠がある。

○二十一代集 ○國歌大觀 ○國歌大系 (第八卷)

註釋書・研究書

○美濃の家苞折添 三卷 本居宣長 (本居宣長全集)

下卷に本集の歌二十一首を評釋してゐる。

○歴代和歌勅撰考 (卷五) 吉田令世 (存探叢書・歌學大系)

◎新續古今和歌集 (しんぞくこきんわかしゆ) 二十卷 藤原雅世撰

勅撰歌集の第二十一で最後のもの。後花園天皇の永享五年八月二十五日、藤原(飛鳥井)雅世に撰集の勅命

第三篇 鎌倉室町時代 (和歌)

が下り、同年八月二十三日に四季の部を奏覧し、翌十一年六月二十七日に全部完成返納した。撰者雅世は「新古今集」の撰者の一人なる雅経の七代の裔で、飛鳥井家の出である。勅撰集は爲氏が「續後撰集」を撰して以来、玉葉・風雅の二集を除く外は、代々二條家からのみ撰者を出してゐたのであるが、本集に至つて二條家の手を離れた。しかし飛鳥井家は雅有の時代に爲家の指南を受けて以来、歌道の上で二條家の旁系の如き關係にあつたのである。

二十卷を春上下・夏・秋上下・冬・賀・釋教・離別・釋旅・戀一二三四五・哀傷・雜上中下・神祇に部立し、一條兼良作の眞名・假名の兩序を具へてゐる。序は日附によれば、四季奏覧の際に書かれたものである。歌數は「勅撰次第」に二千四百四十四首といひ、國歌大系本も同數を收めてゐる。

集中の主なる歌人は、良經・雅縁(各二十七首)・後小松院(二十四首)・俊成(二十一首)・頼阿・雅世(各十八首)・後鳥羽院・定家(各十八首)・將軍義教・雅經(各十七首)・實繼・爲定・雅有(各十四首)・慶遠(十三首)などであるが、本集のみの作者百八十九人に及び、中に武人・僧侶の多いこと、南朝の歌人が殆ど入らないこと、傀儡あこ・傀儡侍従の名が見えることなどが注意を惹く。

二條家の手を離れた本集は、撰者の關係から飛鳥井家の歌が比較的多いが、歌人の選定概ね公平で、新古今以来の主要なる作者をほぼ網羅し、歌に生氣あるものが多く、しかも勅撰集の最後となつたものとして注意すべきである。

(註) 藤原雅世 雅縁の子。權中納言正二位。嘉吉元年朝髪して祐雅と號した。享徳元年二月一日歿、年六十三。新

内容

歌人

特性

續古今以外の勅撰集には歌がない。

諸本

版本

○二十一代集 ○國歌大觀 ○國家大系 (第八卷)

註釋書・研究書

○美濃の家苞折添 三卷 本居宣長 (本居宣長全集)

下巻に本集の歌十九首を抜いて評釋してゐる。

○歴代和歌勅撰考 (卷五) 吉田令世 (存探叢書・國歌大系)

〔二〕私撰歌集

◎玄玉和歌集(げんぎよくわかしふ) 現存七卷 撰者未詳

假名・眞名の兩序があり、その記事によつて、千餘首の歌を集めて十二卷とし、始に神祇、終に釋教をおいたことが分るが、今は神祇・天地上(春夏)・天地下(秋冬)・時節上(春夏)・時節下(秋冬)・草樹上(春夏)・草樹下(秋冬)の七卷を存するのみで、以下の五卷を缺いてゐる。歌人は藤原俊成・慈圓・藤原定家・藤原家隆・俊惠・藤原有家・寂蓮・西行・道因・顯昭その他で、序中に近き代の歌を集めた由が記されてゐる。

諸本

版本

第三篇 鎌倉室町時代 (和歌)

玄玉和歌集 萬代和歌集 自讃歌

三六〇

○群書類従 卷百四十九 (活版本第七輯)

○萬代和歌集 (まんだいわかしふ) 二十卷 撰者 未詳

上古以來鎌倉時代初期までの和歌の選集で、「千載集」「新古今集」頃の歌人の作が多く採られてゐる。

諸本

○丹鶴叢書 第二十九―三十八冊 (活版本第五冊)

○自讃歌 (じさんか) 一卷 撰者 未詳

解説

後鳥羽院・式子内親王・藤原良經・慈圓・藤原通光・藤原通具・藤原俊成・俊成女・宮内卿・藤原定家・藤原家隆・藤原雅經・寂蓮・藤原秀能・西行等「新古今集」時代の主要な歌人十七人の歌各十首づつを選集したもの。自讃の名は慈圓の「拾玉集」の中にも見えてゐるが、これは後人が各歌人の自讃の歌に擬して集めたものであらう。

諸本

○後集十七家選 一卷 勾當内侍寫 京都帝大藏

註解・挿書を加へて刊行した本もある。

古寫本

参考書

版本

○續群書類従 卷三百七十五 (活版本第十四輯上) ○日本歌學全書 (第七編)

註釋書

○自讃歌抄 一卷(寫) 東常縁

○自讃歌註 三卷 宗 祇 文明十六年成

○宗祇繪抄 三卷 宗 祇 寛文十三年

前の「自讃歌註」に菱川師宣筆の繪を加へて刊行したものである。

○自讃歌註 一卷(寫) 素識 虚幻 宮内省圖書寮藏

○自讃歌飛鳥井抄 一卷(寫)

○ねなしかづら 一卷(寫) 進藤知友

○自讃歌管註 一卷(寫) 惠 南 寛文二年成

○東撰和歌六帖 (とうせんわかくてふ) 現存一卷 撰者 未詳

目録によれば、春・夏・秋・冬・戀・雜に部立し、各部を更に類題して歌を集めてゐるが、現存するのは春の部だけである。歌人には源實朝・北條泰時・同重時・同政村・同時直・同實泰・同長時ら東國の武士が多い。題名

第三篇 鎌倉室町時代 (和歌)

三六一

解説

と併せ考へて關東で撰まれたものかと思はれる。

諸本

版本

○續群書類從 卷三百六十九 (第十四輯上)

◎現存和歌六帖 (げんそんわかろくでふ) 一卷 撰者未詳 建長元年成

解説

後嵯峨院の仰により、草木花鳥を題にしてよんだ歌を集めたもので、建長十二年十二月類聚し畢り、同月二十七日仙洞に奉つた由の跋がある。作者百九十七人、歌八百五十首、爲家・爲氏・知家・信實・道家・隆祐らの詠が多い。

諸本

版本

○群書類從 卷百五十 (活版本第十輯)

◎秋風抄 (しゅうふうせう) 三卷 小野春雄撰 建長二年成

解説

四季・戀・雜に分類して、「新古今」「新勅撰」に漏れた當時の歌三百餘首を集めたもので、建長二年四月十八日の撰者の序があり、その中に古今集序の六歌仙評や通光の「歌仙落書」に倣つて、爲家・知家・信實・行能・俊成女・隆祐・定家・家隆の歌風を品評してゐる。

諸本

版本

○群書類從 卷百五十一 (活版本第十輯)

◎雲葉和歌集 (うんえふわかしふ) 十卷 撰者未詳

解説

人麿・赤人らより北條泰時らに至るまでの歌を集めてゐるが、「新古今」以後のものが多い。春上中下・夏・秋上中下・冬・賀・露旅の十巻を傳へてゐるが、もとは戀・雜などの部門もあつたらうと思はれる。現存の歌数は八百七十四首である。

諸本

版本

○群書類從 卷百五十二 (活版本第十輯)

◎新和歌集 (しんわかしふ) 十卷 藤原爲氏撰

解説

爲氏が宇都宮にゐた時の撰で、別名を「宇都宮打聞新式和歌集」とも「宇都宮打聞新和歌集」ともいふ。「新古今集」以後の歌人定家・家隆・實朝・爲家・知家ら百八十六人の作八百七十二首を集めたものである。

諸本

版本

○群書類從 卷百五十三 (活版本第十輯)

第三篇 鎌倉室町時代 (和歌)